

無題(仮)

中根辰榮

## 第一章

※

何時も此の事が頭を巡つてゐる。

「何故此処に居るのか」

是れ迄の事を整理しやふにも、何処からが正確か、私には曖昧模糊として解らなひ。

鼠色。白色。黒色。天井の色が転転とした事だけが妙に脳裏に焼き付いて離れなひ。

今は白色。ただ、光源の脆弱性と影の存在が黒色にさせてゐる。毎日其れを見てゐるが、最近の黒色は妙にぶれる。或日は白色の効きすぎて自身の裏にまで侵入する。又或日は黒色が効きすぎて自身の所在を失う。一、二時間前まで電球が灯つてゐたが、一定の刻限を過ぎると

「申し訳御座居ませんが、消灯です」

とだけ言つて暖色が外部から消される。得も言われぬ敗北感を感じずには居られなひのである——とは言いつつも、別に苦言を呈したいだとか、断固抗議すると云ひたひ程迄ではなひ事を爾に注記する——。

呆然と穴凹だらけの混凝土<sup>コンクリート</sup>を見つめる。取手付の金属板から何か覗きこんでゐるのに気付いたのは黒色の濃度が僅かながら変化したからであつた。外部との接続は左側の小窓か、右側の金属板の隙間だけである。

左を一瞥して変化が無ひのを確認したのでさう思つたといふ訳である。其処には、青服が立つてゐたのである——暗所ではあるが、昼間に見た青服と容姿がほぼ合致したので判断できた——。

「あ、すみません。起こしてしまひましたか」

オオタさんであつた。此処の見張を任せられてゐる。

「いえ。お気になさらないで」

お互ひに微笑む。

「あそうだ。山田さん、明日ご移動でしたよね」

「はい？ あ、ええまあ」

……矢張此の名前には慣れなひ。正式に授けられたものだとも。たと雖も。

「くれぐれも体調は崩さなひやう。気をつけて」

「ああ。有難う御座います」

「それぢやあ、お休みなさひ」

青服さんを見送る。再び寝台に寝そべる。

……私は、誰なのか……

※※※

ほんの少しかび臭い教室。白髪小柄のご老体先生が口の筋肉を奮つてゐる。

「いやしかしながら私は常々思うんですけどね」

常々思うんですけどね、という文言が来た。こぼれ話のシグナルだ。授業が中盤に差し掛かると必ず言つてくれる。がら空きの机の中からそこに忍ばせたスマホを出す。音をたてないように少しだけ持ち上げて引き出した。ブラウザを開いてトップページのニュースが目に入る。

ここ最近のニュースはイギリスとかのタブロイド紙と大差ないものになった。凋落、と言えはそれまでだけど、そこからまたいつかはスタンスが周回して戻つてくるらしい。父親の言い分だ。言つたの忘れたの、と母親が言う。そうだつけ、という父親。私自身母と同じことを言

いたいと何度思つたか。

ニュースに関することとなると、いつもこの事が頭を巡つてゐる。

ウェブサイトが出しているニュース一覧を見直す。

特段、ニュースサイトとかを好んで覗くわけではない。一瞥して良さそうな記事だけを見る。日によつて食いつきが違ふという事だ。他の人だつて多分そうしてると思う。だけど、自分の近親者が書いたものとなれば話はやはり別になる。パブリックスペースに自身の近しい人が作ったものがある。気にならないわけがないのだ。口が悪いかもしれないが、大衆週刊誌にあるようなスキャンダラスだったりセクシャルだったりする記事を執筆する人の家族はその名前を見たらどういう心境になるんだろう。ああ、でもそもそも論で読みたくもないかも。自分の夫や妻、父や母が低俗に思えてくるなら読まなきゃいい。臭い物に蓋をする、こう昔から言われてるくらいなもの。

「記憶喪失の男性への独自取材決定

（飯田正平）

噂をすればなんとやら。リンクの文字列をタップする。おじいちゃん先生はまだ脱線した話を続けている。机下に隠した小さな液晶に表示された字列を、目で辿り始めた。

「現代社会では、（正式名称は健忘であるが記憶喪失を正式な疾患として捉えるのは）ごく普通の事である。しかしながら、その人々がどのような生活や待遇にあるかをよく知る人はせいぜい行政関係者や保護施設職員に限られるであろう。今回、本記事を担当する赤江良平（あかえ・りょうへい）記者は、ある記憶喪失の男性へとアポイントを取り、彼の生活を数回にわたつて取材、本誌に

『失ったもの、新たなもの』記憶喪失者の生活について』として連載することが決定した。

今回の掲載に際して、担当の赤江記者は『読者の誰もが、ある日突然遭遇する蓋然性のある記憶喪失に対し、現実では想像以上に認識が低い。この連載によって、この疾病に対する考え方をより深めることが出来ればと思う』と意気込みを語っている。

次回より連載を始めるにあたって、取材の経緯や今後の予定について赤江記者に聞いた。以下要約を述べる。

先月半ばの事になるが、とある放送局で、テレビで記憶喪失者の公開捜索を行う番組が放映されていた。言うまでもないが、テレビ番組というものは視聴者の知らざる領域に潜入し、その実態を捉え啓蒙することで視聴者の興味を惹きつけ視聴させる。つまり、行方不明や記憶喪失者は人々にその実態を十分知られていないということである。

しかしながら、逆の立場を考えてみると末恐ろしいと思えてくるのである。多かれ少なかれ記憶を失い、ともすれば自分を失う。そして仮に授けられたアイデンティティと仮の物で生きながらえる。以前のものを取り戻せる保証のないまま、行くあてもないまま過ごさねばならない。本質的な何かを失ったまま生活せざるを得ないのである。そして、失ったものを能動的であれ受動的であれ取り戻ささせる又はさせてあげるためにこのような番組を出演しているのである。ただしこのように行動したところで完全に思い出せることはごく稀である。

このように、信頼できるものなく、満ち足りることもなく生きるのを強いられることに、私は恐怖心を強く抱いたのである。前述の通り、記憶喪失は誰にも起こり得る突発性の疾患である。つまり、人生が記憶喪失によつ

て激変する可能性が、常に存在すると言えるのである。そのような事を、テレビのシリアスなコンテンツのひとつ程度で捉えるのは果たして危惧するべきではないのか。ここから本連載の概観を書き上げ、上司に提示したのは凡そ二、三日と私にしては非常に早い進行であった。私はモノをあまり効率的に進めるのが苦手である。そして現在に至る。

さて、早速であるが次週六月八日より掲載を開始することとなる。そこで、読者の皆様においては、もしも記憶を失ったらどうなるかを皆様なりに考えてみてもらいたい。」

読んでいてまず私の頭の中を駆け回したのは、相変わらず自分語りを入れているなあ、ということだった。二、三ヶ月前、帰宅してすぐ

「編集長にひどく怒られた」

と言つて一晩中むすつとしていた事があつた。そこで事情を聞けば、社会面に出す記事の草稿を提出したのはいいのだが、編集長が

「自分の事情を話しすぎだ」

と言つてこつぴどく叱られたのだという。あの時は肩を落とすほど叱責されたというのに。この記事を見るに、結局反省してないらしかつた。まあ、ものを書く人にはいろいろと癖があるんだと思うし、単にそれを押さえなければいいってもんじゃないのはなんとなく分かる。

むしろ書き手にとつて、そういう癖が何一つ見当たらない文章は最も避けるべき書き方なのかも思う。……

まあ私自身はさして文章を書かないからこんな風に言える壇上に上がることはできていないんだけど。

とにかく、父は今度からの連載で記憶喪失について取り上げることにした。確かに記事に書いてある通り、先

週末に記憶喪失者とかの捜索を行うテレビ番組を観た。でも父はさして興味なさげにしていたと思う。記事を書いて給料をもらいたいが肝心のネタがなかったから、たまたま観たそういう番組からインスピレーションを貰ったのだろうか。やつぱりもの書きの頭の中はよくわからない……。

「赤江さん」

はっ、とさせられた。ご老体の口から発せられた声は、どうやら私に向けられているらしい。

「何こそそしめてるんですか」

口角筋が弱いせいで一部が赤ちゃん言葉に聞こえる。

携帯に見入つて頭の中で考えていたあまりここが授業空聞であることを忘れてしまつていた。

「い、いえ。少し体調がすぐれないだけで」

「……ああ、しよう。体がこたえるときは無理しないでね。ええつと、どこまで話したんだっけな……」

心拍数がものすごく上がった。この先生は、授業の雰囲気壊されると授業を放棄するから色々と面倒なのである。不幸中の幸いだった。

「ああ、そうそう。明治時代においては、日本は西洋に倣つたいわゆる『文明開化』を成し遂げたのは君たちもよく存じ上げていると思います。けれどね」

こういう風に、私はたまに父親の書いた記事を読んでは頭の中で批評している。実は、ここ数年は内容にさほど

「魅かれた」ことが無かつた。なにせすぐそばに書き手がいるのだ。つまり一度記事について尋ねてしまえば、

それで興が大体出尽くしてしまふ。噛み締め、少しでも調べてみようという気が萎縮する。だからもう今じゃ

「ネタバレさせない・聞かないために、興味を持たない」という方が正しいのかもしれない。

「その裏にあった本当の社会を、皆さんは知るべきだと、私は思うのです」

「ご老体は話を続けるけれど、一通り父親の記事は読み終えてしまった。ブラウザバックして、また記事一覧を見渡す。一昨日、都心であった自動車暴走事故の続報、某動画配信者の不適切行為、別の配信者は引退するらしい。動画サイトはあんまり好きではない。自分たちの時間を割いてまで作った動画を公開することが、私には彼等自身の内をひけらかしているように思えてしまうのである。それも容易く内面をさらしてしまつてよいのかと思う。まあ、こういう考えを仮にどこかの世界で披露したところで、だから何の一言で片づけられちゃうんだらうな。」

ふと、記事の乱立する世界に、気になる文言を見つけた。

「壁に謎の落書き 周辺の防犯カメラに犯人映らず」  
カメラに映らないと言つたつて、どうせ死角をうまくついでやつたんだらう。最近の記事はこうやつてタイトルだけは大きさにして、中身すつからかんことも多くなつた。……思えば、これも父親の言い草だつた。

「東京都〇〇区にて、最近落書きの迷惑行為が横行している。それもここ半月ほどで件数が二十倍に増加している。」

警察はこれに対し、警官数十人を動員し、さらに有志の近隣住民がボランティア活動として共同で夜中の見回り活動を強化した。しかし、一向に被害は減少しない。

そもそも、現場に向かう道沿いには、少なくとも二台以上の防犯カメラまたは人感センサー付きの防犯ライトが設置されていた。しかし、監視システムを調査しても全く通つた痕跡が確認されず、捜査は難航している。

加えて、その落書きについても、奇妙な点が多いという。捜査関係者らによると、まずインクの材質が特殊で、溶剤などで除去しようとしても、中々落とせないものであること、さらに、その内容についても何故か日本史に出てくる崩し字で理路整然とした文章の内容であるらしい。捜査関係者からは『歴史家がやっているのではないか』との声も上がっている。現在も捜査は継続中である。」

奇妙な話もあったもんだ。落とせないインクで古文の落書きとは。世も末とはよく言われてるけど、頭のいい奴らも結局人間なのかもしれない。犯人が歴史家だったら、今私が言ったことが立証されて、頭の固いコメントターや老教師らが声を荒げることになるんだらう。

外の日差しが一層強まつてきた。遠くの入道雲も、背を伸ばし始めた。大半の同級生の目は、明日の全校集会と明後日からの休みにだけ向いていた。

※※

……なんでこの連載企画が通つたんだらうか。俺が出した企画は二つ。例の企画は、二番目の中継ぎだつた。

最初の「昨今の芸能ゴシップに関する諸考察」は「同業者からのリスクが大きすぎるから無理」

と突っぱねられた。例の企画は、ここ最近家のテレビとかで見聞きしたものを基にテキストに編み出したもので、まったくと言っていいほど本腰を入れていなかった。そしたら会議で編集長が、

「行けるかな」

こう呟かれてしまったものだから、練りに練つた第三案を言わないまま、じゃあよろしくね、と言われた。

萎びたチェア上で仰け反る。天井を見上げれば、単調な蛍光灯の並列が眩しい。スキンケアを怠つた人間の顔面なんか照らさないでくれよ。恥ずかしいだろ。ていうか、俺は照明に当たるべき人間じゃないだろ。あくまで俺は、ごまんと居る「大衆読み物の作り手」の一人であつて、こんな照明をあてて頂ける身分にはいない。しかない金を、他よりちよつといい位の文章力で稼ぐ小銭稼ぎである。まあそうはいつてもれつきとした一職業人ではあるが。

「……そんな小作人は、はて今回どうやつて記事を書こうかね」

言うまでもないが、医学の知識は皆無に等しい。そんな人間が健忘症に苛まれる人を論じていく。提言の中に、こじつけで「一般人から見た健忘との向き合い方」のよさうな感覚を入れてはみたが、それでも他人の読みものを書く人間としては、さすがにもう少し知識を入れていかなければならないだらう。そもそもあの記事上で出た俺のコメントも、おどおどしながら

「帰りに本買っていかないとかなあ……」

まずは基礎文献探しからだ。あと使用許諾も取らないと。……あ、取材許可も取つておかないと」

記事にも書いたが、この記事で要となるある男性——一応、山田浩平という名前を仮称としてもらつたと聞いた——に出会つたのは、全くの偶然だつた。

企画を通せてしまつた一昨日、ぱつと思ひ浮かんだのは警察であつた。近隣の警察署の電話番号を調べる。電話帳なんて何年ぶりに開いたことか。三カ所にかけた

「個人情報となりますので」

よくよく考えたら当然だつた。人権を守る機関の一つがべらべらと個人情報の仲介業をするわけがない。

身寄りのない人が行くような場所は他にないか。脳内デスクを荒々しく漁る。そこから百科事典を引つ張り出し、ページをバラバラとめくる。他人よりは少しページの黒い面積が多いつもりだったが、記憶喪失に関する項目が薄すぎる。関連していそうな言葉を探る。

「現在山田さんは都内の保護施設で生活をしていらつしやいます」

保護施設。現実世界に意識を戻し、目前のデスクトップでブラウザを開き、四字熟語と「都内」を打ち込む。

それらしき施設が数件見つかった。最近のご時世、ワンクリックで電話番号まで分かる。デスク上の白が黄ばんだ固定電話を取り上げ、番号を押していった。

：

「ああ、山田さんのことですね」

「そちらにいらつしやるんですか」

「ええまあ」

：

「なんとか取材させていただくことはできませんでしょうか」

「彼本人に聞いてみないと何とも言えません」

「もちろん、ご本人が嫌ということであれば無理強いはいたしませんので」

正直、正当な理由を以てこの企画を中止できるのならそれでよしだと思っている。なにせ偶然観たものを薄く伸ばしたような計画だ。別企画も無いわけじゃない。

「分かりました。それでは本人に確認してみます。アカエさん、で宜しかったですでしょうか」

「はい」

「詳細は先ほどの通りで大丈夫でしょうか」

「はい」

「一応確認しますが、山田さんを通して、記憶喪失者がいかにして生活し、その中にどのような問題があるのかを知りたいと」

「はい」

「わかりました」

「よろしくお願いします」

少しして電話が切れた。交渉が巧く行ってしまった。

プライバシーだの守秘義務だのと言われて拒まれるかと思っていた。

「……こども進んじやたらなあ」

冊子の塔の上、壁沿いに浮く白い時計は五時寸前だった。うちの編集長は残業を嫌う。きくところでは長期の海外留学経験者だのことで、おそらく海外の働き方に憧れているからだろう、とのことだ。

「帰ろう」

帰りの道中に、紀伊之国屋書店に寄って行こう。あそこなら品揃えもあるだろうから、新聞記事で使うにも問題ない本の一冊や二冊はあるはずだ。

「ああ。あと夕食の買い出しもだ」

今日は妻の帰りが遅い。論文作成の仕上げだとか何とかで今日は帰れない、と言ってきたのは今朝だった。大事なことを言うのを後回しにしてしまうのは、新婚当初からお互いの悪い癖だった。とりわけ、

「何でそういうこと先に言わないの！」

と、この癖を発動するといつも怒鳴り叱ってくる紅羽には大変申し訳ないと思う。その紅羽は、もうすでに家路について、もしかしたらもう家にいるかもしれないデスクの上から荷物を掘り出し、鞆にポイと放り込む。

「お先に失礼します」

お疲れさまでーす、と返事が数人から返ってきた。

編集長はデスクトップパソコンに首を突っ込んで、耳にもイヤホンをつっ込んでいた。聞こえるはずもなかった。電車とか、エレベーターとか。こういう箱の中で大人数が密閉される空間は本当に嫌いだ。高校の通学でこころ辺の電車を使うようになってからというもの、ずっとそう思っている。電車に乗り込むと、すぐにイヤホンを取り出して装着する。いつそのこと、より狭い自分の世界に没入した方がいい。曲は何にしようか。いや、機械に選ばれるのもたまには良いか。アプリの「おまかせミックス」を再生する。最近じゃ機械もよく学ぶ。勝手に俺の情報を取っては分析して、俺の好みをくすぐってくる。そんな人工頭脳が一手目に出してきたのは、まさに鳩尾に入れてくるストレートパンチだった。

「シンプリー・レッドねえ……」

俺が子供の頃、いとこの家族が近所だったから遊びに行くと、よくこのバンドの曲がかかっていた。シンプルーなシンセサイザーやパーカッションに、ミック・ハックネルのボーカルが心地良い。たまには頼ってみるもんだな。結局、その懐かしさと、夕飯を娘が作ってくれているからか、この日の帰路は妙に足が軽かった。まあ、明日から重い足を長らく引つ張らなくちゃならないから、その代わりの特典みたいなものかもしれない。

※

館長から呼び出された。入所初日に言はれた事は遵守してあるつもりであったが、何か知らぬひ處で何かをしてしまったのか。目の前の煎茶にも口を付けられなひ。もし追い出されたら。何処かの野原でくたばるのか。然し、法を犯したのなら致し方なからふ。かちゃん、と戸

が開く。にこやかな所長であった。

「山田さん、今日は有難うね」

「いえいえ、別に出掛ける様な場所も有りませんでしたので」

にこやかな顔は変わらなひ。

「あの、本日はだふいふご用で」

「……」

表情の曇り。私に何か重大な事を告げねばならぬらしひ。

「山田さん、この前テレビに出たでせふ」

「ああ、はい」

館長さんが私の記憶を思い出す何かの契機になればと言つて、テレビ番組に出演した。多くの電話に囲まれる中、私に関する目撃証言をできる限り収集し、そして私の知り得ることを総て話した。とは言へ、あの時確実だったのは、

・自分は生まれが農家である事

・実家を出て働きに出ていた事

これきりであった。司会者が

「かふ何か些細な事でも良ひですので、何か他に思ひ出せることは有りませんか」

と何度もせびるかの様に言つてきた。付き添つてくれた館長に、

「いくら何でもさふいふ風に急かさなひでくださひ」

と言わせてしまつたのが申し訳無かつた。

結局、あの放送時には私が聴いて脳が動かされる様な情報は何も無かつた。

「まあそう簡単には行かなひから」

と、帰りの車内で慰められたが、何故だか館長の目を見るのがつらいやふに感じた。

あの後も、施設の電話に警察から番組放送終了後に集

まつた多くの情報をまとめて報告して貰つた。ただ、大  
体が的外れなものだったのだ。

「それでね」

「はい」

「それを見た新聞社の記者さんから連絡を頂いたよ」

「はあ」

「あなたに取材を申し込みたひらしひのよ」

「取材、ですか」

だふやら例の番組を観た記者が、其れを基に記事を書く事にしたと言ふ。

「それで、一応あなたに取材して良いか聞かふと思つて今日は来てもらつた訳なの。ほら、偶にさふいふものが嫌な人だつている訳だし」

かふいう配慮をしてくれるのが此の館長さんの良い所だ。警察での仮保護ののち、此処に来てからと云ふもの、彼女の恩情に救われた事ばかりである。

「だふかな。勿論、無理強いはしないから」

「……」

正直考えものだと思つてゐた。取材を受けることで、私の何かしらが分かるやもしれぬ。だが、逆は、本当は菊を喪つた事が実は正しいのではなひか。開放すること

が、何か漠然とした脅威を導くのではなひか。心内の葛藤。心の動き合表面に出る。頭をかきむしる。唸り。

「山田さん？」

「だ、大丈夫ですか」

義務感。恐怖。進むべき道。畏。

「だ、大丈夫ですか」

……いや、進まねばならぬ。  
何があらふとも、我々は進まねばならぬ。

「わかりました。取材は受けることにします」

※※

あつという間に週末が過ぎていった。

取材の許可が下りたというのは隣のデスクにいた同僚からだった。代わりに出てくれたらしい(よくよく考えたら、これって本来はあつちやならないことであるような気もしたが、今回はそこに突つ込みは入れないでおく)。内容を聞くところでは、例の男性が取材を承諾してくれたらしい。こうもうまく取材のアポが取れるものなんだな。いつかの取材で北陸の資産家を取材しようと電話でその可否を聞いたら、ふざけたことをぬかすなど言われ、果てにはお前の会社を突き止めてやると言つて脅迫されたことがあつたものだから、取材許可の電話をかけるときはいつもびくついてしまう。今回みたいに電話を取つて物腰よく対応してくれただけ正直マシだなと思つていた。そして、結果は見事許可取り成功。世の中巧く行く時とそうでない時が極端すぎる。折り返し電話を掛けた。

「今回はどうもありがとうございます」

「いえいえ。それは山田さん本人におっしゃつていただければ」

「もし気が変わつて取材できないようでしたら再度お電話いただければ」

「いえいえ、彼本人がどうしても言っていますので」

「左様でございますか。分かりました。では、明後日お伺いしたいのですがいかがでしょうか」

少しの沈黙。何かをめぐる音が少しだけ聞こえる。

「分かりました。施設は開いておりますので時間はどのぐらいで」

「そうですね……」

施設までは凡そ三十分位である。午前は編集会議だ。

「十四時頃でいかがでしょうか」

「分かりました。それで伝えます。もし都合が悪い場合は再度連絡しますので」

「はい。よろしく願います」

電話対応しをている女性の館長は、本当に物腰が柔らかい。最近のオペレーターなんかよりよっぽど優しさ荒る言葉だ。施設の雰囲気は大体電話口でわかるものだと取材のアポ取りを何度もしてきた身としてよくわかる。

これは良いロケーションを得られたかもしれない。あながちこの連載もハズレでない。そんな気すらしている、半分くらいところで葉を挟んだ、記憶喪失に関する本を読み始める。

何故だか、今回の連載は最初こそ消極性しかなかったが、いろいろと関連本を読むにつれ、少しずつ興味を持ち始めた。まあ確かに知識が増えれば興味関心の度合いが増すのも至極当然なのかもしれない。けれど、今回買った本の冊数が一回目の購入にしては異様に多いし、それを読むスピードも妙に早い。買った冊数が六冊で、いま四冊目である。何処かから学ぶように諭されたかのよう、取り憑かれたように——はさすがに言葉が過ぎるな——読み進めていった。編集長からは

「張り切ってるわね」

と、さあもつと読みなさいと言わんとするような言葉までかけられた。こうまで言われては引き下がれない。

「……まあなんか引き下がる気も無くなったけど」

※

「答へられなひ處は、無理しなひで下さひ」

取材は、私の「部屋」で行ふ事と相成つた。場所に関する希望は特段示さなかつたのだが、館長と記者——確かアカエさんと言つたはずだ——が話し合つて、自室で気を落ち着かせた状態で訊く事が出来る様にしてくれたらしひ——まあ其れを対象者の目前で話すのはだふなのかとは思つたが——。かくして、私の「机」を挟んで、「自室」の座布団に座り、記者と私は話を始めた。「最初に確認します。この取材記録はここに在るのぼいすれこーだーで録音します。宜しいでせふか」

「あ、録音されるんですか」

「はい。あ、若し其れが嫌だといふ場合は」

「お気になさらず。大丈夫ですよ」

「ああ良かった。分かりました」

機械を少しだけ手先でいじる。

「それでは先ずお名前を」

「……一応、山田浩平と申します。仮名ではありませんが」

「本名に覚えは」

「いいえ。全く」

「分かりました。では年齢は」

「色々調べて頂ひたところでは、二十代後半だとの事です」

「お調べになつたんですか」

「はい。最近では歯の摩耗具合などから推定できるさふです(注一)」

「成程。それでは次の質問に」

「成程。それでは次の質問に」

「成程。それでは次の質問に」

「成程。それでは次の質問に」

「自分の生まれなどに覚えは在りますか。先日のテレビ番組では僅かに覚えていらした様ですが」

「成程。それでは次の質問に」

「成程。それでは次の質問に」

「成程。それでは次の質問に」

「有難う御座ひます。……あそこで語つた事以外、相変はらず思ひ出せません」

「では、出演以降、思ひ出すことが出来た記憶は他に在りますか」

「テレビで言つたことが、より鮮明になつたと云ふか」

「といふと」

「先ず、自分は生まれが農家であると言つた事なのですが、山間で小規模の農家を営んでいたと思ひます。あと、実家を出て働きに出ている事についても、其の家からすぐ離れた所へ出稼ぎをしてゐた……と。すみません。曖昧模糊としすぎてゐますよね」

「気にしなひで。記憶は徐々に戻るものですから」

「はい。……あと」

「何か」

「何と言ひますか。酷く暑ひ環境に居たのも、何となくですがさふだつたと思ひます」

「気候が暑ひ場所へ出稼ぎに出てゐた、と」

「はい」

「御家族については」

「全く。両親が、私が居る以上確実である位です」

「さふですよね」

「すみません何も過去のことを思ひ出せず」

「いやいや。思ひ出せなひものを無理に訊き出すことはしませんから」

「(二)配慮頂き有難う御座ひます」

「(二)配慮頂き有難う御座ひます」

「(二)配慮頂き有難う御座ひます」

「質問を変えませふ。現在の生活について、何かこう不便だとか、勝手が違ふと感ずることは」

「そうですね。正直わからない、というのが答えですね」

「そうですね。正直わからない、というのが答えですね」

「そうですね。正直わからない、というのが答えですね」

「そうですね。正直わからない、というのが答えですね」

「其れも確かですね。此処での生活は如何ですか」  
「非常に助かっています。衣食住は当面の間困らなひやふにして頂いて」

「他の入居者さんとは」

「食事とかの際に喋る位ですが、やはりさふいふ場だけでも喋りながら出来る事は良いものですよ」

「結構一日は長ひと思いますが、どのように過ごされてるんですか」

「戸籍などが無いので、働きに出たくても出ることが出来なひから困りものなんですよ。基本的に施設内の図書室に行つて読書してゐます。あと入居者の中には障がい者の方も居るので其の方々の補助とかをすることも」

「施設内で慈善活動をなさっている、と」

「まあさふいふ事になりますかね」

：

この後小一時間ほど日常生活につひて取材をし、この日の取材は終わった。

「本日はだふも有難ふ御座りました。今後、取材を何度かさせて頂くと思ひますので何卒宜しくお願ひします」

「いえ。こちらこそ宜しくお願ひします」

「一応、此方が私の連絡先となります。万が一何か思ひ出された事等が御座いましたら連絡を」

「は、」

「それでは」

館長に連れられて、赤江記者は帰つていった。私の記憶。思ひ出せなひ物事。今思ひ出すことの出来る記憶もまだ不鮮明な所ばかりである。けれども。

何故だか知らぬ。が、頭の中に思ひ浮かぶ僅かな過去は、褪せた写真はかりで、鮮やかさなど遙か昔に、いや

それどころか元から無ひかのやふに思ふのである。

※※※

「ただいま」

父の気だるそうな声が玄関から響く。

「おかえりー。今朝言つてたより帰り早くない？」

「取材が思ひの外進んでね」

「例の記憶喪失者の連載？」

「何で知つてんだ」

「あたしだつてニュースを見ないわけじゃないから」

「まあ、そんなとこだよ」

「そんなはぐらかさなくたつていいじゃん。どうだったの」

「いやあ、記憶喪失者だつてのにすぐ律儀でな。物腰がすぐく柔らかくていい人だったよ」

「へえ。話してる時とか新しく思ひ出したりとかした」

と言つたところで口を閉じた。ついつい聞きたくなつてしまふが、こゝろ聞き始めると父もそうだが、私も聞き続けてしまふのである。やめたほうが良さそうだ。

「ん？なんか言つたか？」

「ううん。気にしないで。ごめん。夕飯まだできてないんだ」

「いいよ。俺の帰りが予定より早くなつちやつたのもあるだろ。手伝うよ」

「いいよいいよ。取材でお疲れなのに」

「そうか？ いやあ申し訳ない」

「いって」

父親の記事を見て以降、妙に父親がこの連載に熱を入れているのは明らかだつた。この前の土日で基礎文献は

ぱっぱと読んでいくし、メモもいつもよりたくさん書いていた。めんどくさがるの父には、正直似つかわしくないほどの心血の注ぎっぷりである。いつもなら取材内容とを聞くべきでないのに、さつきはそういうわけでもない。尋ねてしまった。

正直、私自身も、この記憶喪失者を追いたいと思わずにいられなかつた。なぜだかわからない。けど、そうすべき義務感に駆られたのは、確かだつた。

注1…永久歯の摩耗具合によつて、おおよその年代を推定することは、人骨などを取り扱う解剖学や古病理学などでは一般的である。行方不明者または記憶喪失者などの年齢推定の際にも、歯の摩耗による年齢推定が使用される例は少なくない。



## 第二章

※※※

父のPCを打つ速度が、ここ数日異様に早い。

「ただいまー」

の一言を言うや否や、居間に資料をばつ、と広げてコンセントをぶつ挿してPCを起動させる。

その起動の合間にすら資料にかじりつき、目で文字列をなぞり、目が留まったと思ったら手元の赤ペンで文字列の右にインクを擦りつける。

「お父さん」

夕飯を並べたい机を、A判B判の紙資料が埋め尽くしている。髪をくしゃつかせながら、またペンで書きこんでいる。

「お父さん！」

「あっ!？」

「夕飯置けないんだけど。もう七時だよ」

「ああ、ごめん……。今退けるから」

ここ数日、夕飯前のルーティンになってきている掛け合

い。

「忙しいのは良いけど、こつちにまで迷惑かけないでよね」

白い長方形の束を掴み上げ、急いで父が自室のある二階

が上がっていく。すぐにどたと戻ってきた。

「今日はお来合いのものにした。いただきます。」

「ごめんね、今日お来合いばっかで。昨日まで部活忙しかったから疲れちゃって」

「いいよ。買ってきてくれただけでもありがたいし」

「あんがと」

「こつちこそわりいな。家に仕事持ちこみたくないってのは、俺も思ってるんだけどさ」

「分かってる。取材の準備、忙しいんでしょ」

「うーん。まあな」

「原稿締め切り、いつなの」

「来週の月曜日」

「白米をばくつく。」

「そっか。無理せんでね」

「ああ」

お互い疲れていたからか、この後会話も無く、ごちそうさま。

「食器とか片しとくね」

「ありがとう」

どたどたと階段を上がっていく。ぱたんと書斎の戸が閉まる。

シンクに溜めた食器に向かい合う。さあて洗うか。

この前行った最初の取材では、あんまり成果が得られ無かったらしく、

「当面の間は、記憶喪失の概要とか、発症のプロセスで回数増さなくちゃいけないかなあ」

とぼやいていた。

「まあそんな最初から成果が得られたら、記者が大儲けできる職になってるわな」

と笑ってた。

洗剤がなくなりかけてる。週末、買いに行かないと。

……記憶喪失、ね。よくまあテキストに、こんなシリアスな話題を取り上げてしまったもんだ。曲がりなり

にも、ウェブ版が出る名の知れた雑誌に掲載するのは確かに良かったのかもしれない。

けど、知識なしの状態から早速連載よろしくねと言われたのが半月前。連載初回の締め切りがあと五日。無茶にもほどがある。まあ、選んだ父自身に責任があると言わざるを得ないけど、にしても。

「がんばれ」

エンターキーをたたく音が僅かに聞こえた。

食器洗いを終え、机にあるスマホを確認する。通知なし。ロックを解除し、ニュースサイトを開く。

「米国物理学会騒然 教授謎の失踪」

教授が失踪、まるでSF小説の冒頭みたいに思えた。

「現地時間の七日午後以降、アメリカの物理学界は焦りを隠せない。マサチューセッツ州にあるアムヘルスト大学に在籍するジョン・カーター教授が、現地時間六日昼頃以降、行方不明となっている。」

CNNによると、カーター教授の所属する研究室の関係者が六日昼頃にカフェテリアで昼食をとっているのを目撃して以降、夜になっても自宅へ戻らず、さらに携帯電話へ時間を分け何度も電話を掛けたものの、応答がなかったという。その後、警察や関係者らが教授の研究室を調べたところ、『今日(六日)は休みをいただいておりますので、明日の二時限目には間に合うかと思っております』とのメモ書きが残されており、七日の二限開始までに教授が戻るかが心配された。結局教授は現れず、願い虚しく不安は的中した結果となった。

その後、すぐに警察へ失踪届が提出され、広範囲にわたる数百人体制での捜索が行われる予定である。教授の妻は『最近何かを研究していたようだったが、昔から家の中では研究の話を避けていたので、最近の研究はよく知らない。学会や家族のためにも早く見つかることを願うばかりである』とCNNの取材に対し答えている。

(玉上 耕司)

この教授の名前、この前どつかのテレビで特集してたよ  
うな気がする。ちゃんと見てないから、内容は思い出せ  
ないけど。研究に追われ続けるのも、やっぱり嫌になる  
のかもしれない。そんな人が、今丁度「階にいるから何  
となくだけど理解しやすかった」。

天井を隔てた向こうで、着信音が鳴った。ニコール目  
の途中で途切れた。

「はい赤江です。……はい……ええ……ええ、期日まで  
には大丈夫ですので。……あ、次の取材は二十二日です。  
……はい、よろしくお願いします。それでは」

編集長だろうか。予定とかの織り合いを付けるのも大変  
そうである。

「大人ってやっぱ大変そう」

一瞬自分もそうなつていくんだぞ、なんて突つ込みかけ  
て、つらいから無しだとぶつた切る。

立ち上がり、冷蔵庫の麦茶を取りに行く。ささっと済  
ませてテーブルに戻った。カップを置いて、ソファ上に  
寝そべる。ふと、腰辺りに固いものが触った。

「あ」

ICレコーダーだった。父のに違いない。案の定、背面  
にテプラで作ったネームシールが貼られていた。

無意識に、最新の録音を指が再生させた。

(……自分の生まれなどに覚えはありますか。……)

父親の声が響く。

(……あそこで語ったこと以外、相変わらず思い出せま  
せん)

若々しい声。これが例の記憶喪失者らしい。

(では、出演以降、思い出すことが出来た記憶はほかに  
ありますか)

(……テレビで言ったことが、より鮮明になったという  
か)

(とうとうと)

(まず、自分は生まれが農家であると言ったことなんで  
すが、山あいでも小規模の農家を営んでいたと思います。

あと、実家を出て働きに出たことについても、その家  
からすぐ離れた所へ出稼ぎをしていた……と。すみま  
せん。アイマイモコとすぎますよね)

(気にしないで。記憶は徐々に戻るものですから)

(はい。……あと)

(なにか?)

(何と言いますか。ひどく暑い環境にいたのも、何とな  
くですがそうだったと思います)

(気候が暑い場所へ出稼ぎに出た、と)

(はい)

録音を止めた。

暑いところにいた、つて言ってたけど、そうすると九  
州とかかもしれない。他には盆地もありえそう。今言っ  
たところは夏が異常に暑いから、それを思い出したのか  
もしれない。農業をやってる家だと、冬に出稼ぎに出る  
こともあり得る。そうすると、実家は豪雪地帯かもしれ  
ない。

「おまえ、何聞いてんだよ」  
びくつく。振り返ると、一階にいたはずの大人がそこ  
にいた。

「う、ごめん……」  
レコーダーは取り上げられ、上着のポケットに滑り込ま  
された。

「他の人にはバラすなよ、いいな」

「う、うん」

こくこくと頷く。  
髪を搔いて、一瞬唸る。

「気になったか」

「え?」

「記憶喪失の話だよ」

冷蔵庫に向かいながら、父親が訊いてくる。

「……少し」

水出し紅茶の容器を取り出してやってきた、シンク脇か  
ら洗ったカップを二つ取り出しながら。

「この話、本当に誰にも言うなよ。ご飯のお金はおろか、  
生活費が消えちゃうから」

※※

喋ってしまった。娘とはいえ、やっぱネタバラシはま  
ずかったかもしれない。

たしかに娘は真面目に取材の話を聴いていた。しかも

「山田さんの居所、雪の多い所じゃないかなって」  
だの、

「出稼ぎは九州とかじゃないかな」

と、取材者である自分が気付かなかった点を言われてし  
まった。不覚。不覚!(結局、それを取材中の話に使っ  
たかもしれないけどいいか、と頭を下げた)

まあとにかく、今回分の原稿はとりあえず区切りがつ  
いた。結局この企画は隔週での連載になった。回数は、  
現状六回を予定している。もう二回分が終わってしまっ  
次の取材は六月二十九日。少し余裕を持たせて終わらせ  
ることができた。

だが、ここにきて思ったことが一つある。確かに、記  
事を書くためという大義名分があるとはいえ、俺はこの

まま彼の記憶を取り戻す手助けをしていいのか。記憶喪失の要因として、無意識下で脳が特定の記憶を抑圧することで、心身の健康を保とうとする場合も少なくないという。もし、山田さんがそれによって記憶を閉ざされているのなら。

私は彼を殺してしまうのではないか。

だが、私にも記者としてのプライドがあつて、連載を責任もって続けていく必要があるの言うまでもない。曲がりなりにも、これで長い間食ってきたんだし、家計の支柱にもできている。

だから、私は書かなきゃならないんだ。

※

自分の文言が、他者に見られる。少し気恥しく思はれるものだ。けれども、私の暗闇に少しでも灯をもたらしてくれる何かが見れるのなら、という思いが勝った。

「来週には記事を載せた雑誌が発売されますので」

発売されたら確認のために一冊送ってくれるさふだ。

——取材の終了後、赤江さんと少し話し込んだのを思い出す。

「赤江さん」

「はい？」

取材に必要な用具を仕舞つてゐた。

「……家族と云ふのは、赤江さんにとつてどういうものですか」

我ながら、とても難しい質問をしたと思つた。何事に対しても、価値観を問うのは答へに窮してしまうのは、

至極当然であるはずだ。

案の定、用具を片付けながらも赤江さんは得も言はれぬ表情を浮かべてゐた。

「嗚呼……少し、時間を下さいませんか。否、言葉にするとなると、口が回らなひものですか」

「すみません。あんまり気になさらず」

「またお会いする時にお答えするので良いですか」

結局、約束はしたものの、はつきり言へば忘れて貰つても構はなかつた。何せ、自分の答えが分からなひのに訊いてしまつたのだ。取材で多忙なのに、幾分か申し訳なひ事をした、と今思ふ。

戸を叩く音がした。

「(山田さん、後藤です)」

館長のくぐもつた声。戸を開ける。

「だふも。何か？」用ですか

「さつき、赤江さんから電話があつたので連絡に」

戸籍の問題上、僕は未だに「けいたいでんわ」を持つていなひ。そろそろ申請が通り、山田浩平の戸籍を申請する書類が来るらしい(注1)。その間、館長が電話応対してくれる。

「取材は正式に来週木曜日の午後二時からで宜しくお伝えくださひ、ですつて」

「分かりました。態々有難ふ御座ひます」

「いいんですよ。でも、無理はなさらないで下さひね」

「ご心配なく」

「ぢやあ」

「だふも」

……一週間も空かずに来るのか。確かに、隔週での掲載であれば致し方なひはずだ。記者といふものも、本当に大変さふだと思わずにはいられなかつた。まあまあ多い

頻度で会うことになる赤江さんだが、それを未だ嫌だと思ふ事はさして無ひ——一度会つただけだと言はれば確かにさふだが——。物腰の柔らかさ、話してゐて垣間見える謙虚さ。ああいふ人が記者として上手くいくのではと思ふ。

……さふいえば。

取材の後と云ふもの、記者の顔が、だふしても忘れられなひ。遙か以前、何処かに見覚えがある。……気がする。根拠を聞かれれば其れ迄だが、かと言つて否定する気にもなれなひ。秘密の領域に、私の知らなひ私の領域に、赤江さんが、彼がいる様な気がした。

※

都心で運転するのはいつになつても慣れない。首都高を走らなければならぬとなると、聞いただけで肝が冷える。あんな細い道幅のくせにためらいなく飛ばす車は多いし、そもそも混雑が多発してるし。何が首都の大動脈だ、聞いて呆れる。動脈硬化が多発して、時代が経つにつれて悪化してるじゃないか。

ラジオからは腫瘍の箇所と規模が流れてくる、ここから十キロ先で事故渋滞があるとのことだ。

「まづいな」

山田さんとの取材予定時刻が、刻一刻と迫つてきていた。あと一時間。ギリギリになるかもしれない。確かに遅れないだけましかもしれない。こういう時には、いつも早めに動くようにしていたのが幸運だった。だけど前回は予定時刻よりだいぶ前についていた。一応連絡した方が良いか。

「ええつと」

渋滞で動かないのを見計らって、ブルートゥースで車のオーディオに携帯電話を繋げば、簡単に電話できる。紅羽がいつだか、家の車で使い方を教えてくれた。時たまこいつにはお世話になっている。

案の定渋滞が始まって、あつという間に動かなくなつた。パンプと接続して、車が動かないうちに山田さんの施設に電話をかける。二回コール音が鳴って、繋がった。

「はい、福祉保健センターです」

「もしもし、こちら南西出版の赤江と申します」

「ああ赤江さん。館長です」

「あ、どうも。すみません、あのお、今ですね」

「はい」

「高速道路でそちらへ向かってるんですが」

「ああはい」

「事故渋滞にはまってしまいました」

「ええ」

「もしかしたら少し取材開始が遅れるかもしれないので

ご連絡を、と思ひまして」

「ああそうなんですね。わざわざありがとうございます。」

山田さんにはその旨をお伝えしておきますので」

「あ、ありがとうございます。申し訳ございません」

「いいえ。事故渋滞なんてざらじゃないですからね」

「ほんとすみません、ありがとうございます。それでは

また付きそうになったらお電話します」

「わかりました。お待ちしております」

「はい、失礼いたします」

いや助かった、まじで助かった。先方に失礼があつたら連載卜ぶ可能性もあるから、やはりまめに連絡をしておくに越したことは無い。

しかし、この記事に対する矜持というか、押し方とい

うか、この記事に対してものすごく大きい責任感を抱いていた。正直自分でも気持ちが悪いくらいだ。

だが何故だか落とせない。けなしては決してならない。そう強く思わせる「何か」がくっついて離れない。そしてこいつは、当面の間離れてくれそうにない。

※

赤江さんは遅れてくるらしひ。先程、館長さんから言伝てを頂ひた。

「赤江さんは渋滞で遅れるさふですので、宜しく御願ひしますね」

何度か都心に行つたが、人の喧騒で余りにも混沌としていて、加えて、駅は迷宮。帰り際、警官に幾度となく世話になつた。何せ、出入口が多すぎた。A式〇番出口まで来て下さひ、と言はれて吊下げの看板に従つて行つたにも拘らず、記号も番号も全く違ふ出口まで行き着ひた。結局歩ひてゐた警官を見つけ、行き方を地図も使つて説明してもらふ羽目になつた。あゝも込み入つた場所

で、よくも人間は生きて行けるものだな、と嘆息した。

都心の道路も同じやうに混沌として、何処もかしこも

渋滞だらけであつた。正直、かういふ場では暮らせさう

に無いな、というのが最終的な帰着点であつた。

それにしても、相も変はず昔のことが思い出せなひ。

前回の取材時に話した事以上に、未だ確実にそうだった、

と言えるやうな記憶は掘り起こせていなひ。

少して、館長さんが来た。

「はい」

「あら、山田さん」

「何ですか」

「ほら、襟元。内側に入つてますよ」

「え？」

触ると、右側の襟が内を向いてゐた。

「直しますよ」

館長が手を伸ばす。

——ヤメロ！

ぱしり。一瞬で、手を撥ね退けてしまつた。

「あ！ すみません！」

一瞬であつたが、いつもはかうする事なんて、無ひ。

「あ、いいんですよ。御免なさいね、余計なお世話しちやつたみたひ」

「違うんです。でも、何でせう。一瞬、変な感じが」

「大丈夫ですよ」

一瞬の、別の自分が、誰なのが解らなかつた。此れは、自分がしたことであるのは確かであつて、意識下にあつたのは言ふまでもなひ。だけど、その根本に有るものが、暗くて見えなひ。

何だ？ この気色悪さは？

「すみませんが、少し一人にさせて下さひ」

「分かりました。赤江さんが着いたら、お連れします」

戸を閉め、一旦部屋に引き返す。テレビでも点けてお

けば、少しばかりでも気を紛らす事が出来る。取材前

には、落ちて置いておかないといけない。いつそのこと、此

の事も話しておかうか。

テレビの電源を点ける。ぱちぱちと「りもこん」の釘

を押す。テレビというものは、妙に面白い。何せあまり

に下世話で、あまりに人間的である。他者が出る杭に齧

り付いて、しゃぶり尽して話の肥しにして、時間を持た

せるのである。それを視聴者は、間接的に視聴して、同

様に愉しむのである。自分自身も其れを楽しんでゐるのは事実で、それが新鮮に感じられるのである。まあ、さういふ番組以外にも面白いと思うものばかりであるが。

さう思つてゐた時、一つの番組に目を奪われた。

「おお」

声をつい、出してしまった。

しかし、一瞬にして、悲鳴と拒絶へと切り替つた。

頭が、いや脳自体が軋む様に痛んだ。耐えがたい苦痛！  
軀が言う事を訊かない。唯だ、ひどい震えと緊張に包まれ、何も出来なひ。感情は、恐怖。

——クルナ！ ミツカルナ！

私は、何処かへ行つてしまふ。代はるは、ダレナンダ？

※※

やつときき、施設の姿が見えてきた。予定から三十分も遅れての到着。この後の予定がない事が、本当に良かったと思う。こういう場合でも焦らずに取材できるのがありがたい。時間が押して焦れば、インタビューの抜けがひどくなつて、時には記事にするにも不十分な量で止まつてしまうことがある。やっぱり物事は、余裕をもつて行つて越したことは無い。子供の頃から、物をどこに置いたか、といったことをすぐに忘れてしまうことが青くて、整理整頓もままならなかつた。そのせいで大事なものを紛失することも多く、一番高かつたもので言つたら、作つて数か月だつた高めの眼鏡だったり、音楽プレーヤーなどもなくした。探しても見つからず、他人にも言い出せなかつた。結局、大学に通つてゐる時に診断を受け、ADHD(注2)と診断された。結局、治療には精神科医の面談や薬をもらつての治療になつて、幾分かマ

シにはなつた。だが、医者から言われた通り、いつもの生活で、常に余裕を持った行動や心持ちを取るのが、最善であると言われていて、自分でもそうした方が良く思つてゐる。だから、こつやつて常に注意を払つてゐるし、手帳とかメモに些細な事も含めて書き留めておく。記者に求められることでもあるから、一石二鳥だ。

施設の駐車場に車を止めると、事務所がせわしく動いてゐるのが見えた。いつもは何人かが座つてパソコンをカタカタ打つてゐるのだが。

事務所に挨拶をしようと、窓口に向かう。

「ごめん下さい。……すみませーん」

誰もいない。

どたどたとこちらに走つてくる人が見えた。館長さんだつた。

「ああ、赤江さん」

血相を変えていた。ひどく焦つてゐる。

「あの、なにかあつたんですか」

「あの、実は山田さんが」

戦慄。

「何かあつたんですか」

「突然、部屋で叫んで、動けなくなつてしまつて」

「え」

「今は落ちて着いてゐるんですが、気を失つてしまいました」

「そんな。何か、原因は」

「全く。突然のことで、全くわからないんです」

館長さんに連れられて、医務室へ向かつた。

「隣室の方が、山田さんの部屋からものすごい大きな物音がした、様子がおかしいつて連絡が来たんです。それで行つてみたら、居間でうづくまつて動けなくなつてて。」

大丈夫ですか、つて聞いたら、ただひたすら『やめてくれ、やめてくれ』とだけ。しばらくしたらふつ、と気を失ひまして」

医務室のベッドに、彼は眠つてゐた。そばに医者が座り、脈を診てゐた。

「落ちて着きましたね。しばらく安静にしておけば大丈夫でしょう」

「すみません、ありがとうございます」

「いいえ。しかし、突然どうしたんですかねえ。いつもの彼のことを考えると、間違いなく」

「記憶に関して、でしょうか」

「そちらの方は」

「赤江良平さんです。山田さんの記事を書いていらつしやる」

「ああ、なるほど。ご苦労様です」

医者に一礼される。返さずにはいられない。

「しかしまあ、とんでもない所に出くわされましたな」

「とんでもない。彼が気付いてゐるか分かりませんが、おそらく記憶が何かしらのきっかけで呼び起こされて、恐怖感や身体的に現れたんじゃない」

「おそらくそうだと思いますね。いわゆるフラッシュバックでしょう」

フラッシュバック。極度のストレスによる複合性トラウマを抱える患者が、そのストレスの原因となつたこと、またはそれと関係するような出来事を経験することによ

り、身体的にも、心的にも防衛しようとして攻撃的態度や行動を取る症状。この前読了した、精神疾患に関する本で取り上げられていた。山田さんの場合は、恐怖心を感し、そこから逃避しようとしたためのものだろうか。「赤江さん、とおつしやいましたか」

「はい」

「今日のところは、申し訳ないがお帰りになってもいいのですが」

「わかっています。この様な状況での取材は、山田さんの健康状態を考えれば、良くないですしね」

「ご理解有難うございます」

私だって、一人間だ。このような状況で取材を続ける程の悪人ではない。

「館長さん、どうか山田さんによろしくお伝えください。また取材日程はお伝えします」

「もちろんです」

「とりあえず、一週間ほどは置いた方がよろしいかと」

「わかりました。そう伝えておきます」

山田さんを見やる。表情は柔らかく、眠っている。

その刹那。彼が目を覚ました。ぱつ、と目を開いた。

「山田さん、大丈夫ですか」

「あ、あの……私はいったい」

「大丈夫です。少し気を失っていただけです」

「……ああ、赤江さん。どうも」

一礼。彼は、困惑の表情を浮かべている。

「……ああそうか。この後取材を受けるんですね」

「いえ、今日のご気分がすぐれないでしょうから、また日を置いて来ますね」

「そうですね。山田さん、とりあえず今日のところは」

「いいんです。取材、受けますよ」

「だめですよ。とりあえず今日はお休みになった方が」

「でも、記事をお書きになるんだったら、ちゃんと取材なさった方が」

「上の方には、今日の事情を話せばわかってくれますでしょうから。大丈夫ですよ」

「いや、しかし」

「山田さん、ほら、日を置いて落ち着いてからの方が、話せることも増えるかもしれませんよ。ですから、今日のところは」

「今じゃなきやダメなんです！」

山田さんが、声を張り上げた。その場にいた誰もが、一瞬だが、ものすごい緊張感に包まれた。

「私が、私自身が嫌なんです。だから、何卒」

ベッドの上で、彼が深く頭を下げた。

……ここまで言われては、返す言葉も無かった。

「……先生、館長さん。部屋を、空けて頂けますか」

館長と医者が、了承してくれた。

「何かあったら、すぐ呼んで下さい。では」

白衣とエプロン姿が、揃って、医務室を出た。

「……本当に、よろしかったんですか」

「なんか、どうしても話さないと、って思ったんです」

「そうですね」

一瞬、沈黙が場を制する。

「本当は、」

「はい？」

「こういうことしたら、記者はバッシングを受けるんですよ」

「バッシング、ですか」

「ほら、取材って、やっぱり取材の受け手を尊重しないといけないですから」

「安心してください。これは、私の希望ですから。万が一何か言われたら、私の希望だったと、ちゃんと伝えてください。分かってくれると思いますよ」

「すみません、なんかご配慮いただいて」

「いいえ」

ああ、いつもの山田さんだ。よかった。

「では、取材の準備をしますので、しばらくお待ちください」

※

「では、取材を始めたひと思ひますが、宜しいでせうか」

「はい」

赤江さんが、ボイスレコーダーを起動させた。

「本日もよろしくお願ひします」

「お願ひします」

「ではまず、体調の方は如何ですか。先程、お部屋で気を失われたという話を伺いました」

「……自分でも、何があったか分かりかねます。テレビを見ていたら、突然、気を失ってしまつて」

「もし可能でしたら、何か其の事で気づいたことが在つたら、お話しできますか。気分が優れないやうでしたら、何も言わなくても大丈夫です」

「赤江さんの取材が、少し遅れるという話を聞いたので、テレビでも観て待つていやうと思つて、チャンネルを変へていました。その後は、全く」

「さうですか。テレビを観ていたら、何時の間にか気を失つた、と」

「はい」

……

「何か、他に在つたら、何でもお話し下さひ」

「……いいえ。何も此れ以上は」

「分かりました。有難う御座居ます。では、前回の取材以降、何か他に思ひ出された事は在りましたか」

「さうですね。あ、さうさう。記憶という事ではないの

ですが」

「構ひませんよ。自由に話してください」

「自分、暑いのが本当に嫌いだな、と思つて」

「何かあつたんですか」

「一昨日なんですけど、風呂に入つたんです」

「はい」

「それで、浴場、つてのは蒸し暑いでせう？」

「さうですね」

「他の人は愉しさに風呂に入る。でも僕は、風呂場の蒸し暑さに嫌気がさして、少しシャワーを浴びてすぐ出たんです。他の人に訊いたら、そこまで蒸し暑いのが嫌いなのは珍しい、つて」

「なるほど。何か、其の事で記憶を思い出した、ということはありませんか」

「いいえ。でも、多分ですけど、記憶を失う前の自分の好みなんぢやないか、と」

「成程。確かに可能性はありますね。では、何か他には在りましたか」

「いいえ。それ以外には特に」

「分かりました」

その後、暫く赤江さんと他愛も無い話をした。ふと最後に、

「すみません、こんな話で終はつてしまつて」

と言つたら、

「いえいえ。私こそ、記者だといふのに、こんな話ばかりしてしまつて」

と、申し訳無さうにしていた。本心を言えば、こんなに可愛らしひ人なんだな、と思つた。やっぱり、此の人には何でも話して良ひんだ。

「では、これで取材を終はりにさせて頂きます。何か言

ひたい事があれば」

「また、取材を宜しく願ひします」

「安心してくださひ、担当は私しか居ませんから」

本当に、安堵した。復た会ひたい。復た、話したいな、と思う人だ。

※※

本当に疲れた。やはり取材というものは、いつになつても精神的な疲労が堪える。話の最中、ぼつりぼつりとくだんの騒動のことが漏れ出ていたのを、なんとか書き留めておいた。

彼の症状は、テレビを観ていた最中に発症した。臆気ながら、話の中で幻聴を聞いたと言つた。どんなものだったか、なんとなくでも覚えていないかと尋ねたところ、怒つていふような感じだったかもしれない、との事だった。山田さん自身の気持ちはどうだったかについては、死なせてくれという希死念慮だったらしい。こればかりは、精神疾患である可能性が高い以上、彼の言う症状を信じるほかないが、彼が嘘偽りを言うことはないと思つている。そうすると、医者が言つていた通り、攻撃的な方向にはいかなかったもののフラッシュバックの症状とみて間違いないのだろう。

「……でも記憶は思い出されなかつたしなあ」

彼の脳が、その記憶を彼自身が認識しようとするのを防いでいる。よほどのむごたらしい内容なのかもしれない。無理に思い出させるのは、やはり避けなければならぬ。

しかし、あの取材をさせてほしいと懇願した彼の表情。鬼気迫るあの言い方。あの場にいた誰もが、いつもの彼の姿とは正反対だと思つたに違ひない。正直なことを言

えば、恐怖感を抱いた。

「あれが、本当の姿のひとつなのでは？」

可能性として捉えておく必要がある。あくまで、可能性として。

「おとうさん。夕ごはーん」

階下から、娘の声が響いた。時計を見やると、いつの間にか十九時を過ぎていた。

「今行くよー」

携帯だけ持つて、下に降りていく。食事の香りが漂い、今日の食事が煮ものだと分かつた。

「お、いいねえ」

「ちゃんと作つたよ、今日は」

弓子は、今日も夜勤で帰れない。高校で忙しくしているというのに。娘に申し訳ない。

「悪いな、作つてもらつちやつて」

「別にいいよ。お父さんだつて忙しいでしょ」

「うん、まあ、ね」

「用意しちゃうから、座つて待つてて」

「はーいよ」

あまりに疲れていて、冷蔵庫から飲み物を出すことさえ、面倒に思えて仕方なかつた。どさりと、椅子に崩れこみ、勢い余つて机に突つ伏す。

彼の姿。本当の姿。仮称に包まれ、いまだ顔を出してくれなかつたところに、あの事件だ。やっぱり、彼は山田にあらず、といつたところか。真実を探り出すのが、記者たるものの原則。だけれど、彼の真実へとたどり着くことは、はたして最終的にはとされることなのか。フラッシュバックという形で現れたように、彼が彼に内包される真実を自分で認識することは、果たしていいことなのか。

記憶が抑圧されるのは、基本的に過度のストレスがかかる出来事によって惹起されるという。すなわち、彼の記憶を失った原因も、やはり彼の避けてきた古傷をむやみやたらに切開すること何ら変わらないのでは？

「お父さん邪魔！」

頭上からの声には、はっとする。娘が、夕食を持ってきてくれていた。

「ああ、ごめん」

「もう、疲れてるのはわかるけど、邪魔にならないようにしてよ」

「ほんとごめんって」

「うん、ま、いいけどさ」

里芋の煮ころがしと、縮みホウレンソウのお浸し。俺の胃腸の事を考えての、菜食主義ときた。ここ数年というもの、胃腸が弱って、がつつりとした食べ物があとあとに堪えるようになった。それを聞いた妻と娘は、それ以降というものの野菜とかを中心にしたメニューを多くしてくれた。二人には感謝しかない。

「じゃ、食べよ」

「おう」

『いただきます』

娘の料理は、高校生になってから格段にうまくなってきた。回数が増えたのもあるが、自分でもどうやら上手に作れるようになっておきたいと思っっているらしい

「うまいわ」

「よかったー。味付け、ちょっとミスったんだけど」

「そうなのか、全然気にならないよ」

「よかったー。でもいや、良くないわ。次気を付けないと」

「聞いちゃうけど、なに間違えたの」

「醤油を入れすぎちゃったんだよ。しょっぱくない？」

「いや全然。むしろちょうどいい」

「そかそか。でも塩分摂りすぎは良くないからね」

「まあ確かにな。俺の健康への配慮か？」

「私自身のためでもあるかな」

「偉っ。自他のため、ってことか」

「まあそんなとこ」

「感謝だわ。こうも気遣ってくれるの」

「なに、改まって。変なの」

こうやって談笑するのも、たぶんあと一、二年か。紅羽は大学進学を考えていて、地方に行きたいと言っている。

一人暮らしは、ほぼ確定している。まあ、ここまで料理が出来るなら、ほかの家事もそつなくこなせるだろうから、生活は心配していない。だが、離れるという事が、正直言っただけなのである。一度この話をしたら、

『寂しがりなんだあ』

と茶化された。凶星で言い返せなかったのは、言うまでもない。

「……山田さんにも、待ち人がいるんだろうな」

「なに？ 例の記憶喪失のひとつ？」

「そうそう。あ、誰にも喋ってないだろうな」

「大丈夫だよ、心配しないで」

「ならいいや。いやそうそう。今日さ……」

食事中に、今日の出来事を一通り喋った。もう取材内容を明かしていた以上、明かそうが明かすまいが特段問題なからう、と思った。

「山田さん、大変だったね」

「本当にな。フラッシュバックって、気を失うほど重篤なものもあるんだって、初めて知ったよ」

「うちはフラッシュバック自体知らなかったけどね」

「そりやそうだよな。でも、何を思い出したんだろうな。結局、まだちゃんと記憶の内容を思い出した、ってことじゃなかったけど」

二人して、頭を抱え込んだ。

「……あ」

「ん？」

「テレビだよ」

「テレビ？」

「山田さん、テレビを観てる最中に、フラッシュバックだった。それになったことは、原因はテレビ番組の内容になにかあったんじゃないかな」

そうか。何を思い出したかを考えるあまり、ついその直接的な原因を忘れてしまっていた。

「確かに。テレビ番組にトリガーがあったから、こうなった、ともいえる」

「それ以外考えらんない？」

「だな。紅羽、悪いけど新聞もってきて」

「あいあい」

居間から、新聞がやってきた。裏面の番組一覧を確認する。

「よし」

一通り確認する。山田さんのフラッシュバックが起きたのは、今日の午後一時半ごろ。一覧の番組は、以下の様になっていた。

チャンネル1…生放送のトーク番組

チャンネル2…健康番組

チャンネル4…ワイドショー(フアッションコーナー)

チャンネル5…ワイドショー(ニュースコーナー)

チャンネル6…ワイドショー(ニュースコーナー)



チャンネル7…グルメ番組(中部地方に関して)  
チャンネル8…ワイドショー(ニュースコーナー)

「これだと、7チャンネルの番組が一番可能性があるよね」

「中部地方、か。結構いいヒントになるかもな」

「でも、他の番組でも、もしかしたらあるかも」

「可能性は捨てきれないな。地方のニュース、ってこともあるし」

「あと最近だと、ニュースコーナーとは名ばかりで、地方の紹介とかしてるかもしれない」

「うーん、やっぱり、直接確認するほかないか」

「でも気を付けてね」

「え？」

「山田さんに直接聞くんじゃないかと、お父さんで見当を付けて、それとなく聞かないとだめだよ。またフラッシュバックを起したら大変でしょ」

「そうだな。明日で番組を確認してみるか」

「そうしなよ。私も平日の番組、観てないから知らないし」

「だな」

決まりだ。番組に関して、遠回りに、かつしらみつぶしに聞いてみるほかない。だが、だが。

「確実に、彼の本当の姿に、近づいていける」

「正念場だね」

「うん、だな」

……あれ。今俺は、娘に調査の手伝いをさせていなかったか？

「あ、おい」

「なに？」

「あんまり、首突っ込むなよ。俺の、仕事だからな」

「でも、気づけたのは誰のおかげかな？」

「ううっ」

それを言われたら、何とも返せない。

「……いいか、口外するのは、絶対ダメだからな」

「分かってるよ。大丈夫」

「よし、ならいい。じゃ、おれ上に戻るわ」

「飲み物持って行きなよ」

カップにコーヒーを淹れてくれていた。

「ありがたく。サンキューな」

「うん。がんばってね」

「お前もちゃんと勉強しろよ」

「わかってるって」

「じゃ」

「うん」

コーヒーの白い湯気が、カップを伝わる熱が、真相に近づいているという興奮が、身体を包み込んでいる。

「このまま、進んでいいんだよな」

注1…1988年の就籍許可申立事件では、記憶喪失者

について、新しい戸籍を与えることを家庭裁判所に申し立て、元々の本籍が認められないことを確認してから就籍許可が与えられた。現在も記憶喪失者の就籍についてはこの判例が用いられており、許可後に申立人はその通知から10日以内に申請しなければならぬと定められている。

注2…注意欠陥(欠如)・多動性障害(Attention-deficit

Hyperactive disorder)のこと。明確な症状診断の定義が定まっていないなど、診断の点で曖昧さがあるものの、基本的に『精神障害の診断・統計マニュアル第5版(DSM-IV)』によると、以下で後述するような症状が、

- ・12歳未満(ただし、一般的には6歳未満までの早い時期としている)までに、
- ・6か月以上継続して、
- ・複数の状況下(学校、自宅、公共の場などで、ほかの精神疾患で説明できないような状況で、多い頻度で、
- ・日常生活に支障をきたす程度に、見られることが特徴とされる。

①不注意(Inattention)

簡単に気をそらされる、細かいことに集中できない・ケアレスミスが多い、話しかけられているのに聞いていないような様子、指導に従わず課題などを達成できない、問題点や目的を構築出来ない、長期的かつ精神的負担を伴う行動を避けたり嫌う、必要行動を忘れる、日常的な物事を忘れる など

②過活動(Hyperactive)・衝動性(impulsive)

そわそわ・貧乏ゆすり、長時間座つていられない、不適切に歩いたり走り回る(小児性に顕著)、落ち着いて物事が出来ない、早口で喋る、質問を言い終わる前に回答する、自分の番が来るのを待ちきれない、他者の行動を妨げるなど

昨今では、「大人のADHD(Adult ADHD)」も正式な精神疾患のひとつとして認められた(2015年版のDSM-5以降)。この特徴としては、②よりも①の症状が多くなること、②に関しては内面的なもの(これは「内面的な落ち着きのなや(inner restlessness)」と呼ばれる)に変化することが特徴的である。

※参考までに以下に詳細をさらに記す。

- ・現在もADHDの根本的な原因はわかっていないが、脳の一部の部位の機能不全、神経代謝の低下、食事、睡眠、特定化学物質などが仮説として立てられている。
- ・治療法も多岐にわたり、心理療法(患者自身の気づきと、その行動的実践をサポートする認知行動療法など)、社会的方法(患者を囲む環境への配慮)、薬物療法(メチルフェニデート製剤やアトモキセチンなど)がある。

※ADHDの診断基準については、米国CDC(アメリカ疾病予防管理センター)の公式HPを参考にした。

(<https://www.cdc.gov/ncbddd/adhd/diagnosis.html>)

## 第三章

※※

例のフラッシュバックを起こしてから、山田さんは数日の安静を求められたらしい。直近の取材は一週間延期となり、私は編集長から新人記者のヘルプにまわるよう命令を受けた。

「あんまり口出ししすぎないでよ。あと威圧的なもの」ハラスメントを生み出すまいと、幾度も釘を刺された。

曲がりなりにも娘を育てる身として、ハラスメントまがいの言葉には前々から注意していたからか、ヘルプの期間にそういう類いの問題はなかった。

むしろ、面白い話が聞けた。

「赤江先輩」

「なに？」

「今先輩の取材ってお休みでしたっけ」

「まあ、ちょっといろいろあつてな」

「どうしたんです？」

聞かれて答ええないわけにもいかないので、これまでの事情を話した。

「なるほど、取材相手の体調が悪いってことで今はお休みなんですね」

「そうそう。連載記事も一旦止めてもらって」

「再開はいつなんです？」

「来月半ば。二十日」

「少し延ばしただけって感じなんですね。今月ももう終わりですもんね」

「六月も終わるし、早く梅雨も終わってくんないかな」

「ほんとですよ。雨のせいでいろいろニュースも騒がしいですし」

「最近じゃ日本全国で雨。雨だしな」

「我が子供の頃でもここまで降るのは九州とか沖縄が多い、みたいに思ってたんですけどね」

「気候が変わりつつあるらしいよ。日本だけじゃなくて地球で」

「へえ。先輩ものしりですね」

「まあ聞きかじった程度ではあるけど」

喫茶店のコーヒースプーンをすすりながら、ふと先輩が言う。

「……そういえば」

「なにさ？」

「この前、日本がらみでなんか国際的な事件があったらしいんですよ」

「どうしたよ急に」

「いや、ニュースで俺が最近一番気になってるのがその記事で」

「なるほどね」

「うーん……ニュース記事あつたっけかな。あ、そうそう、これですこれ」

携帯を取り出して画面を見せてきた。

「アメリカで行方不明になった教授が見つかったってニュースだったんですよ」

記事は要するにこういうものだった。

現地時間六月七日から行方不明になっていた米国のジョン・カーター教授が所属する大学から遠く離れた日本にて発見された。教授は、二十二日正午頃、東京某所にて

びしょ濡れになっているところを保護された。所持品は身分証などと、書き殴りのかすれたメモのみであり、脱水症状と栄養失調に陥っていた。現在外務省は教授の

身柄をどうするべきか米国大使館と協議している。なお、教授が空港を通過したときされる痕跡がない事から、どのような経緯と手段で来日したか慎重に調査している。しかし、本人は「わからない」とだけ証言しているとの事である。

「なーんか、変わったこともあるもんだな」

「渡航の痕跡がないのがミソですよ」

「単純に記録ミスとかじゃないの」

「まあ最近じゃデジタルですしね。データ飛びなんてありえることですよ」

「あ、でもそれでも日本に来た理由もわかんないな」

「研究に追われすぎたの逃避行じゃないですか？たまにあるじゃないですか、仕事投げ出して逃げ出したくなる」ときとか」

「有休休暇すら与えられない研究者の末路、ねえ」

「最近じゃそういうたぐいの事も少なくなりましたよ」

「そういえば、休みも連載の少し前からまともに無かった気がする。」

「先輩も、あんまり根詰めすぎないでください」

「はいはい」

先輩に別れを告げ、改めて手帳をしてみる。七月六日号用の取材の日に、山田さんは発作を起こした。かろうじて行えたものの、状況を考えて連載第四回の取材は七月十三日は中止。その分は一週間延ばした七月二十日に回された。現在新しい取材は行えていないが、とりあえず待つほかない。

「……まあ、ゆっくりと、ね」

※

「私が、御迷惑をお掛けしまして」

「気にしなひでください。何が引金となつてあゝいふことになるかなんて、誰にも解りませんから」

「然し」

「取り敢へず、山田さんは御静養を」

「……はい」

此の寝台を見ると、少し前の私を思い出す。彷徨い歩いてゐたあの日々。僅か数日ではあつた。が、思い出す。私を苛むひどい飢えと渴き、アスファルトの照返す陽光。尽き果てた躰の倒れこむ感覚。灼けつき、痛み。誰かの駆け寄る音と姿、その微睡。

——ですか……しやおねが……

幻影。揺れ動く暗色達。其処から私が始まつた。

「山田さん」

声を掛けられていた。

「すみません」

「いいですよ。変に体力を使つたんですから」

「……全く、困りますよね」

「そんな気に止まないで下さい」

「あ、違ふんです。何も、かうなつても思い出せないのが、嫌になるな、て」

「さう焦らないで。ほら、よく謂うぢやないですか。急がば回れ、なんて」

「……兵は拙速なるを聞くも、未だ功久なるを睹ざるなり」

「あ？」

「要するに、私は、永く引き摺るのが怖い」  
怖い。

「けどまた、思い出すのも怖い。不思議なものですね」

其方も、また怖い。

「……」

「あ、すみません。また変な話を」

「お気になさらず。此処に飲み物を置いておきますから、自由に飲んで下さいね」

「どうも」

看護師さんが去つていく。

なんとパロドクシカルだらうか。だけれど、現実として私には相反する此の二つが共存できてしまつてゐる。何方に向かえば良いのか、その先とは、何なのか。

——安心して下さい。担当は私しか居ませんから。ふと、何時かの声が再生される。赤江さんには例の事件以降会つていなかった。毎週来てもらうことになつて

いたのに、矢張り申し訳ない。

「今度、何時が取材日だらう」

前々以上に、会おう話さうと思う気が増してきた。或る本心がだうしても思い出させやうとする。暗色が覆う其の姿。色合の端々を探すが、見渡せども永久に拡がる。

「……水」

喉が渴いた。水差しに手を伸ばす。空だつた。だうやら園長も医者も気づかなかつたらしひ。寢床から腰を離し、水道を探す。医務室には見当たらず、廊下に出る。窓の結露、曇天から降り注ぐ灰。靄や霧と迄は行かない、浮遊する水滴。静寂。右手に三口の水道が空いていた。水差し置き、栓を緩める。

キユ、キユジャー……。勢いが良い。透明の実体が満ちていく。腕に其の重みが掛かり、受口がずれないやう気を付ける。誰も居ない廊下に、水音だけが反響を続ける。

「……あの時」

あの痛みとも、閃光ともとれない衝撃。襲つてきた負の感情。自分でも何処から来ているのが解らなかつた言葉。ミツカルナ、さう言つていた事が思ひ出される。一体何から逃れやうとしていたのか？

「分からない」

……冷やかな感覚が、手から頭の中に伝わつてきた。

「あら山田さん、水」

意識の向こうから、園長がぬつと出てきた。

「すみません！」

「大丈夫？ やつぱり疲れてるのよ」

栓に皺の入つた手が被さり、勢いが止む。

「私持つわよ」

「ありがたうございます」

寢床に戻る。

「さうさう、赤江さんから電話あつたわよ」

「赤江さんから？」

「え、数日経ちましたけどあの後体調は如何ですかつて」

「赤江さんの方は？」

「七月の頭に来ます、て。六月中は休載で良いとのことですよ」

「申し訳ないですね」

「仕方無いですよ。誰が悪い訳でもないですから」

「……でも、あの声は」

「はい？」

「声、声が聞こえて。ミツカルナ、と」

「其れ、赤江さんには」

「未だ。あの時は頭が込み入つてましたから」  
「さう。ぢやあ、次に会う時に？」

「そのつもりです。何か、手掛かりになるかも」

「さうね。けど取り敢えずはゆつくり休んで」

「……はい」

「ちやあ私は戻りますから。赤江さんの電話の件で来ただけだから」

「はい」

にこやかに去っていった。あの微笑みも、何時かは離れていくのだらうか。孰れは此の施設を出て行くのだらう。あの笑顔も、白い部屋も、擦り切れた畳も見事はない。多分、戸籍申請の書類が来た時が、去るべき時なのだらう。だが何も、取り戻してはいない。本当は、取り戻さなくていいのかもしれない？結局、わからない。

※※

喫煙室は相変わらず狭い。白煙はすぐに消えるのだが、とにかく狭い。煙草はやめると上司にも部下にも家族にすら脅かされている。まあでもやめられるもんじやない、とはぐらかし続けて十年以上だ。

紺地に金縁になってしまった箱から一本を取り出し、火を点ける。スマホを取り出し、何となしにググる。

「お、いるね」

編集長だった。この連載を通した張本人。

「お疲れ様です」

「その言葉返すわ。大変ね、君の取材も」

「まあ、こういうこともありませよ。思い出すっていうのは、それ位の犠牲が伴うのかも」

「フラッシュバック、だっけか。確かに、何もない状態から嫌なことも含めて思い出すんだからね」

「きついですよね多分。調べてみたんですけど、ああいう記憶障害って嫌な事とか、トラウマが原因であること

が多いそうですよ。あ、火使います？」

「ありがと」

赤マルを取り出したのを見て、火を差し出す。

「どうもね。で、赤江君はどう思うの？」

「何がですか？」

「取材してる山田さんだっけ、その人のこと」

「思い出せないのが本当か、とかですか」

「正直そこは疑ってないんだけどさ、ほら、思い出すかもしれないじゃない、取材中に」

「まあたしかに」

「その時は、連載とかどうするの？」

「あー、続けるつもりではありませんけどね」

「それが、山田さんに酷でも？」

答えられない。たしかに山田さんは、話すことを自ら望んでいる。けど、本当の「山田さん」が現れても、その保障はあるのか？

「私自身、オッケーだっけって言っちゃったけどさ、万が一のこともあるでしょ？思い出した先が、余りにも残酷な話だっけってこと」

「……そんな時は、やめますよ。本人が望まないなら」

「でも正直な話、連載の中止はなかなか大変よ」

「まあ、説明責任があるのならそれは果たします」

「気分わないの。私だっけって選者としての責任があるわ」

「すみません、編集長にも責任取らせるようになっちゃって」

「曲がりなりにも編集長だからね。そこはわかってるつもり」

「……フラッシュバックの件なんですけど、どうやらテレビを観てて起こったらしいんですよ」

「という」と

「発生した日のテレビ、確認してみたいです」  
紙に書き付けた番組表を見せた。

チャンネル1…生放送のトーク番組

チャンネル2…健康番組

チャンネル4…ワイドショー(フアッションコーナー)

チャンネル5…ワイドショー(ニュースコーナー)

チャンネル6…ワイドショー(ニュースコーナー)

チャンネル7…グルメ番組(中部地方に関して)

チャンネル8…ワイドショー(ニュースコーナー)

「どう思います。疑わしいのは7チャンネルなんですけど」

「局に録画テープとかもらえた？」

「いやいやいや、私が電話したところで貰えませんでした」

「あーわかった、私から電話してみる」

「え、そんなことできるんですか」

「まあねえ。これでも昔はテレビ関係者を文で殴ったし」

「あれでしたっけ、某サからはじまる新聞でしたっけ」

「そそそ、8チャンネル支えるあそこね。それに」

「はい？」

「ここまで来て徹底して調べないわけにもいかないですよ。あんたがやりたがってるのを見て、編集長がへたに止めてどうすんのよ」

「ありがとうございます」

サの時代には辣腕奮ってウエと大揉めしたこともあったらしい。

「ちよい」

「なんです？」

「さっきのチャンネル表」

「あ、はい」

殴り書きを渡す。編集長がまじまじと見つめる。

「あつれ、そういうえげただけど7ちゃんもただど番組の内容が違くない？」

「え？」

「いやさ、あんた取材に行つて知らなかったかもしれないけど、この少し前に速報流れた気がすんだけど」

赤マルをふかしつつ煙と共に流れ出てきた言葉だった。

「速報ですか」

「こそ。確かねえ……」

おもむろにジャケットのポケットからスマホを出した。

少しして操作が止む。

「ほらこれ」

そこには他社のネットニュースが出ていた。

※※※

「行方不明だった教授、独自で会見実施

新世界を見た大騒ぎ」

今朝の記事だった。

「保護の後、大学はおろか全世界に向けて映画のような言葉を発信する男が現れた。名前はジョン・カーター。

米国物理学会の重鎮にして、二十二日に日本で発見された人物である。彼は保護の直後から、私は発信せねばならないあるものを見た、これは世を揺るがすものである

と言いつつ続けたことと事であった。そして日本時間二十九日午後十二時頃(現地時間二十八日午後十時頃)、教授はメディア各所に呼びかけ声明を発表した。CNNによると、会見開始直後から人類の新たな時代の到来は既

に近づいていると大言壮語をならべたて、しかるべきのちには私が必ずや全ての人間が一度は夢に見たことの実現をつかみ取ると発表した。記者陣がその内容を具体的に示すよう質問をぶつけたものの、これを先んじて発表することは、ともすれば戦争を招くことになるので言えないと切り捨てた。会見時間終了直前、記者らに向けて『私は新世界の一端を見たのである』と力強く言い放ち、会見場を後にしたとの事である。これに対し、メディアはあまりにも漠然とした内容に落胆。一部では物理学の権威も認知症には勝てず、という皮肉めいた見出しも踊った。一方、ある界限では彼の会見後その正体にメスを入れるべきだとする声が多い。それは、オカルト界である。ジョン・カーター氏が物理学の権威であることから、物理学会を揺るがす大発見を出すのではないかと話題になっている。あるサイトの代表者はシュレディンガーの猫(注二)に明確な答えが出たのでは、としている。別の人物からはアインシュタインの考えを応用させたタイムマシンの理論ではとしている。いずれにせよ、一部では本当の大発見を期待する声があるのも事実である。

(佐々木憲太)

「……それで取材中に番組の変更があった、ってこと？」

「そういうこと。だからこの前調べた内容が違うかも、つてさ」

「ふり出しに戻っちゃったかあ」

「まあ番組自体は変わらないから、あとはビデオさえもらえればわかると思う」

調べたつもりでいたが、お互いテレビ内容の変更まではつかめていなかった。

「お父さんの連載、いまどうしてんの？」

「休載中。七月半ばの号でまた再開」

「よく止めてもらえたね」

「さすがに取材相手が体調を崩しちゃなあ。俺がどうなつたところでも行けって言われるけどな」

「そりゃ雑誌の内容濃くして売り上げ伸ばすのが目的だもんね」

「記者はこき使われるのよ……」

トホホ顔で水を飲む。

「最近学校どうなんだ」

「なあんも変わらない。部活は雨が多くて屋内ばつか」

「大会とかあったっけ」

「来月終わりにね。言っても私スタメンじゃないけど」

「やっぱりスタメンは夢のまた夢って感じか」

「前から言ってるけど私別に試合とか出たいわけじゃないからなあ。スタメン取るうがなんだろうが気にしてない」

「しけたやつだなあ。部活って大会出てなんぼなんじゃないの」

「部活入ったのも運動不足になるのが嫌だっただけだよ」

「え、初耳なんだけど」

「今と昔は違うの。大会出るのに汗水垂らすのだけが正しいってわけじゃないんだよ」

「……時代かあ」

「そんなく時代もあつたねと〜」

そう、時代。日本史とか世界史で習う以上に今の移り変わりは早いらしい。身をもって感じる、とかそういうのはない。けど、流行りがものすごく早く変わるとは思う。小学生時代の流行は半年ぐらいいだつた。けど高校に入ってからは一ヶ月でなにかしらが変わってる気がする。みんな平然と話題に持ってくるけど、そういうアップデートを上手くやっていかないと生きていけないみたいだ。

「昔は昔で悪くない気がするけどなあ」

「そりゃ悪い処ばかりじゃないのはわかるよ」

かわらないものがあることもまた面白い気がする。歌舞伎とか漆塗りなんかはそうやって歴史と美しさを保ってきた。後継者がいないとどこかしこでも騒いでいるのは、今の流行があまりにも早いせいなのかもしれない。携帯が鳴った。父のスマホだった。

「あ、もしもし……はい……ええ……あ、そうなんですか、連絡が。……ちよつと待っていただけますか」

マイクを押さえ、書くものと紙を求めてきた。とつさにペン入れから貰い物のボールペンとチラシの裏面を渡す。「お待ちせしました。……ええ、まあそうです……そうです、七月二十日と来月の三日です。……まあ、なにもなければそうなりますね……」

「あ、その確認で……はい、初稿は取材日の翌々日です。……そうです、そういう感じですよ。……え、まあ、次回の連載に関してはメドが立っていますから。……はい、はい、何卒よろしくお願いします。……ああ、今日の件ですよ。……そうですか。じゃあ明日いただけます。……早いんですね。案外時間がかかるものかと。……いやいや、そういうつもりは。……はい、それでは明日。お疲れ様です」

「どしたの」

「編集長から。記事の連載計画の確認。上の人に休載の件で事情説明したんだけど、合ってるかってさ。あと番組変更の件で、放送時の映像もらえるってさ」

「え、編集長さんすごいくない？」

「昔のコネだって。うちの会社来る前はテレビもやっているとこに勤めてたからって」

「すごい人だね」

「辣腕奮つていまんとこに来たらしいけどな」

「じゃあお父さんは振り回されっぱなしってわけだ」

「いやいや、俺は俺で動いてるだけだし」

「でもこの企画通したのも編集長の一押しがって、でしょ？」

「まあな」

「じゃあその時点でぶんぶん回されてるようなもんだって。正直企画が通ると思つてなかつたって、前言つてたじゃん」

「洪い表情で何も言えなくなってしまった」

「まあともかくさ、映像来たら確認しよ」

「まあな……あ、またお前ちよつかい出す気だな」

もう踏ん切りつけて私にも手伝わせてよ、調べるの」

「……いやになっちゃうなあ……。わかった。ただし絶対に口外しないこと、約束しろよ」

「前にも言つてたじゃん。わかつてるって」

水をまた、ぐいと飲み干す。

「……よし、俺上に上がるわ。ちよつと調べものあるし」

「そ。じゃあ頑張つて」

「どうも」

階段を上がる音が響く。私にもやらねばならないことは山ほどある。たとえばそう、明日のテストの準備とか。

※※

喫煙室。またこいだ。編集長のお呼び出しはここが相場である。

「ほれ、例のデータ」

「すみません。お手を煩わせて」

「気にしないで」

赤マルを取り出し、火を点ける編集長。

「あたしくらいになるとこれぐらい造作もないのよ」

「かっこいいっすね」

「ま、かっこつけて言うことができるだけよ」

「確認する前に聞いちやうのはアレなんですけど、内容って変わってました？」

「内容自体は変わらなかつたけど、番組構成が結構入れ込んで、一部は別日放映になった。だから当日見てたであろう内容と番組表の内容が合致しないのも当然、って感じかな」

「なるほど」

自分も一吸いする。

「……一つ確認したい」

「はい」

「そのう、山田さんだけ。記憶障害になってる人」

「はい、仮称ではありませんけど」

「……本当に記憶障害？」

「え？」

「いやね、私昔少しかだけヘルプみたいな感じでテレビ制作の方に関わつたことあんのよ。四年前ね」

「はい」

「そんな時の番組さ、行方不明者とか記憶喪失者の捜索を行う番組だったのよ」

「ああ、たまにありますね」

俺がこの企画を編み出してしまった(と言っても差し支えない)原因になったああいふ番組のことだ。

「その時にね、ひとりの男の人が記憶喪失者として登場したんだよね。けど後々調べてみてびっくりしたの」

「なにかあつたんですか？」

「記憶喪失なんて真つ赤な嘘。本当は不法な長期滞在をする隠れ蓑にしてた外人だった、つてのよ」

「え、そんな悪用ができるんですか」

「できちゃうんだなこれが。うまくいけば新しい戸籍を得て晴れて永住」

「なんでわかつたんですか」

「ネット」

「え」

「ネットでその人が番組に登場した後からいろいろと探つた人たちがいたのよ。そしたらものすごく似た人が従業員として映つた写真が見つかったの」

「それで」

「警察沙汰にまでなつた。結局お金がないし就労ビザの有効期限も切れかかつて、身をくらまして記憶喪失者のふりをしはじめたつてわけだったの」

「……山田さんもその可能性がないわけではない、と」

「疑いたくはないけど、私の経験としてこういうことがあつただけは伝えておかないとつて思つたのよ」

「まあ、記憶喪失の認定は難しいところがありますしね」

「あんたも、少しは疑つてかかることも大事だつてのを忘れないでよ。記者としてさ」

「フェイクニュースの問題ですよ」

「いまじゃ記者すら騙されて、へたすりや誇張なんかを含めて偽情報流そうつていう魂胆の人間だつていないわけじゃない。うちの目が黒いうちにこの部署からそういつた記者を出したくないのよ」

「……俺は、大丈夫です」

「そう言つてる方がむしろ怖い」

言い返す言葉も無い。ここまで二回とはいえ連載で彼を

取り扱つてきた。もし、これが嘘で作られた砂上の楼閣であつたとしたら。

「ま、疑りすぎるのも相手に失礼ではあるけどね。じゃ、取材と連載頑張つて」

赤マルを捨て、颯爽と去つていった。俺の指先が、熱い灰がボロボロと落ちていた。

「……疑うことも、また仕事か」

かろうじて残つた一吸いを口元にやった。妙に辛かつた。

※

「本？」

「え、何でも良いので本を読みたいのですが」

「わかりました。ぢやあ来週中には用意しますから」

「あ、あの」

「はい？」

「今読める本は、何か在りますか」

「今すぐには？」

「え、」

「……あ、ある」

「本当ですか」

「一寸変わつてるかもしれないけど、此れなんて如何かしら」

園長の手元には、鮮やかな装丁の本があつた。

「此れね、私が少し前迄読んでゐた奴なんだけど、折角だからどうかかな？」

「有難う御座います」

「日本も含めて海外の自然に関するエッセイ集みたいな本だから、読み易いと思うわよ」

「ぢやあ御言葉に甘えて」

「読んだ後に返しに来てね」

「はい。すみません園長」

「気にしなひで。復た何かあつたらいつでもどうぞ」

「はい。失礼します」

無機質な廊下を渡る。手元の鮮やかさが壁面に、天井に反射する。

「さてと」

自室へとたどり着いた。早速読むことにした。

挿図が鮮やかである。単なる植物の緑や海や川の青だけではない、もつと深く清かな色合いが目飛び込んでくる。

それは、国内外の自然に纏わるエッセイ集だつた。書き手は国内での評価が高い一流作家。文字からも情景のありありとした様が浮かんでくる。

「……？」

ふと、一節が引つかつた。

——……の緑というものは、逞しさを感じずにはいられなひ。亜熱帯を生きる自然を見ると、嘗て気候と風土の繋がりを考へた哲学者の名前が自ずと浮かんでくるのである。此処に生きる生物も復た豊かさを感じずにはいられない。人々は自然に生き、生物達も同様に鮮やかさと我々が忘れた本能的な心を擦るのである。

写真に目を遣ることが、出来なひ。体中に此の文面から浮かんでくる包み込むような湿度と温度が、吐き気にまで繋がる。わなわなと体の震えが込み上げる。

——ハイレ！ヤツラダ！

——チクショウ、マウココマデ

あの声だ。違う声だ。何処かに身を潜めねは……。



——バカヤラウ！

怒号！バリバリと何かの音迄聞こえてくる。衣裳棚に身を潜める。声が、遠のかなひ。音が交錯する。声はなくなつた。音が近づき、上面を通過しようとする。……止まった。また別の音！それは刹那鳴り響き、再び前の音が遠のく。脂汗が止まなひ。身体が緊張で謂ふ事を聞かなひ。手元に目をやる。

「……！」  
自分でも覚えがない。だが、その両手は明らかにかう示していた。

奴らを、此の手で殺さねば。

注1：煙草銘柄である「マールボロ」の俗称。オリジナルのマールボロは白地に赤のMをもじったマークが目印。

注2：1935年に発表された量子力学的記述の不完全性を示すための思考実験。以下、ウィキペディアからの引用。

猫と放射性元素のある密閉した鋼鉄の箱の中で、放射性元素の「時間あたりの原子崩壊確率を $\alpha\%$ とし、ガイガー計数管が原子崩壊を検知すると電氣的に猫が殺される仕掛けにする」と「時間経過時点における原子の状態を表す関数は

「原子の状態 $| \rangle$ 」放射線を放出した $| + \rangle$ 放射線を放出して $| - \rangle$

と $\alpha\%$ の $| + \rangle$ の状態の $\alpha\%$ の重ね合わせによって表される。その結果、猫の生死は

「箱の中の状態 $| \rangle$ 」放射線が放出されたので「猫が死んでいる $| + \rangle$ 」放射線が放出されていないので「猫は生きていて $| - \rangle$ 」

と $\alpha\%$ の $| + \rangle$ の重ね合わせの状態になる。つまり、箱の中では、箱を開けてそれを確認するまで、猫が死んでいる状態と生きている状態の重ね合わせになる。これは量子力学的には全くおかしい（ $| + \rangle$ と $| - \rangle$ は全く、観測による波束の収縮の結果が相互に排他的で両立し得ない性質を持つ）この状態の間の選択になつていてはダメである。

もしも「それが現実を記述しているとするならば」「巨視的な観測をする場合には明確に区別して認識される巨視的な系の諸状態は観測がされていてもいなくても区別される」という「状態員分けの原理」と矛盾する。

要するに「量子力学的には、猫は条件下で死んでも生きてもいる。しかし現実的にはどちらかに区別されるべきである」という矛盾を示したものである。回答についてはいくつか提示されているもの、あくまで理論や解釈であり、明確なものは示されていないと言える。

## 第四章

※※※

「これが番組の映像？」

「そう。例の編集長から貸してもらったやつ」

「今日明日で確認する、つてわけ？」

「そうそう。まあ、放映時間の記録もあるから山田さんがフラッシュバックを起こした時の内容だけ確認すればいいんだけどね」

「でも一応全体見た方が良いと思うよ。せめてフラッシュバックする前のところはさ」

「どうして」

「もうお父さん、ちよつと考えてみてよ。フラッシュバックが起こったのは確かだけど、発作みたいにぽつと出で起こるとも限らなくない？」

「それってどういう」

「見て少し時間たってから頭の中で思い出して、そこで過去の記憶とつながって。だからなんていうの、時間差攻撃、みたいな」

「思い出し笑い、ならぬ思い出しフラッシュバック、みたいな感じか。まあそれもありえるか」

「時間、どれくらいあんの？」

「えっと、チャンネルが九個あって、一局あたり二時間ぐらいだから……」

「単純計算で十八時間」

「……見切れねえわ」

「いいよ、私も手伝う」

「おいお前」

「半分にしたらちようど二日で見切れるでしょ？」

「まあ確かにそうだけど」

「それにあたしもヒマだし」

「部活とか勉強とか大丈夫なのか？」

「あたしだってバカじゃないんだなあ、これが」

「は？」

「課題は今日帰ってきてからとつとと終わらせたし、部活も今週休みなんです」

「ふうん、仕方ねえな。お前、一応言つとくけど」

「はいはい、口外しません。前に言ったのだから覚えてるよ」

「それならいいすはいはい。じゃ、俺パソコンで確認するから」

「じゃうちはテレビ使わせてもらうね」

正直ワクワクしている自分がいる。父親の仕事に多少なりとも関わるんだ。それも取材対象の人を遠回しではあるが調査する仕事だ。

「お父さん最初どこの見る？」

「1チャンネル」

「じゃあ私8チャンネルから行くわ。その後で合流」

「おっけ。じゃあよろしく。メモ忘れんなよ」

「わかってますって」

テレビにメモリーカードを挿しこむ。再生。広下がりに流れる、ありきたりな絵面が動き始めた。

「山田さんだっけ、その人がフラッシュバックを起こしたの、いつだっけ」

「たしか午後の二時半」

「オッケー」

……

「んで、どうだった」

白米と野菜炒めをパクつきながら聞いてきた。

「いまんとこ8と7しか確認してないけど、メモってこんな感じ」

白紙に書き込んだ箇条書きを見せる

・8チャンネル

トップニュース。ジョン・カーター氏の会見について。

(1時1分から25分)

おそらく本来のトップニュース。国会について。

(1時25分から1時47分まで)

ニュース。〇〇国の情勢悪化について。クーデター発

生不可避で、緊張状態が続いているらしい。

(1時50分から2時10分まで)

ニュース。K県A市における予算不正利用問題について。

市長の発言「私の懐事情でありえないことぐらいわかるだろ」の発言で国全体からバッシング。

(2時12分から2時47分まで)

・7チャンネル

12時から放映中の番組で緊急中継。ジョン・カーター

ー氏の中継と識者による解説。

(1時15分まで)

ニュース番組。8チャンネルと酷似。内容は以下の通り。

国会↓〇〇国↓K県予算問題↓A県での事故↓株価

(1時15分から1時45分まで)

ドラマ。韓流ドラマ。主人公がヒロインの家庭に初めて上がる。しかし過去の素性を正直に話して出て行けと言われてしまう。

(1時45分から2時45分)

グルメ番組。中部地方の郷土料理。予定変更で時間が

ずれることへのテロップによる説明あり。

(2時45分から3時半)

「なるほどねえ。当初の予定と変わったところは？」

「7チャンネルが予定してなかったニュース番組でタイムテーブルを調整してるところかなあ。8は若干ずれ込んだだけ、っていうか。お父さんは？」

「いまのところ、1が番組再放送で生放送をお休みしたんだよね。それで、内容が大地震予測の話だった」

「それって関係ある可能性高くない？」

「例えば、災害に巻き込まれて命からがら逃げてきた。それからずっとさまよってた」

「要するに災害の行方不明者、ってところか」

「そうそう」

「相当前だけど、災害で死亡扱いだった人が偶然保護されたってニュースあったよな」

「あれって役所の手違いでそうなってたんだっけ」

「うーん、ちよつと思いいせない。けど可能性はある」

「とりあえず、飯食べたら最後まで確認しよ」

「だな」

どうしても気になる。

「つーかさ」

「なに？」

「もうお前、れっきとした記者だな」

「なにそれ」

「ここまで調べものに付き合ってたんだから、もう取材仲間みたいなもんだよ」

「親子じゃなくて？」

「まあ親子だからってのはあるんだけどさ、それにしたってこうも協力してるの、もう仕事仲間みたいな感じだ

よ

「またまた。人手が足りないから手伝ってるだけだよ」

「……ありがとな」

「べつにー」

白米と野菜炒めをばくつきながら、なんとなくに嬉しかった。

……

「おわったー」

とつくに日付を越えていた。ちまちま停止しながらと、これくらいかかるらしい。丁度上の階からも下りてくる音がした。

「終わったか？」

「うんまあ。メモもちゃんと取ったよ」

「ありがと。どれどれ」

二人のメモを組み合わせると、ざつとこんな感じになった(下段表参照)。

「さて、この前言った内容は」

「ずれ込むよりもお休みしてる方が多かった」

「編集長のアドバイス通りか」

「結構変わってるから確認しな、って？」

「うん。番組編成ってこうも変わっちゃうものなんだな」

「さすが元テレビマンだね。そういう事情わかってたんでしょ」

「んで、改めて見ると」

「8が県議会のニュース。K県に関連する可能性ありってことかな。7が韓流ドラマ。韓国繋がりがってありえるのかな」

「移民とか、旅行の記憶があったりしてな」

「6が特集でいじめの話してた」

「いじめで記憶障害を起こす可能性はあるって言うしな。

	8	7	6	5	4	2	1
13:00~13:10	トップニュース(ジョンカーター氏の会見)	緊急中継(ジョンカーター氏の会見・解説)	中継(ジョンカーター氏の会見)	中継(ジョン・カーター氏の会見)	中継(ジョン・カーター氏の会見)	中継(ジョン・カーター氏の会見)	中継(ジョン・カーター氏の会見)
13:10~13:20							
13:20~13:30					番組中のニュース	ニュース	ニュース
13:30~13:40	本来のトップニュース?(国会について)	ニュース番組	本来のトップニュース?(国会について)	本来のトップ(国会)	特集(清掃道具の特集)	福祉番組	美術番組
13:40~13:50							
13:50~14:00	ニュース(外国の情勢悪化について)		ニュース(K県議会)	ニュース(K県議会)			
14:00~14:10					特集(ファッション)	高校講座①(数学)	
14:10~14:20		韓流ドラマ					
14:20~14:30				特集(山梨県について)		高校講座②(漢文)	
14:30~14:40	ニュース(K県議会について)		特集(社内いじめについて)		特集(南太平洋諸島について)	高校講座③(生物)	番組再放送(大地震予測の最前線)
14:40~14:50							
14:50~15:00		グルメ番組(中部地方)					

※斜線部はと同じ時間帯で前後の内容が重複する時間帯である

「これも捨てられないな」

「あと、5の山梨県に関する特集も気になる」

「当たってたら出身地とかそういうたぐいを絞り込めるな。ちよっと内容教えてくれ」

「んつとね、食べ物関係が多かった。果物の新しい販路についてとか、その加工に関する話とか」

「果樹園とかそういう可能性は？」

「あり得ると思う。フラッシュバックの時間に被るし」

「可能性はつかり増えるな。んで、俺の方は」

「どうだった？」

「1はさっき言った通り。2は高校講座だった。数学と、漢文と生物」

「ばらばらだね」

「高校時代を思い出した可能性、つてところか」

「高校時代を思い出す。実はそこでいじめを受けていて、とかは？」

「番組をまたいで、か。ザッピングして観てたなら、あながち間違いじゃないかもな」

「だね」

「残る4なんだけど、他と違うから浮いて見える」

「逆に引き金になった可能性もあるでしょ」

「……清掃道具にファッション、海外ねえ」

「どれもカギになりそうだよ？」

「あー、絞り込めないな」

「いっぱいキーワードは出るけど、キリがないね。どうする？」

「次の取材の時に、この表を出してみる」

「持って行けるものは、実物持っていって見たら？」

「実物？」

「たとえばほら、清掃関係だったら番組中に出てきた清

掃道具を見せるとか」

「山梨とかK県だったらパンフレットとか、か」

「だね」

「……次回は山場になるかもしれないな」

「うん……」

「……紅羽」

「ん、なに？」

「もう少し、手伝ってくれないか」

「なにを？」

「次回の取材、お前も来ないか？」

「え、いいの」

「編集長とかには内緒だけだな」

「なんでまた」

「……単純に荷物が多いから」

「清掃道具とかパンフレットを集めて、つてこと？」

「俺、記事書いたりとかで集めるの難しいからさ。ほら、集めるのに必要なお金はなんとかするから。この通り」

「こども頭をさげられては、引き下がれない気がする。正直、私もここまで関わることはないと思わなかった。」

「手掛かりを紐解くヒントはたしかに教えたけど、まさか取材内容を直接扱うところまできた。私も、一人の人間で、気になる気持ちはたしかに抑えられない。」

「もし見つけたら、お父さんが怒られるよ？」

「そこは本当になんとかする」

「……次回の取材つていつだったけ」

「十二日」

「わかった。ものはできるかぎり集めてみる」

「……ありがと」

私も、一人の人間だ。山田さんの真実をどうしても知りたい気持ちは、記者の父と同じくらいまで来てしまった。

後戻りは、どうしてもできないんだ。

※※

七月六日。あと一週間。

「お疲れです」

「おう」

「取材、来週でしたっけ」

「まあな」

「どうです、記事書けそうですか？」

「取材無くして進むことは無いからな。いまは他の奴らの記事手伝ってる」

「なるほど。大変っすね」

「お前の方は？」

「ぼちぼちっすね。単発記事でなんとか食いつないでます」

「最近だと何書いた？」

「例のジョン・カーターですよ」

「あー、俺もあの教授には踊らされてな」

「どういうことですか？」

「まあそりゃいいよ。んで、記事はどんなよ」

「面白くなってきましたよ。俺の書いたやつでいいなら見せますよ」

「んじゃあ、お言葉に甘えて」

後輩が渡してきた記事は、こんなものだった。

「ジョン・カーター氏の語る人類の夢とは、ね」

「まあ読んでみてくださいよ」

「先日、全世界の主要メディアに向けて大々的な発表を行った米国物理学会の重鎮、ジョン・カーター氏。彼の新たな発表は会見後再び世界に発信され、学会の垣根を

越えて注目を集めている。ジョン・カーター氏は六月二十九日の会見後、会見時に整理できていなかった事実などを公式に発表した。七月三日に発表された文書によると、カーター氏は数百年以上にわたって人類の夢とされてきたある行為を可能とする理論を構築できたとしている。

この理論はあまりにも浮世離れしたものであり、人類の理解が追いつかない可能性があるとして、ここでも具体的内容は伏せるとした。ただし近日常に理論を実践におとしこめるために活動を行っていくとし、研究室の職員や関係者には既に内容をつたえたとのことである。一部メディアはこれに基づき、カーター氏の関係者にコンタクトを取って内容を尋ねたものの、徹底したかん口令が敷かれていたため全く内容を捉えることが出来なかったという。

「まあその後の文章は読まなくていいです。カーター氏の話とか経歴だけなんです」

「ふーん。理系科目はさっぱりだし、物理学なんてなおさらだめだわ」

「調べるだけで頭の容量を上回ってくるような情報量ですよ、ほんと」

「取材は続けるの」

「まあ、直接カーター氏の研究を探るのはやらないにしても、なんか変なマニアが湧いてるみたいなんでそっちを突いてみようかなって」

「いいんじゃないか、変に首突っ込むより賢明だよ」

「ですよね。あ、それじゃちょっと編集とかで集まりあるんで、ぼくはこれで」

「おう、がんばれ」

手元から紙をかっさらって行ってしまった。入れ替わりに、きびきびと編集長の姿が近づいてきた。

「どうよ調子は」

「あ、お疲れ様です」

「芸能記事はどうなってる？」

「もうすぐ校閲終わるんで今日には出せますよ」

「ならよし。連載お休みとはいえ、代わりにこういうの頑張ってもらわないと」

「多少休んだっていいじゃないっすかあ」

「バカ、記者が仕事場来てぼけっとしてるのほどアホ面かましてるものはないわよ」

「厳しいっすねえ」

「……あ、例のテレビ映像どうだったよ」

「いやほんと助かりました。フラッシュバックと重なりそうなのは抜き出してみました」

「そう、ならよかった。心当たりはどんな感じだった？」

「番組の変更が結構あって、候補もそれなりにありますね。各局特集やつてるところが多くて、もしかしたらそれかなあって。あ、これ書き出したやつです」

「……うーん、まだアテはあるけど直接はわからない状態よね」

「ですわね。取材の時にそれとなくワードを出してみても、反応を見た方が良くいかなって」

「直接言うんじゃないわよ、もしかしたらまたこの前みたいになるかもしれないんだから」

「わかってます」

「取材対象をいたわることもまた、記者の義務よ」

「はい。でも俺」

「なに？」

「勝手にですけど、思い出させることも必要なんじゃないかって思ってるんです」

「理由は？」

「アイデンティティ、っていうんですかね。山田さんはそれを記憶喪失でぼっかりと空欄にしている。それって、生きていくうえでとんでもない足かせになってしまっているんじゃないかって思うんです。過去がないことは、語れるものもないってことに直結しますから」

「身体だけが進んでいくのに中身がからっぽなのは、生きていくうえでとてつもなく大きな問題になるって？」

「そう、そんな感じですよ」

「確かにね。けど、あんた忘れてることがあるわよ」

「え？」

「記憶喪失のメカニズム」

「……記憶喪失は、脳が身体や精神を守るためにとるひとつの手段だったことですか」

「そのトリガーになったのは、間違いなく負の遺産だと私は思うね」

「それを思い出させるのは、酷すぎる」

「その通り。あんたがその責任を負えるか、って話よ」

沈黙が場を制する。

「第三者である人間が、この繊細な問題にどこまで首を突っ込んでいいのか、私にはどうとも言えない」

「たしかに」

「まあでも、あんたに明確な意思があるのなら、話は別よ」

「そりゃもちろん、あります、ありますよ」

「それは記者として？それとも、山田浩平という人間を見つめる人間として？」

要するに、職か人生かと問われている。山田さんをネタとして扱う職業記者、一方では記憶喪失へと彼と共に立ち向かっていく一介の関係者である。最初こそ前者ではあった。けれど数回とはいえ思い出せるか否かを問い、

思い出そうと悶え続ける彼に寄り添おうという意思が化  
確立しつつある。

「……どっちも、つていうのは答えとしてどうなんだし  
よう」

「ふーん、ひとつの正解なんじゃない？私に答えは出せ  
ないよ」

「はあ」

「けど意思があるのはいいことだ。そのまま行きな」

進むことが、彼にとつてどういう意味になってくるかな  
なんて、正直未知数だ。けど、俺は進むべきだという考え  
がある。それでいいのかと自問すれば答えにはまだ窮す  
る。けど、やっぱり意思があるのに変わりはない。

「書きますよ、やっぱ」

「いいよ。あんたがそうしたいなら」

「……はい」

来週が、本当の勝負になりそうだ。

※

「十二日」

久々の取材を受ける日である。取り敢へず謝りたいと  
思っている。何せ無理強いで自分が床に臥している中で  
取材をしてくれとせがんでしまい、赤江さんには困惑と  
余計な心配を掛けてしまった。

確かに取材対象としてさういう類の事は許されるのだ  
らう。然し乍ら赤江さんからすれば、症状を出したばか  
りの人間になんといふことをしているのか、とか取材対  
象である人への配慮の欠片も無いなどの風評被害が出か  
ねなかつた。

あの後数日で普通の生活に戻り、今の処は此の前のやう

な症状も出ていない。

「お詫びの品を赤江さんに渡したいのですが」

と、数日前に話した。

「お詫び？」

「倒れた後に無理を言つて取材させてしまった件で」

「あゝ、それなら」

園長と話して、私自身で品を選ぶことにした。記憶を

取り戻す手掛かりを探してみる事も兼ね合いだった。

此の町は所謂都心である。店の数は星程在り、行く前  
に店だけは決めておくとした。選んだのは和菓子のお店だ  
った。商品は水羊羹の詰め合わせにした。予約は園長に  
託した。

「最近電話予約だけしやなくて、ねつとでも出来るか  
ら」

この時にいんたあねつとという言葉を知った。簡単  
に言えば、世界中のありとあらゆる情報が携帯電話など  
の媒体を介して調べることが出来るらしい。とんでもな  
い世の中だ。膨大な情報を知る事が、さうも手軽に出来  
る世の中らしい。

ふと、私の知り得る情報が如何に矮小であるかを考え  
た。並の人間は過去があり、その過程でいんたあねつと  
だのを含めた莫大な数の媒体から情報を得てきた。其れ  
が記憶に留まっているか否かはさておき、私の比ではな  
い情報量を持つのだらう。

私は、喪っている物が多すぎる。戻るアテも無い。さう  
考えると、矢張記憶を取り戻すことが猶ほ更必要に感じ  
られてきたのである。

戸を叩く音がした。

「はい」

「私です」

「園長、どうぞ」

「山田さん、此れ」

件の水羊羹だ。冷蔵しておいてくれたものだった。

「有難う御座います」

「ちゃんと渡してね。あ、あとこれ。取材の合間にでも  
食べて」

「此れは？」

「ゼリイ。果物の」

「ああ、だうも」

「あと十分位です、て連絡がありましたから」

「分かりました」

「ぢや、また後で」

僅かに結露を出した白い箸器が二つ。スプーン。あと

は記者が来るのを待っただけだった。

……

「いやお待たせしました」

「とんでもない。あの」

「はい」

「此れ、先日のお詫びと謂つては難ですが」

「いやいや、これはだうもご丁寧に」

「此の前は無理をさせてすみませんでした」

「お氣になさらず。だつて山田さんきつての御願いでし  
たから」

「しかし上司とかに何か言われませんでしたか」

「事情は理解してくれたやうでしたから」

「あゝ、なら良かった。あと、これ園長さんが合間にで  
もどうぞ、て」

「いやこれはだうもすみません。後で頂きます」

「あ、ゼリイらしひので早めに召し上がつて下さい」

「さうですか。……なら取材前に戴きますか」

「さうですね。あ、でも一つ足りないや」

「え？」

「いや実はですね、今日来たのは私だけしやないんです」

「どういうことですか？」

「余りに荷物が多いのとかあつて、実は娘が」

廊下から物音がしたのはさういう訳らしかった。

「赤江さんの娘さんが」

「え。いまトイレに行つてまして。じき来ますから」

戸を叩く音。

「あ、紅羽、入つて良ひぞ」

「失礼します……」

制服と思われる姿の少女だった。僅かに茶色がかつた髪

に、黒黒とした瞳。

「こんにちは……」

「此方が山田さん」

「はじめまして。赤江紅羽と申します」

「正座して丁寧なだうも。山田浩平と二応、申します」

「宜しく願ひします」

「……其れで、今回の取材ですが」

「はい」

「記憶についてもう少し踏み込まうと思つております」

「え」

「ですので、若し御辛いやうでしたら正直に仰つて下さ

い。其の時点で取材は中止します」

「分かりました」

「宜しいですか」

「私」

「はい、何か」

「思ひ出すのは、覚悟の上ですから」

「……了解しました。では」

少女が持つてきたらしひ物品を手元に移した。

「今回は、先日のふらつしゅばつくの際に山田さんが観

ていたと思われる番組を探してみ、関連するであらう

物をお見せします。もし、心当たりが在る時には正直に

仰つて下さい」

「はい」

「では先ず」

写真集だった。崩壊した街が表紙を飾つていた。

「此方は過去に発生した大地震の記録写真集です。何か

心当たりは」

確かに見るのは辛い。だが、何か思い出すような感覚は

無い。

「いいえ」

「わかりました」

娘さんがメモを取つてゐる。

「では次に」

大きな文字で漢文と生物と書かれた本を出してきた。

「まあこれは娘なのですが、教科書です。2チャンネルで

は高校講座という番組がありまして、時間的にこの教科

ではないか、と思われます。如何でせう」

漢文は習つた事がある気がする。何となくは理解出来

る。生物は殆ど用語が解らない。

「漢文は多少理解できます。けど、此方の方は」

「……で、生物は心当たりが全く無し、か」

「これはさんがぼつりと呟く。

「大丈夫か？」

「うん」

「よしぢやあ次」

「ごめん、此れ先にして」

「わかつた。是れは如何でせう」

「此れは？」

「昨今社会問題となつてゐる会社内のいじめに関する新

聞の切り抜きです」

「……読むのはかなり辛いですが、思ひ出すことは特に」

「はあ。では」

一枚の紙を渡してきた。

「4チャンネルでは、山梨県の特集が行われていました

あと8チャンネルではK県のニュースを放映していまし

た。何か心当たりがありますか？」

「……山梨県の方は、行つた事があるとは思ひます。け

ど記憶が呼び起こされるやうな感覚はそれ以外特に」

「さうですか。では次」

薄めのケースを取り出した。

「7チャンネルで現在放映中の作品です」

海外か。いや、韓国だ。かういう名は多分さうだらう。

……韓国？

「……あ」

「何か！」

一気に赤江記者の表情が変わる。

「行つたことがある。多分」

「具体的に思い出せる事は在りますか」

「……いや、風景とか何をしたとかは思い出せません

けど、韓国ですよね」

「はい」

「い、行つた事があるのは、多分、ある、かも」

「分かりました。有難う御座います」

「……反応在り、と」

「では最後です」

一枚の冊子だった。緑が多く、人々の様相も此の国とは

全く異なる。

「南太平洋諸島に関する特集があつたのですが、何か」

……

「山田さん？」

「……」

「大丈夫ですか」

「……なにも、思い出すやうな事は無いです」

「わかりました」

「……」

淡々とくればさんがメモを記してゐた。

「では最後に、先日以降、何か新たに思ひ出したこと等は在りますか？」

「……いえ、全く」

「さうですか。分りました。……これで、今日の取材は終わりです」

全員、嘆息を漏らした。

「お疲れさまでした」

「いえ。こんなに調べて下さったのに、何も思い出せなくてすみません」

「いえ。記憶と云うものはさう容易く戻るものではないですから。すみません、御手洗いに」

「どうぞ。右の突き当りです」

「どうも」

とと、と赤江さんが去つて行く。部屋の中、少女と二人きりになる。

「……あの」

ふと、意識の外から声がした。

「はい？」

「一つ、いいですか」

「何か」

「肌、結構焼けてますね」

意表を突く言葉だつた。つい鼻で笑う。

「さうですかね？」

「なんかかう、勝手なイメージで色白なのかなあ、とか思つてたんですけど、まるで外作業がご職業の方みたいだな、て」

「どうでせう。さういう人は、筋骨隆々とした容貌では」

「ですよ。山田さん、かなり細身ですしね」

「……？」

「あの、なにか」

「……デ

「あゝ、いえ」

戸が開く。赤江記者だ。

「いや、お待たせしました。今日は有難う御座いました」

「いいえ。記事の作成、宜しく願ひします」

「はい」

「あ！」

「何か！」

二人が、私を凝視してきた。

「……ゼリイ、食べて下さい」

机上の白容器の結露は、縁取りに沿つて立体的な池を作つていた。容器に吸い付いて離れることは、さうさうない。

※※

「じゃ、今日の取材まとめ」

「山田さんが観ていた番組は、反応から見てもおそらく7チャンネルの韓流ドラマ。たまたまチャンネル回して観たんでしよう。行ったことがある、つまり韓国への渡航歴がある。これはかなり重要な手掛かりだね。まあ他にも微

妙な反応があつたのは、5チャンネルの山梨県。でも日本人

なら行つてもおかしくないから、手掛かりとしては力が弱い。記憶喪失にいじめとかが関わっている可能性も

ほぼないと言つて過言じゃない。南太平洋諸島については、言葉数が少ないけどあんまり反応は無かつた。本人

の言うことを尊重すれば、まあほ関係ないかな。こんなところ？」

「オツケー。これでかなり進んだな」

「でもよかつたね。またフラッシュバックを起こさないで」

「うん。正直心の中でヒヤヒヤしてた」

「とりあえず、来週の記事は書けるよね」

「ああ。今回は良い按配の記事になるだろう」

「ねえねえ」

「なんだ？」

「これ、メモとかには書いてなかつたけど、ひとつ感じたこと言つていい？」

「ああ」

「南太平洋諸島の件でさ」

「うん」

「表情すごく曇つてなかつた？」

「そうか？」

「なんかそだけ他と違うなあって」

「けど、ちゃんと見てなにか心当たり無いかじっくり見ただけじゃないのか」

「かなあ、わかんないけど」

「でもとりあえず、記事はメモベースで進めるよ」

「うん」

「ほんと、今日はありがとな。悪いな、学校休ませて」

「いいのいいの。たまには自主的な休養も必要なの」



「……みんなには内緒だからな」

「分かってるって。それより、貰ったゼリー。冷やして後で食べよ」

「そうだな。ちなみに味ってなんなの？」

「えつとね、あ、マンゴー味だつてさ」

「へえ。俺も食えるな。メロン俺だめだからさ」

「そうだったね。じゃあ一緒に食べようね」

「だな」

「あともらった羊羹、見た？」

「ああ、結構いいやつだよな」

「結構どころじゃないよ。創業三百年とかするお店だよ」

「まじか。あとでお返しした方が良いかな」

「かもね」

……

忌々しい場所。

あの、絶望に打ちひしがれ、紅を見た場所。

あの去りゆくかつての光景。

誓い。そんなものの保証なんて、無かったんだ。

ここは、夢の跡。

そして、

## 第五章

※※※

二十日の取材で聞き取った内容は、しっかりと今日の記事になっていった。自分が見聞きした内容が二流三流のものとはいえず、記事として文字になったのだ。なんとも言えない不思議な感覚と一緒に、ちよつぴりの優越感みたいなものを感じた。

「あ」

この前休んだから、つぎの授業で出す課題があるなんて知らなかった。友達に聞いておけば良かったのに、たかをくくってそんなもの無いと思いついてしまった。気づいたのが三十分前で間に合うはずもなく、正直に忘れたというしかない。こっぴどく叱られるのは目に見えている。なにせ先生が怖い。

「うーん……」

いっそのこと仮病でも使って休もうか。正直だるい。

先生のやり方も気に入らないし、態度も悪い。クラスの評価も同じようなもので、仕方がないから出てやってくるよ、といった感じである。

スマホの通知が鳴った。

「お父さん？」

余程のことじゃない限り連絡をよこすことはない。案の定画面を開くと、最後に話したのが電車の大きなダイヤ乱れがあった数か月前で止まっていた。

その下に、ひとことだけこうあった。

「記事の連載がもうできないかもしれない」

何があったのか。先週の取材では、何も問題がなかったはずだ。山田さんの体調も健康そのものだったし、記事も何事もなく今日発表されたばかりなのに。

どうしたの、と返事をした。既読はすぐについた。また返答があった。

「帰ったら話す」

よっぽど複雑なことがあったのだろうか。今朝も何時もと同じように家を出た。たぶん父本人のせいではないだろう。ならやっぱ、山田さんに何かあったのだろうか。

そこに、チャイムの音が意識を遮ってきた。数字の授業が目前に迫ってきた。内心は方程式だの定理だのを押し込まれる余裕なんてない。ため息だけ漏らし、意識は外に行つたままでいいからと、なくなく五十分をノート取りに費やそうと決めていた。

……

ちやつちやつと帰り支度を済ませ、急ぎ足で帰った。単語帳にも、文法書にも目は通せなかった。ただただ、父親の書く記事についてだけが、頭をめぐっていた。

「ただいま」

父親の革靴が、いつものように程よくぐちゃつとして置かれていた。

「おかえり」

居間のテーブルに、PCだけを置いて座っていた。夕食の買い出しまで済ませていた。

「なに、お父さん料理するの」

「まあ今日は、早かったから……」

「早上がりしたの？」

珍しい。九時五時の勤務がやっぱりに性に合うんだ、とよく言う人が早上がりなんて変な感じだ。

「まあな」

「それって、やっぱり……」

「……そういうこと」

人間、落ち込むときには休みが要なんだよ、とほそりと呟いた。

「どうしたの、突然休載って？」

「……実はな」

「うん」

沈痛な面持ちがにじみ出ていた。私には表情が出やすい人だけれど、マイナスの感情を見せることは正直珍しかった。

「山田さんがな」

「どうしたの？」

「……取材拒否に入ってた」

「え？」

※※

「え、それってどういう？」

出版社早々、編集長の口から出た言葉。

「言ってるでしょ？例の山田さん、しばらく取材は受けられないって昨日夜に連絡があったのよ」

「理由は」

「そんなの聞いてどうしようっての。まあ理由としては、精神的な問題がどうか、って」

「先週までは問題がなかったはずでは」

「それは先週までの話。そんなのコロナと変わってもお

かしくないでしょ。とにかく、例の連載は一旦休止。第五回の取材は無期限延期ってことで」

「しかし」

「あんただってわかってるでしょ、取材対象の尊厳を優先しなきゃいけないのは」

「それは当然です。けど」

「とにかく！今日からしばらくは、この前みたいに後輩君とかの補助に入って」

もう、致し方ない事はわかっていた。だが、ここまで来て、記憶を呼び戻す手掛かりすらも手元に揃ったというのに、そこで地団太を踏めというのは酷だった。

小一時間何にも手を付けられず、胸元のタバコに手を付け、喫煙所へと向かった。

「先輩」

先輩だった。ジョン・カーターに関する記事は既に出し終え、今週から来週でまた新しい関連記事を書いているらしかった。

「お前、タバコ吸うんだっけか」

「言ってませんでしたっけ。普通に吸いますよ」

「そうか……」

一口メビウスに口を付けた先輩がこちらを覗いた。少し考えて、口を開いた。

「連載の件ですよね」

「……知ってたのか」

「昨日校正作業あつて遅くまでいたので。編集長から少し話は聞きました」

「……無気力になったよ、正直」

「まあ連載通ったあと、順調にここまで来てましたからね」

「どうにもわからない。なんで突然取材拒否なんかに」

「……あれじゃないっすか」

「え？」

「もう、記憶戻ったんじゃないっすか」

「は？」

「戻ったせいで、これ以上話すのがしんどくなったとか」

「でもこの前の取材では」

「それから何日経ちました？……ちようど一週間でしたよね。あれから頭の中で取材の事が整理されて、いよいよ記憶と結びついた。そう考えられませんか？」

「……どうかな」

「だからこれ以上の取材は限界だと思って、取材拒否に至った。そう考えるのも出来んじゃないっすかね」

「じゃあ、俺の連載はこれで終いにしたほうがいいってわけか」

「あ、でも」

「うん？」

「取材拒否、つても妙ですよ」

「ていうと？」

「山田さん、ここまで取材に同意してきたんですよ。だったら記憶が戻っても、正直に話してくれそうなものじゃないですか」

「いや、戻ったからこそ話したくないんだと思う」

「どういうことっすか」

「戻った内容だよ」

「え？」

「あまりにも酷な内容だった。そんなだったら、話さずに終いにしたほうが自分以外誰も傷つかないでいいんじゃないか、って」

「……聞く側に配慮した結果、ですか」

「そ」

先輩の一本から灰がぼとりと落ちた。

「先輩に言っちゃなんですけど、連載はおじゃんってことっすかね」

「……さあな」

「でも取材拒否っすよ？」

「山田さん側に何か変化があるかもしれない。俺はそれに賭けるよ」

「万に一つでも可能性があるなら、ってことっすか？」

「……俺は、山田さんが話してくれるのを待つ」

「それでこそ記者よ」

「あ、どうも」

「赤江くん、よかったわ。あんたがそれぐらいの肝っ玉っだ」

「どういうことですか」

「あたしね、正直最初の段階で最後まで行けるのかわかって思ってたのよ。あんたも曲がりなりにも所帯をもってるわけでしょ？」

「まあ、そりやそうですけど」

「それで怖気づいてしまう気がしてたの、心の底で。取材対象が記憶喪失者なら、丁重な扱いをせざるを得ない。そんな時、取材を行う人はどうしても大変な立場になる。それで、最終的には難しい局面に陥った時、逃げちまうやつだっていっぱいいる。でもあんたは違う。なにせ入社当時から世話してきた部下だしね。なんとなくでも心持ちのひとつやふたつ、わかるのよ」

「……曲がりなりにも十年は優に超えていますしね」

「そうそう。記者として、あんたは強い。そう思ってる。この局面で、こう言えるお前はいい記者だと思うよ」

「……ありがとうございます」

「……ありがとうございます」

「……ありがとうございます」

「赤江」

「はい」

「……お前が進む道は、お前が決める。だが、私はどちらに行こうが、後押ししてやるよ」

「俺は」

「なに？」

「……進みます」

「そ。んじゃ、やりな。私は止めないから」

「……はい」

※※※

「んで、お父さんは待つてあげるってわけ？」

「んまあ、そういうことになるかな」

出来合いの総菜に手を付けながら、事の次第を聞いた父はその判断を下したけれど、正直ひっかかりが抜けないうだった。

「上の人たちは待つてくれるの？」

「編集長がかけあってくれて、とりあえず大丈夫らしい」

「うーん。でもそう言ってもさ、休載が長くなったらさすがに中止になるんじゃないの？」

「よほどの場合だな。けど理由が分かりきってる以上、むやみには終われないだろうって。それに」

「なに？」

「読者アンケートっていうのがたまに来るんだけど、それなりに俺の連載が読まれてるらしくて」

「そうなんだ」

「うん。うちの雑誌の読者は、まあ他のやつと比べてもまだ読む世代が広いから。需要っていうかそういうところろが、それなりにあるってのがわかるんだ」

「アンケートってお父さんも目を通せるの？」

「コメントがあるやつはね」

「どういう感じなの？」

「たとえば着眼点が面白く、他人事と思えない記事として読んでいるってのがあったな」

「そうだね。記憶喪失って意外なきっかけで起こることもあるらしいしね」

「そうそう。それに現にいまそれに悩まされている実際の人間としての山田さんって存在が読者には印象深いらしい」

「だからこそ他人事にはできないって感じなんだろうね」

「でもちよつと思ふことがあつてさ」

「なに？」

「一応雑誌の記事として彼に関する記録と調査を進めるわけだろ？それってなんかある意味エンタメの一環みたいになつてるんじゃないかって」

「読み手は字面で追うだけで、興味深いって言っても山田さんに寄り添つて読むとか、そういう読者の記事に向き合う時の人間性が保証できないってこと？」

「難しい言い方するんだな。まあでもそういうこと」

「でもメディアってそういうもんじゃない？」

「え？」

「テレビも雑誌も、いまのSNSでも、結局伝える手段を通してしか知れない事はつきりじゃない？だからそこに、人間性を踏まえて知るってことを記者が必ず保証できるわけじゃない。だからその代わりに取材はその対象を優先して取材とその記録するわけだし」

「まあな」

「お父さんちよつと心配し過ぎじゃない？たしかに山田さんって人間を大事にしたい。だからあつちが取材拒否

をしてきたらちゃんと踏みとどまつて、周りももう少し待とうつてなったわけじゃん。でも最初は山田さんだつて思い出そうとか、ほんとうの自分自身のことを探してほしいって思ったからこそ取材が始まつたんでしょ。だつたらまたそのチャンスは来ると思うよ。そんな時にお父さんが手を差し出さなくてどうすんの？読み手のこともそうだけど、取材を受けようつて決めた山田さんと、それをくみ取つたお父さんのこと。これが一番大事なんじゃないの？」

「……たしかにな」

「でしょ？だつたら責任もつて最後までついていっただけだよ」

「……だな」

※※

「お疲れ様です」

「よう」

後輩が出社してきた。手元には紙資料のケースをぶら下げていた。

「また記事の執筆か」

「まあ、家帰つてもなにがあるってわけじゃないですし。多少書き換えとかそういうのをやっておこうかなつて」

「なるほど感心感心」

「あ、この前書いた例の物理学者ジョン・カーターに関する新しい記事なんですけど」

「へえ。読ませてよ」

「あ、どうぞ。なんか妙な動きを始めたみたいで」

そこにはこう書いてあった。

ジョン・カーター氏とその周辺人物たちが秘密裏になに

かしらの製造を開始したことが判明した。右腕的存在であるキャサリン・ハインツ氏に関しては、特殊工具や一般流通していない素材などを、莫大な費用を投じて入手しており、卸元いわく「実験や試作品への利用のためにしても、異常な量と焦り具合であった。なにかカーター氏に関する新しい行動のため準備を進めているのでは」と語った。具体的な品目についてはプライバシーポリシーにより明かされなかったものの、総額としては優に数百万を超えるとの事である。他の関係者としては、大学の研究室で補助などにあたっている学生や大学院生らも頻繁なカーター氏への接触、ならびに研究室への出入りが目撃されている。一部筋は学生ら数人へ接触を試みたものの、嚴重なかん口令や大学側が彼らへ特別な配慮を施しているため、情報入手以前の問題であったとの事である。

「金にも言わせて何を作ろうとしてるんだか」

「これで社会変わるかもしれないよ。なんて」

「物理学の実験って言うところになにかかかるものなのかね」

「ちよっと調べましたけど、分野によりけりってことみたいですよ。でもカーター氏の研究はどうやら実験とは縁遠い界限らしいんですよ。だからなおさら変な目で見られてるそうよ」

「それ記事に書いておけよ。おもしろいから」

「あ……。そうっすね、これ書きます。分量増やそうかと思っただけで。ありがとうございます！」

「んじや頑張っつて」

後輩が少し先のデスクにつくのと同時に、編集長が慌ただしく入ってきた。

「お疲れ様です」

「おっす」

「忙しいんですか」

「編集会議が今日は立て込んでね。最初がもう一時間ないで始まるんよ。あ、赤江。タバコ行こうよ」

「あ、はい」

そそくさと喫煙所へと向かう。編集長が珍しくヒールを履いていて、カツンカツンと心地よく煙への中とあゆみを進めた。

淡い青色のパッケージを取り出す。編集長は真っ白のソフトボックスをまさぐり出した。

「あ」

「火、ありますよ」

「あんがと……。慌てて家なんか出るもんじゃないわ」  
ライターを着火し、啞えた白く細い筒にあかりを灯す。

「……ははん。連載の件、なんかひと段落したな？」

「……ほんと編集長って、他人のこと察するの上手いですよね」

「ま、人が居なくちゃ記事なんて作れないんだし。人を見る眼は多少鍛えられたのかな」

「なんにせよ、編集長の言う通りです。昨日娘に説得されちゃいました」

「ははあ。子煩悩は大変ですな」

「もう高校生になりましたよ。この前の取材でも手伝ってもらっちゃいましたし」

「ああ、言っただけね。なんだっけ、取材で物持ちしてくれたんだっけ」

「そうなんです。学校どうすんだっていったら別にいいっつて」

「娘さんもあれかね、記者になるのかね」

「やめさせますよ、そんなこと言ったら」

「なんでよ。うちにきたら敏腕親子記者の誕生よ？ いいネタにもなるし、会社としても話題性になるからいいと思うけどな」

「話題にされるこっちの身にもなっってくださいよ。話題通り越して冷やかされますよ」

タバコに一度口づける。  
「まあそんな娘に言われたんですよ。お父さんは記者なんだから、取材に同意した山田さんを待つてあげることでも仕事なんだって」

「いやかっこいいこと言うねえ。しかも的を射た意見だよ」

「書くことばっか集中してましたけど、取材相手を尊重して待つこともまた仕事のひとつって教えられるとは思いませんでしたよ。大人なのは娘の方だったのかもしれないですね」

「まあ高校生って微妙な年ごろだもんね。大人にもなりきれない。かと言って子供と言うには年が過ぎて、みないな。だから基本子供扱ってない青臭い言葉の中に、たまーにうちらが忘れたような意識を呼び起こすことを言うから馬鹿にできない」

「ほんとそう思います。今回痛感しましたよ」

「……もしかしたらだけどさ」

「はい？」

「娘さん、自分で動くかもね」

「え？」

「いやなんとなくね、お前との取材に同行したって言うたから。山田さんのいる施設の場所は把握してるんだろ？」

「そうですね、多分」

「んでき、多分娘さんもそれなりに山田さんに関心があると思うんだよ。だってそもそも休みまで取って父親の取材に行くんだよ？」

「まあ……確かに……」

「なら勝手に動くよ。取材が滞ってるって聞いたたら多分いてもたつてもいらなくなるんじゃない？あんと同じくらいには」

「そうだったら、止めた方が良くいですかね」

「あー。難しいところだよ。正直うちらが関われる範疇じゃないから。取材外の出来事であるから取材うんぬんで止められるかっていわれると難しいわな」

「……方が一取材に影響出るようなら言っておきますね」

「ま、私は吉と出る方に見るけど。血筋だよ、お前の」

「え？」

「おまえ、取材のうまいやつだから。血は争えないんだよなあ」

※※※

結局、来てしまった。出かけのついでにと思つて来てみたものの、いざ施設の目の前まで来ると変に緊張感がただよう。突然の取材拒否というのが珍しいのは、言葉が強いことから明らかだった。一度取材に関わつたとはいえ、ここまでして良いのだろうかとも思う。けれど、父親は待つことにしたとしても先に動く保証はない。なら自分から行くことも、それも秘密裏にすることが必要なんじゃないのか。どうしてこんなことを考えたのかと聞かれたら答えられない。あやふやな心のままであったけれど、それでもやらなければという言葉がひつついて離れなかった。

正門をくぐり、事務所へと向かう。たしか園長先生がいて、その人に事情を話して通してもらうことにした。この前の取材でも同じようにして面会した。

玄関の右手にある事務室には、既に人の姿があった。

「ごめん、ださい……」

「どちら様でしょう」

「あ、あの実は、父から言伝てを預かってきまして……」

とつさに嘘をついてしまった。まずかつたかも。

「ああ。赤江さんの娘さんですね。申し訳ないんですけど、本人は今メンタルの不調を訴えておりました」

「あ、あの、いま山田さんの容体って……」

「からだの方は問題ないんですけどね。どうも不安障害のような感じで」

「ど、どうしても面会はできないって感じですかね」

「そうですね。あ、伝言なら私が伝えておきますので」

「あ、はい、その……次回の取材をどうするかについてだったので……可能なら少しお話できればと思つたんですけど、無理ですよ」

「ああ、そうでしたか。本当に申し訳ないです」

「いいんです。仕方ないですよ。……あの、最近様子の変わったことかありました？」

「え？」

「いや、正直突然取材拒否になつたんで、父も私も驚いちゃって」

「そうなんですよ。私の方にも突然拒否するって連絡をしてくれて言われて」

「そうだったんですか」

「ええ。あ、立ち話もなんですから、部屋にどうぞ」

「よろしいんですか」

「ええ。お父様にもこちらの事情を伝えてもらおうと思

つてましたから」

「あ、じゃあ失礼します」

事務室の隣にある応接室に通された。校長室みたいなあの感じだ。

「お茶どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

「しかしまあ、驚かれますよね。あんなに積極的に取材を受けてた山田さんがね。突然でしたから」

「それで、様子が変だつたとかってありました？」

「前回の取材が二十日でしたよね。あのあと数日は別に何もなかったんですけど、たしか……十六日ごろだったかしら。突然私のところに来て、赤江記者の取材を当面止めてくれて。十三日、何かありました？」

「いや。……あ、でもあの時は記憶の手掛かりを探していて、庵路なものを見せてみたところだったんですけど」

「なるほど。……もしかして、なにか記憶に関わることがあつたんじゃない？」

「ああ。確か韓国に関連したパンフレットか何かを見せたら、行ったことがあるかもしれないって」

「……まさかと思うけど、記憶が」

「……!!」

「それで、もうこれ以上喋りたくないと思つたのかしら。それだつたら大変」

ありえなくはない事だった。けれど、正直取材拒否をするほどの記憶を取り戻したのだろうか。

「韓国に関連した記憶で、過去に何かあつたのかも」

「そうですね。……もし思い出しているのなら、やっぱり今はそつとしておいてあげた方が」

「いい、ですよ。……話せるときになつてからでも遅くはないですからね」

「ええ。……あれ？」  
「え？ ……あ！」  
外の庭園に山田さんがいた。

「ここ何日かは最低限しか部屋を出てなかったのに」  
「あ、私声かけてきますす！」  
「あ、ちよつと！」  
いてもたってもいられなくなった。

「あ、山田さん！」  
「……ああ、この前の」  
「あ、あの、お話だけでも聞けないかと思ってきたんですけど……」  
「申し訳ないですが、私から直接お話しするのは」

「それでいいんですか！」  
「……え？」  
「父はいつまでも待つって決めてます！そりや、記憶を取り戻してつらいのはわかります！」  
「……」

「けど、もし、もし覚悟を決めてくれるのなら、私も、お父さんも、覚悟を決めて話を聞きに行きますから！」

「……くれはさん、でしたっけか」

「はい、赤江紅羽です……！」

「……くれはさんは、携帯電話、持つてる？」

「え、あ、はい、一応」

「……お父さんの前に、君に話をするかもしれない。だから、君の連絡先を知りたいんだけど……」

「あ、あ、わかりました！ちよつと待ってください！」

スマホの連絡先を持ち合わせの小テストの用紙に書き殴り、山田さんに渡す。

「……ありがとう」

彼がちよつとほほ笑む。黒々とした瞳。立ち姿はこの

前見た時よりも凛々しく、背筋の張りが紳士のようにだった。和服を着たらシユツとして、涼しげな姿になるだろう。……やだ、何考えてるんだろ。

「あ、あ、あの、私そろそろ時間が」  
「ああ、ごめんね。近いうちに連絡するかもしれないから」  
「はい！待ってます！」

「……お父さんには、ギリギリまで秘密にしておいてね。君が怒られてしまうから」

「……ご親切にどうも……」

「あ、引き留めちゃったね。それじゃあ、また」

「はい……」

トボトボと帰っていく。園長先生にも挨拶をした。

「……まさかねえ。偶然ってのもあるのね」

そう言っていた。

……私の中には一つの確信がある。そう遠くないうち。私も、父も。彼の真実を知ることになる。しかもあまりに残酷で、救いのない真実。

※

手元の紙切を何時までも見つめていた。窓際にはあの日から咲く健気なムギワラギクが数輪程夜空を見上げている。

「くれはさん、か」

然るべき時を探していた気がする。元はと言えば二十日の取材からだ。あの日見つけた「モノ」に、最初は気掛り程度の感触が在ったのみだった。あの一つだけ、何時迄経つても心の琴線を揺す振り、振動が徐徐に増していった。数日もしなひ内に……。

私はいずれ、此の事に向かい合ふべきなのだ。然しこの数日は逃避ばかりに時間を費やした。どうすべきでもなひ。私が沈黙を通すことが、何も起こらず、誰しも負の感情を抱くこと無く、平穩に私と接することが出来る。何ら気兼ねなく、私は山田浩平として在り、此岸に居て良ひのだと感じ続けられる。さう、究極の平和である。だが、あの子は、あの親子は、真実を知る覚悟がある。其れに応えることは、人間としての責務なのではないか？

真実の残酷たる性質は疑いやうもない。然し、その覚悟を持ち私に接する、其の意思を蔑ろにする事は、果たして最適解であらうか？

ムギワラギクの一輪が突如として折れた。突風のせいであつた。矢張、私には先に進むべき義務のやうなものがある。進むべきなのである。

私は停滞した存在だったのだ。時間という概念の一方的な進行の中、私はあくまで停滞を余儀なくされた異常事態の最中に居る不可思議であつた。然し其れも、決断

を下すことで解放される。確かにそれが一概に、私自身の理想を形作る為の過程に必要であるとは考え難い。だが、困難や現実には、私の実存に向き合ふ事もまた必要な行為である。

此の高まりゆく気温と湿度、そして冷え行く現実には枯れ果てる前に、私は

「明日。彼女に連絡をしないと」

決意の後、寢床へと入る。……だが、一つだけ釈然としない事がある。

なぜ、私は「此処」に来る事が出来たのか？

※※※

一昨日の大胆な突撃は、連絡先を渡すというかなり大きな成果をのこした。しかも、間近に山田さんの姿を見るということまでしてしまつた。何度も取材している父よりもまじまじと見つめた気がした。

その件のことはしっかりと内緒にした。多分記者というしつかりとした身分の人に対してだと、率直な気持ちと言いつつ思いと違ったのだろう、と考えている。そこに私があるわけだ。なんとも鼻が高いというか、責任重大というか。

「……でも多分、少し時間があるだろうなあ」

昼ご飯を食べながら、外の照り付ける日差しをみつめる。高校は既に夏休みで、家の中はクーラーで冷やしきつている。父も今日は仕事だ。お母さんも遠征があるとかでまたしばらくは帰ってこない。

「……課題もちまぢまやらんなあ」

アイスでもかじつて、この部屋で涼みながら嫌いな英語の課題でもやろうかしら。

と思つた矢先、スマホの着信音が鳴つた。LINEじゃない。誰だろう。……もしかして？

「……もしもし？」

「くればさん？私です。山田です」

「……もしかして」

「ええまあ。そういうことです」

「あの、ほんとこの前はすみませんでした」

「いいんです。取材拒否したのはお父さんにですし、なによりお二人の気持ちを知れたのは良いことでしたから」

「そうですか」

「……お近くにお父さんはいますか？」

「いえ、今日も仕事で」

「そうですよね。平日昼間ですしね。くればさんは？」

「もう夏休みに入ってますから」

「そうでしたね。長期休暇の始まる時期ですよ今は」

「ええ」

「……くればさん、まずあなたに感謝を伝えないといけない」

「え？」

「……この前のあなたの一声で、決断が下せましたから」

「ああいや、そんな大したものでは」

「それに」

「はい？」

「……あ、いや別に。ささいな話なのでお気になさらず」

「……はあ」

「ああ、それじゃあ要件を」

「あ、はい！」

彼の声がぐっと引き締まつた。

単刀直入に申し上げます。

私はすべてをお話しします。

くればさんと、御父様のみでいらして下さるひ。

八月三日、施設の私の部屋でお会いしましょう。



## 第六章

※※※

「……ごめんさい」

「……まあいい。今後しなければいい」

さすがに、わかっていた。あんまりにも出しやばったことをしたのは。山田さんから電話のあった日の晩、正直に電話のあったことを告げた。

最初はすごい剣幕だったけれど、さすがにと思ったのか、ここ数分は落ち着いてきた。

「紅羽」

「うん」

「これは仕事なんだよ。娘だっっていっても、関係ない人が出てきちゃダメなんだ」

「じゃあなんで一回は取材に同行させたの？」

「え、あ、それは……」

「そこまでしたのに、私は全く無関係だっけ言うの？」

「あれは……」

「あれは何？遊びだったっけというの？」

「そういう訳じゃ、なくて……」

「じゃあなんだっけの！？」

「……」

「ごめん、怒りすぎた。……私も悪いことしたんだし」

「……まあ、なんだ。山田さんも受け入れて電話してくれたのは事実だからな。まあ、いいよ」

「ほんとごめん」

「いいって。正直、路頭に迷ってたのは事実だし。切り替えて、山田さんの話を聞く準備をしておいた方が良い」

「だね」

「……ほんとうは」

「え？」

「紅羽に感謝してる」

「……」

「俺さ、ああいう問題解決するの、苦手だからさ」

「昔からぶきつちよだもんね」

「はいはい、そうですよ。だからさ、よく大胆に行っただと思っよ」

「やっぱ、取材拒否って言われても、あきらめてほしくなかったっけ言うか。それに」

「ん？」

「取材拒否って、もちろん何か理由があるでしょ？」

「まあな」

「……あたしの考えだけど、山田さんさ」

「ああ」

「……もう、記憶戻ってるんじゃないかな、って」

「……それで、取材拒否することで、自分を守ろうとしたっけことか？」

「多分ね。ほら、私が取材行ったときのことだけだよ」

「ああ」

「韓国に対して興味というか、行ったことがあるって言うってたじゃん？」

「あつたな」

「あの時から、記憶が戻っていったんじゃないかな。でもどうしても、昨日あるはずだった取材で話すのがつらくなっけ、って」

「確かにありえるな。あの反応からするに、間違いなく韓国への渡航経験はあるんだ。あそこからひもとかれていった、つてもあり得ることだよな」

「……少なくとも、山田さんが思い出した記憶は、もの

すくくつらいものだったんじゃないかな」

「話すことが、あまりにもつらくなるくらいのか」

「でも、それでも、話してくれるんだよ」

「……覚悟を決めないとな」

※※

「そういう訳だったんです」

「ね？言った通りでしょ。娘さん絡んで大変なことにはなったけど、結果は良好。記事を書く土台が、いよいよ整ったっけわけ」

「編集長は、俺の娘のことを見通してたんですか？」

「ちよつと前に、一緒に行った話は黙認するって言ったでしょ？別にばれなきゃ、コンプラなんてどうとでもなるし。それに家族でしょ？仕事の二つや二つ関わることになったっけ別に問題ないわよ。少なくとも、私はそう思ってる」

「……だっけ、出しやばるかもねって話をした日の晩です。予言者じゃないですか、まるで」

「ま、だてに記者やってきたわけじゃないからねえ」

「……まあ、なんにしても、取材のメが見えてきそうってのは、正直ありがたいというか。山田さんの記憶が、まさか取り戻せるところまで行くとは、まあ多少期待していたところはあつたにしても、やっぱ目前に迫ると、変な感じっすね」

「記憶が戻った、ね」

「すべてを話す、ってことですから、間違いなく」

「んじゃあ、先に言っとくわよ」

「何をです？」

「前に言ったかもしれないけど、抑圧された記憶っての

は、大抵むごたらしいものよ。お前は其れに向き合おう覚悟をもって、彼の前に立たなきやいけないのよ」

「……は？」

「ま、この前聞いた時にや大丈夫そうだったから。一応確認までに」

「わかってます」

「うん。ならよし」

「あの」

「なに？」

「当日、娘を連れて行っても」

「もちろん。なにせ最初に誘われたのは、娘さんなんだから」

「ありがとうございます」

編集長の携帯が鳴る。

「はい。……ああお疲れ。……え、なにそれ。どつからのリーク？ ……うそでしょ。……案外追ってたのも正解だったかもね。……オッケー。んじやこのあとチェック入れる。……そう、デスクに置いておけばいいから。……じゃ」

「誰からです？」

「お前の後輩、岸谷から」

「ああ、あいつですか」

「ほら、例の物理学者の件で記事をちまちま書いてたでしょ」

「ああ。ありましたねそんな」

「その続報があつたんだけど、大きく動くみたい」

「動く、っていうと」

「……ま、一緒にチェックするか」

「はい」

いつの間にかのこりが消えていたタバコをぼいと捨て

る。編集長のデスクへ向かう。机上には、真新しいA3用紙がどんと載っていた。

「ま、目を通してみな」

「……！」

「とんでもねえ事態だね」

「これは……すごい」

「十日の記事は、確実にお前のと、これに続報加わってで、豊作間違いなしね」

※※※

カレーって、地味な色に反してなんとも言えない、心がゆずられる感じがある。そんな風に思う。明日のことを考えれば、出陣前の最後の晩餐ってことなんだろうか。

「お父さん、今日は妙に凝ったね」

「ん？うん……」

「わざわざカレー粉買ってきて、ほとんど最初から作って。お母さんでもあんまりやらないよ」

「編集長が早帰りしてくれたんだよ。でもさ、正直そういう時に限ってそわそわすんだよな」

「わかる。わたしもそんな感じだった。課題、あんま手付かなかったし」

「お互い様だね」

このカレー、普通のカレーよりも黄色に近い。素から作るとこんな感じになるんだな。

「スパイス、あんな買っちゃってよかったの」

「……今後使い方探すよ」

「たまーにさ、お父さんって変な凝り性になるよね」

「まあ、そうなのかな」

「しかも、そうなるときつて必ず次の日とかに大事なことがある日で」

「うん……」

「……緊張してる？」

「……まあな」

「だよな……」

付け合わせのサラダを黙々と食べる。あの日。私の目にうつった、涼しげな細かい目の奥に広がる、言葉にするのが難しいけれど、哀愁、っていうか、悲しそうっていうか。あの姿が妙に頭を離れない。

明日、山田さんはどんな姿であられるのだろうか。

服装は、そんなに変わらないような気がする。白シャツに、スラックスを履いて、凛々しく。けれど、一時期は心の奥に隠そうとした、そんな過去を話すのだ。

「……大丈夫かな」

「え？」

「山田さん。心の準備、できてんのかな」

「大丈夫だよ。紅羽に電話してきたってことは、覚悟を決めてきたってことだと思う。だから俺たちも、それ相應の覚悟を決めていかなきゃいけないんだよ」

「わかってる」

「……ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

「風呂、沸かしてくる」

「ありがと」

父の背中からは、いつもは見えないような緊張感と、成し遂げなければならぬという義務感を背負った、ほんの少しの震えが感じ取れた。そう言っている私も、鼓動がいやに増えている気がした。

八月三日。

首都高の混雑が、今日はいやになるほどイライラする。ステアリングを握る手が、気持ち悪いほど汗ばんでいる。ほんの少しのカーブでも、ツルツル滑りそうになる。助手席の紅羽は、下を流れる住宅街やビル、道路網を眺めたまま、身動き一つしない。

「……飲み物、飲むか？」

「ううん、いらない」

「……お父さん、トイレ行くからパーキングエリア寄るぞ」

「わかった」

彼は、いったい何を語るんだろうか。ちよろちよろと流れる、前の車を見つめながら考える。

あらためて、ここまでの事を思い出す。

ことのはじまりは、五月半ばだった。たまたま通った企画案で記憶喪失を取り扱うことになり、数日で取材可能な人を探さずとなった。その折、たまたま放映していたテレビで山田さんの件が取り扱われており、会社を通じて接触を図った。翌日には、取材しても問題ないと返答が来て、六月からは取材と連載の日々になっていた。

あの日の電話口。園長先生がつと漏らしたひとこと。

……

「赤江さん」

「はい」

「取材なさるのは、山田さん本人も問題ないとおっしゃっているのは確かなのですが」

「ええ」

「……いやその、やっぱり何かあることは覚悟のうえで

来ていただきたい、というか」

「と、いいますと？」

「こういう接触を通じて、多かれ少なかれ過去に触れることになります。それはつまり、彼を苦しめることにもつながりかねないわけです」

「……はい」

「ですので、そういうところへの理解をもって取材していただきたいのですが」

「……無論、こちらでもコンプライアンスというものを前提に動いておりますので、その点はご心配なく」

「なら、いいんですけどね……」

……

あのあと、編集長にも同じようなことを言われた。あの喫煙室。何度も記者としてのプライドと、人間としての尊厳をもった姿の狭間を、客観的に見てくれていた。上司というか、会社にいる母親のように見えなくもなかったかもしれない。

そして、そばのシートで緊張とも不安ともとれる表情を浮かべている紅羽にも、なにかと世話になった。編集会議と文章打ち込みで疲れて帰れば、夕飯がおのずとできている日も少なくなかった。妻は、長らくの海外出張で当面は帰ってこない。変わらず、料理はかわりばんこで作るだろう。けれど、この数か月の娘の料理は、妙に身体に沁みだ。

パーキングエリアが見えてきた。この渋滞で皆考えが同じらしく、相当車が停まっている。かと言って、停まらなければ自分がさすがにまずいので、すっと車線を変えてなんとか駐車した。

トイレを済ませ、胸元の直方体を取り出す。さつさと喫煙所に入り、火を点ける。人は其れなりにという感じ

だった。トラックの運転手らしきいかつい男や、電子タバコをせつせと吸う若めの人も見える。

「……ん？」

どうにもライターが点かない。カチャカチャと苦戦しても、火が点かない。ガス欠らしかった。

「あ、あの」

「え？」

「火、使います？」

「あ、すみません」

隅にいた同い年くらいの男性が、火をくれた。タバコに火が点くと、お互い軽く会釈をして正位置だった場所に戻る。

口いっぱい煙を充たす。どうにも一本ほしかつたら、ちようどよかった。この後のことを考えれば、まあ仕方ないと思う。

数回しか取材をしていないと言うのに、ここまで深みにはまっていくな仕事なんて初めてかもしれないと思った。「これから仕事ですか」

さっきの男性が話しかけてきた。いつのまにか、周りの老いも若いもないなくなり、彼と二人きりだった。

「ええまあ。取材です」

「記者さんですか。大変ですね」

「実は今日は、自分の連載の取材だもんで、どうも緊張感がすごいですか」

「はあ。僕はこの後会社戻って事務処理するんですよ」

「ちなみにお仕事は」

「エンジニアです。ほんとには東京勤めじゃないんですけど、まあ自分しか事情がわかるひとがいなくて、仕方なく出張ってかたちでここに」

「大変ですね」

「初めてですよ。お前しかわかる人間いないから来いって」

「機械とかそういうのですか」

「古い機械を使ってるお得意先があつて。それで若いの連れて研修、っていう感じのを兼ねて」

「へえ」

お互いにタバコを一吸いする。

「……すると、後輩待たせてるんじゃない」

「疲れて寝てます。エンジンは掛けてあるんで涼んでます。記者さんって言うとお連れの方は」

「ああ実は、今日は娘が一緒で」

「お仕事なのには？」

「まあもろもろ関わることがあつて」

「パパは記者、か。なかなか珍しいですね」

「言われてみると、なかなか聞かないですね」

「……あ。終わっちゃつた。それじゃ、頑張ってください」

「あ、どうも」

薄めの作業服が部屋を出る。……山田さんの素性に触れることになるのは、俺と紅羽だけと考えると、此れから向かう現場はやっぱりなかなかすごい事なのだな、と改めて感じさせられる。胃の入り口あたりがキュツとしまつた感じがした。

「おまたせ」

紅羽は穏やかな表情を浮かべて、スマホを眺めていた。目の奥にはそれなりの緊張感があるのだろうが、たぶん自分よりはよっぽど冷静さを保っている気がする。

「おかえり」

「もうすぐ施設だからな」

「わかつてるって。前も同じ道で行ったんだし」

「そっか。そりやそうだな」  
やっぱり、自分の方が焦っているんだろう。

……。

目前に、淡白な建物が見えてきた。門は閉じている。

一度、門前に車を止め、インターホンを鳴らす。

「はい」

「どうも、赤江です。山田さんの取材に」

「どうも。今行きますね」

一分ほどで、何度も話した園長先生が出てきた。ガラガラと音を立て、門扉が開く。車に戻り、施設の駐車場に駐車した。いやにバックが上手くいかなかった。

「えっと……」

取材用の持ち物を確認する。カバンには、レコーダーとメモ書き用の手帳と黒のフリクション、パーキングで買った飲み物を確認する。紅羽もカバンを確認していた。

「大丈夫？」

「うん、私は」

「オッケー」

こういうとき、どうにも萎縮して姿勢が悪くなる。猫背体質なのもあるが、怖くなると、どうにも体に力が入っているんだかいけないんだか分からなくなつて、姿勢が悪くなる。

意識的に胸を張り、玄関へと向かう。紅羽のほうだが、ぴしっとしていている気がした。

「どうも」

「わざわざお越しいただき、ありがとうございます」

「とんでもない。山田さんからの連絡ですから」

「さ、こちらに」

あの部屋へと向かう。長い廊下を抜け、水道とトイレを横目に流しつづ、扉が少しづつ見えてきた。

「山田さんなんですが、お二人以外は決して部屋に入らせないようにとのことですので、私はこのへんで」

「わかりました、ありがとうございます」

扉の向こう、そこに待つのはもうこの前までの山田浩平ではない。語るべきものを見つけ、自分達を語る相手に選んだ、「全く別の人間」である。

ノックする。

「はい」

「……赤江です。取材の件で」

「どうぞ」

ガチャリ、と戸を開ける。そこには、低いテーブルの向こうにて正座する、一人の男がいた。

「……お待ちしておりました。紅羽さんも」

「あ、はい……」

さすがの紅羽も名指しされると、声が裏返り、びくりと身体を震わせた。

「お座りください」

「失礼します……」

この先に、何が待っているのか。彼は、何を語るのか。

いや、彼は何者なのか。

手早く取材の準備を済ませ、話し始める。

「山田浩平さん」

「……はい」

「今日は、すべてをお話しいただけるんですね」

「ええ。まず私は、山田浩平ではありません」

私は、  
一之瀬勝（イチノセマサル）。

一月四日から五日。第二十師団の隊列。

私の送り込まれたニューギニア戦線(注一)の恐怖といふのは、あまりにも永く続いた事であった。私が覚へているあの年、昭和十九年の一月は正に日々の恐怖と、脱落といった地獄の様相であった。

臆気であるが、確かニューギニアの戦いが始まった頃には、先ずはラバウルを取り(注二・三)、その後は進め進めの思考だった(注四)と思う。

その後もニューギニアの南側迄足を延ばして大転けたのに(注五)、意地でもあの国はこの場所を守ろうとした。挙句の果て、ミツドウエーの現実には誰にも告げられず、私達には緘口令まで敷かれる程である。

熱帯。異常な湿気。何処までも続く緑。この様な状況に置かれていなければ、目に鮮やかな視界を楽しむことも然して問題ではないのだから、私の携帯品を見れば、どうにもそのやうなことが不可能である事は言うまでもなひ。

曲がりなりにも幾数人を携えている私の腰には、菊印の刀と九四式拳銃(注六)が垂れ下がつてゐる。だが私には、最早や士気高揚などといふ士官の勤めを果たす事の出来る気力は、皆無である。

と言ふよりも、誰にもそのやうな事をできる余裕など無かつた。さう、我々は今、撤退の最中である。

ウエワク(注七)からの二七(注八)が運んだ物資も、なけなしと言へばさうではあるが、未だ健在である。復た新しひ彼等の持つて来る物資を拝みたい。

……此の処の十数日を考えると、矢張り絶望的な現実を突き付けられる。安達中将は第十八軍をなんとかマダ

ンまで逃がすとの判断を下して(注十・十一)、そして私たちはかうして鬱蒼とした緑の中を歩いてゐる。

今、何処なのか。海岸通りを通つてから久しいが、少なくとも小休止が入るであらう時間は経過してゐた。

案の定、其の令が下つた。自分の部下にも伝達する。

……何をす可きか。唯だ前に進む。目指すは司令部、マダンの地。だが取り敢えずはガリと呼ばれる処まで。否、其の前に川を渡つてシオまで。大丈夫だ。言い聞かせるしかない。

「一之瀬」

呼び立てられる。凜凜しく表情を硬くした上官だった。

「なんで御座ひませうか」

「少し伝えるべき事がある。此方へ」

「は」

小休止の場から数歩離れる。

それはマダンまでの道程における大問題であった。元

日の後直ぐ、グンビに現れた亜米利加と濠太刺利(注十

オーストラリア

二)はあつといふ間に其処を奪取してゐたのだ。

「つまりは、海岸線を其の俣行けば問題無ひという訳で

はなくなつたのですか」

「ああ。一度正式に伝えねばならないから、先程から一

部士官に伝達している。部下には黙つておけ」

「あの」

「何だ」

「その手前迄については」

「シオについては奮闘しているとの事だ(注十二)」

「さうですか」

「では」

敬礼の後、また隊列の後ろへと向かつて行つた。自分も

元の休止位置へと戻る。

「……士官殿」

「どうした」

「先程の御話は何だったのでせうか」

「気にするな。形式程度の伝令だ」

……幾度となく此の言葉を口にしただらう。私に伝えられる現実も、彼等には不条理極まりなひのだ。伝えるな、というのが命令であれば絶対である。

まう間も無く出発だ。拳銃と刀を目視点検する。拳銃囊から九四式を出す。八発。

前列が動き出した。それでは、また行軍だ。

三三三。

時時、後列の部下の顔を見遣る。一人は何ともなささうではあるものの、その後ろにいる彼は、間違ひなく症状が悪化している。栄養失調の其れだらうか。

真面な食事まともと言へば、一日おきである。それで行軍距離が其れ相応にあるのだ。一般人には耐えられまい。

……本土のことを思い返す。故郷の家にいる母親と父親。父も若しや「呼ばれ」たのだからか。それ相応に暮らしをして、時に戻ることもあつた。田畑に囲まれ、食

事に困る可能性は都市部よりはまだ良ひものだと願ひたい。

自分は何故此処に所属しているのか。兵役法(注十四)

で徴兵されることは目に見えていて、出稼ぎの一年程を

過あして見たものの、やはり軍人になることが安定性に

長けるとは思つてゐた。

正直、戦争は嫌いだつた。傍から見れば矛盾した思想

を突き付けられる。安達中将は第十八軍をなんとかマダ

ンまで逃がすとの判断を下して(注十・十一)、そして私たちは

今、何処なのか。海岸通りを通つてから久しいが、少

なくとも小休止が入るであらう時間は経過してゐた。

と行動であるのかもしれない。だが、所帯や世間体を考えれば、どうしても軍人になる方が正しいと思つてしまつた。

私が連隊に所属した後は、生憎其れ相応の適性があつたらしく、陸軍士官学校への入校を勧められた。結局戦局の拡大で、愈々実地だと呼ばれた先がこの第十八軍であつたのである。まさか外地、それも南方戦線で構築されたばかりの此処まで来ることにならうとは。

「一之瀬士官！」

意識が深緑に戻される。後方の部下からだつた。

「どうした？」

「今村が……」

彼の姿を探すと道端に突つ伏し、微動だにしなかつた。

沈黙。

「栄養失調でせうか」

「私が見ておく。御前達も少し待て」

「は」

部下たちが一時隊列を外れる。

「本田、医療兵を」

「は」

仰向けにさせる。唇が青黒くなり、表情は微かにも動かない。脈は僅かながら残つてゐる。

隊列後方から数人が来る。逆方向からは上官が向かつてくる。

「上官殿」

「状況は」

「栄養失調かと。数日前から挙動が怪しい処がありましたので」

「ふむ」

「安達中将の方針(注十五)がありますので、運搬を」

「……ああ。任せた」

訝し気に見たあの一瞬。本當なら置いて行くことも厭わむとする気だあつたのだらうか。あの男のやることなら、其れでも肯くことが出来る。

医療兵に運ばれて行つた彼も復た、元々は農村の出、確か山形だが何処かであつた。……厭になる程、故郷を思ひ起こさせられる。其の中でも、行軍は続く。深緑の更に奥深くへ。

一月六日。三九三。

「一之瀬」

復た上官の声である。

「は、只今」

此の前と同じく、少し離れた場所での報告だらう。

「何か」

「畑中が死んだ」

「……さうですか。栄養不足でしたか」

「症状から見て間違ひなひさうだ」

「さうですか」

「あと一つ」

「は」

「シオで再び交戦が在つた。だが跳ね反したとの事だ」

「豪軍ですか」

「ああ。此の前は揚陸艇だけだつたが、戦車が来たとの事だ」

「型は」

「其処迄の報告は受けていないが。海岸線であらうから、軽戦車ではなからうか。複数車輛で来た事は判つている」

M3(注十六)か。風の噂で、昔資料に載つていた伊太

利亜の戦車が見えたとも言われているが(注十七)。

「……復た、襲撃される可能性が有りますね」

「あゝ。取り敢えず我々が到着するまで堪えてもらわな

いとな」

「さうですね」

「報告は以上だ。其方は」

「特段変わりは在りません」

「了解した。では」

……変わらなひと云つても、空腹感と倦怠感等の症状は抜けきらないだらう。今日はまだ真面目な食事を渡された訳であるが、それでも満ち足りた感覚に迄は至らない。栽培した穀物を何とか遣り繰りして作られた飯に、何を贅沢と言えるか。

懐に手を伸ばす。封筒の中身を探り、読む事にした。

一之瀬 勝様

如何お過ごしでせうか。此方の暮らしは未だ回復の最中でありませう。先日の空襲で、二軒先が一昼夜で消えてしまいました。このやうな現状を記せば、何処かの機関に引つ掛かる可能性が在りますが、正直な話をしやうと言つた何時かの約束を破る(こと)になりますので。

南太平洋の環境は如何ですか。非常に暑いのでせう。貴方はひどい暑がりですから、確りと汗を拭き取り、水をちやんと飲むやうに。

それでは。

或

「……良子」

本土に残してきた妻のことが頭をよぎる。もう幾度となくかうしてきたが、手紙を見返す度に募る思ひは増す

ばかりである。

……

良子との出会いを語るのにはそう容易くない。抑々、僕が故郷を出てから暫くの話をするようになる。

僕は信濃の出だ。母も父もの畑作で巧いこと生きてきた人だつた。幼い頃から、勉強の傍ら畑を耕し、種を植え、定期的に除草し、収穫するという一年の流れを共に過ごした。畑地が在つて、周りの家々に仲間が居て、学校に通い、そして私は子供時代を過ごしていった。

其の中でも、戦争の二文字は常に新聞等に存在する事実だつた。私は昔から、血を見ると卒倒してしまう程の人間だつた。自分が転んで膝を擦り剥いた時、友人が彫刻刀で手を切つた時、母親が裁縫針で手を刺した時。其の一滴の血だけでも、私の頭が揺らぐには十分だつた。

血を見る事が此処迄苦手だと云ふのに、なぜ陸軍付きになつてしまつたのだろうか、と思うのは誰しもであらう。至極簡単な答えである。安定性である。

良子との出会いについて、多少話すべき処迄来たと思ふ。私は陸軍に入る前、故郷を出て都市部に出稼ぎをしてゐた。昔の丁稚奉公のやうな事や、店先を借りて少し露天商のやうな事をした。本来なら家の農作を手伝いつつ、数年して同じ土地を耕すようになれば別に不安な所はなひはずである。然し、私個人が学校を出る少し前から様々な事をしてみたひ、と思うようになった故にかういう道を取つた次第である。とは言つても数年で戻つつもりで居たので、其処迄両親に反対されることはなかつた。

出稼ぎから半年程の事である。店先に現れた彼女は、幾度となく私が入つていた店に通い、私とお互いの事情を話す程になつていた。

「一之瀬さん」

「え」

「今度、お暇なときは在りますでせうか」

会ひ始めて数週間であつた。カフェーで翌日逢うことになり、お互いの子細を話すことになつた。

「一之瀬さんは信濃の出なのですね」

「え、まあ。貴方の方は」

「良子で構いませんよ」

「あ、だうも」

数時間程の話で、彼女の生まれが件の都市某所である事、見合い婚の話も幾度と来たものの、両親は珍しく特段急かす事も無ひこと、ただ流石に所帯を持つて然るべきだと思ひ始めてゐることなどをちらほらと喋つた。

「私もまあ、両親にそろそろ所帯持ちになつたと伝えられるやうにしたいもので」

「……それぢやあ」

「はい？」

「私達、丁度良ひのぢやないでせうか」

かうして、まう数度逢つてお互いに話を付けた後に籍を入れることになつた。急転直下だと言われれば確かであるが、此れ位割り切れた関係で少しづつお互いを知つていくというのも、世帯の持ち方作り方として悪くも無い気がした。

半月程で数度逢ひ、其の間に御互い両親へ此の件を伝えた。良子の親も、私の親も、遂に良い人に巡り合えた、と喜んだ。一ヶ月の後には、両親の顔合わせにまで至つた。私の親は都市に出る事久しく、気分晴晴に良子の家へと向かつた。かういう時、本来は夫となる私の家に来る方が自然であつたが、私の両親曰くか様な田舎にまで来させるのが憚られると云ふことで、結局良子の家を訪

ねる事で落ち着ひた。

都心に居を構えるところであつて、家の構えは木造二階建ての荘厳な物であつた。

「どうぞ此方へ」

女中が奥の部屋へと迎へ入れる。おずおずと中へ向かうと、にこやかな御両親と、和服に身を包んだ彼女が居た。

事は案外早く進み、両親御互いに打ち解けるのも早かつた。母親は裁縫の巧い事で話が合い、父親は金鵒(注十八)の味が、安割には他のどの銘柄よりも良ひといふ事で煙草談議に花を咲かせた。

私も良子と時世の話をしていた。

「勝さんは、戦争に関してだう思ひますの」

「まあ何でせう、そりやあ此の国は奮闘できると思ひます。けれども無闇矢鱈に前線を拓げるのはだうも怖いですな」

本當なら斯様な事を言ふべきではなひとは思つた。だが腹を割つて話すことも一つ大事なことであると思ひ、正直に打ち明けた。

「お、勝君はなかなか戦局を見ておるやうだね。しかし此の国だ。勝つさ」

良子の父親が一言加えた。思ふだけなら、だうとも言えますからね、と言ひかけて飲み込んだ。

此の日だけで、婚姻の日取り迄決まり、親族一同を集めるのは中難しいであらうから、我々だけで密やかに儀を行うことにした。

その後、私は突如として陸軍入りに至る。理由として、徴兵があまりに面倒だと思つたこと、徴兵検査で格付けされる位なら先に進んで行つた方がまだ良ひと思つたこと、そして所帯を持つ事になり、ある程度収入が安定す



る職業で、自分が出来さうだと思つたのが軍隊入りであつたからである。要するに自分や良子の為である。

陸軍学校の思ひ出で語ることは無い。唯だ淡淡と目前の科目や実践を飲み込み、其れ等に基づいて頭と身体を存分に動かしていけば自ずと結果が生まれた。

愈愈一定の科目と成績を修めた私は、早速配属が決まつた。さう、それが此の部隊である。南方戦線の要とされ、名将安達中将の下で発足した、第十八軍である。

本土に居た私であつたが、満洲の人員では部隊構築には不十分とされ、私達が招聘されたのである。

私は、所謂下士官であつた。少数の部下を携え、下達の効率化を図り、時に戦鬪ともなれば、彼等を鼓舞して動かす存在である。

あの日。此の戦線へと向かう前日。

「勝さん。死なないで」

其れだけが頭から離れなかつた。戦局を鑑みるに、確かに今は優勢ではある。だが本土からかけ離れた南方。何れの日には崩れるかもしれなひ。それでも、命令は命令である。死線の覚悟を、行く前から既に背負わなければならなかつた。家族親族は出征を祝うことしか出来ていながつた。故に、良子の言葉が身に沁みだした。

……

手紙に目が戻る。宛名が「或」となつて居るのは、涼子は僕の事を「勝さん」、そして僕が彼女のローマ字表記から「R」と呼んでいた事から来ている。さすがに検閲を免れ得ない戦地への手紙では、置き換えて「或」として居るのだ。数少ない反国的活動である。

手紙を再び胸元に戻し、今の大休止を噛み締める。シオは、目前に迫つて居た。

一月七日。三九八。

目前にシオが迫る。今の処、襲撃は受けていない。後方から連合軍は迫つて来ているはずであるが、その様子は見受けられない。

別の組の部下が一人死んだ。マラリアだつた。行軍中に持つことの出来る医療品では限界がある。

空腹で頭が回らない。いよいよ私にも魔の手が迫つてきている。大休止で読んだ手紙、良子の願いを胸に、足をひたすらに動かし続けた。

井上の様子も怪しい。何処かから病気を貰つてしまつたのか。

#### 四〇二の後

シオ手前の収容陣地があつた。戦鬪が始まつた。連合軍は昨日以上の戦力を割いて、我々を打ちのめすつもりだつた。

我々の部隊も戦鬪に加わる。三八式(注十九)の銃声と、相手側の重機関銃の怒号が鳴り響き、時折戦車砲の爆音と陣地近くへの着弾があつた。

「一之瀬さん！指示を！」

「此処から下がると一気に総崩れだ！此の陣地を何が何でも守り抜け！後続が収容し終わる迄の辛抱だ！」

自分も無闇矢鱈なに九四式を撃ち放つ。空を切る音と共に数歩左の兵士が寝転がる。頭を撃ち抜かれ、赤褐色の液体を延々と孔から出してゐた。

弾薬が尽きる事に為つてでも、何とか生き延びなければならなひ。陣地の先を一瞥すると、大量の兵士と戦車が待ち構えている。

壕を縫い、上官の所へと向かう。

「収容までにどれ程掛かりますか」

「一日は掛かる。我々は前方であつたから、仕方なひ」

後列は、この猛烈な戦火を潜り抜けて来ることになる。傷病兵も自ずと増えるであらう。

「一之瀬さん！」

「どうした！」

「井上が撃たれました！」

部下の方へ向かう。一人、やや後方に大量出血で喘ぐ姿が認められた。

「衛生兵の所へ向かわせる」

「は！」

二人が視界から消える。重擲弾筒(注二十)も他の部隊が逐次発射しており、何としてでも連合軍の猛威を止めんとする、鬼気迫る音にも聞こえた。

「間もなく九二式(注二十一)も設置が終わります！堪えて下さい！」

何処かからそのやうな怒号が飛んだ。大きな三脚架が運び込まれ、保弾板も既に幾つか数えられぬ程迄運び込まれて来た。

「軽機い！(注二十二)」

……さうだ、井上は撃たれたのだつた。替わる奴も居ない。動く儘に、銃座へとにじり寄る。弾数が未だ在ることを確認し、引鉄に指を掛ける。白肌で、同じような色合ひの服を着た男達が迫る。……あれは、人間だ。さうだ、人間だ。

だが、殺される。

シナナイデ。

さうだ。私は、殺さねばならぬ。死にたくなければ。

……四〇三が過ぎい。

結局、私の部隊は辛うじて形を保つてゐる程度に爲つた。此の戦闘で復た大量の弾薬を使い、ガリまでたどり着くには戦闘を極力避けなければならなくなつた。

一月九日時点で、二三八連隊の行方、我々二十師団の収容は既に終了してゐた。とりあえず壊滅は免れ、最低限の兵器と兵力を保持したまま、我々はガリ転進と呼ばれる此の作戦を愈々遂行することとなる。既に二三八連隊はゲルマン河河畔(注二二三)を棄てており、我々と同じ道程でガリへと向かふ。

あの戦闘の後、二十師団はガリとシオの間にあるキアリと呼ばれる地点に到達した。だが私の居る歩兵小隊は、収容陣地での激戦により、一時的に後れを取ることになつた。

既に先行する奴等が確認した道を進る。

「一之瀬さん……」

「何だ」

「井上も、畑中も死んで、大分人が減りましたね」

「あゝ。だが進まねばならんのだ」

「分つています。けど正直」

「怖いか」

「……いつ、何時に襲われるかも判らなひ此の状況が恐ろしくて」

沈黙せざるを得ない。既にこの分隊も疲弊し、人員も限りなく最低限に近ひ。補給が何時になつたら来るかも、皆目見当がつかない。

「……井村」

「は」

「家族は」

「生きていれば、信濃に居るか」と

「信濃か。私の故郷だ」

「さうなのですか」

「あゝ。全く、偶然と云ふのもあるものだな」

「えゝ。御兄弟は」

「居ない。妻は名古屋だ」

「御帰りになられたら、故郷へ戻るのですか」

「あゝ。妻の家にもさう言つてある」

「良ひですな。私の方は疎開で信濃に向かふとのことでした」

「まあ時世故に、だな。元の家は」

「相模です。港の見える場所で」

「ほう」

「見ます？写真」

「在るのか」

「此処に来る二月前に撮つた物です」

胸元に在つた写真を見る。彼と、妻と、二人の娘らしき子供たちが居た。

「娘二人か」

「さうです。ハツコとチエと申しまして」

「もしかして、初めての子どもでハツコかひ」

「えゝ。其れで頭の良ひ子になるのを願つてチエ、と」

「女子だと先生とかかな」

「さふですな。斯様な戦争が終わり、学校が穏やかになれば良ひですな」

戦争の果てに、私達は何を見るのだらうか。希望を胸に、人は幸せに在るのだらうか。

そして。

四〇四。

「小休止！」

私が号令を掛け、僅かな休みを囁み締める部下達。

「下士官殿！」

「何だ」

「サゴヤシが在るやうです。今後の為、多少採取した方が宜しいかと」

「解つた。では井村と私、あと清原で向かう。其の間は皆場所を離れぬよう」

「はい！」

サゴヤシ。安達中将の指揮下では、此の採取により澱粉を確保し、逐次各員で活用するよう言われてひる。

此の先で海岸線を離れ、暫く山間を歩くと知つてゐる身分からして、適切であると判断した。

休止地点からやや奥まつた所に、サゴヤシが数本生えていた。

「私が警戒しておりますので、下士官殿と井村で採取を御願ひします」

「うむ」

しかしその刹那、先程迄聞こえなかつた何かを掻き分ける音がした。

「下士官殿！」

声を押し殺した井村が此方に顔を向けていた。無意識に拳銃を引き抜き、しやがみこんでいた。

「気を付ける……」

原住民か？いや、それなら声や人を呼ぶ声があるはず。気配も感じ取れず、唯だ恐怖心が掻き立てられる。

遠方で清原が警戒しているが、様子に変わりはない。なんとか採取をしやうと、匍匐でサゴヤシに近づく。

「井村、私が採取するから廻りを見ておひてくれ」

「……了解です」

サゴヤシに懸命に近づき、様子を見て立ち上がる。実が落ちており、それを抱え、私は再び井村の方へと向かう。

「実は？」

「此処に在る」

「では即座に戻りませう」

「うむ」

しやがんだ姿勢に戻り、迅速に清原の地点に戻る。

「採集は」

「成功だ。戻るぞ」

一気に立ち上がり、本隊へ戻る。生きねば。帰らねば。指揮をせねば。ガリへ向かい、辛抱せねば。

足が空を裂いた。姿勢が一気に崩れ、身体全体が打ち付けられる。

「下士官殿！」

一瞬間こえた其の声が恐ろしい程遠のいていく。あゝ、窪地に足を取られたらしかつた。ころころと身体が回る。何処迄も、落ちる。止められなひ。パキリと枝の折れる音や、ガサガサと枝葉を擦る音だけが聴覚を支配する。

唯だ一つだけ、視覚的情報は遺つてゐる。白く、ただ白が広がる世界を、泳ぐ。夢を見ただけかもしれない。だが、この事実とも幻想とも取れない情報が、此処から話す記憶の空白を、埋めているのである。

其処から、私の覚えていることは、無い。

……目を覚ますと、再び深緑に包まれていることが判つた。サゴヤシが手元に無く、辺りを探るが、球体は何処にも無かつた。其れ処か、軍刀も、拳銃も何処にも無かつた。若しや、あの落下した後に捕まつたのか。

だが、見渡せど誰も居なかつた。手元を見遣ると、軍服が無ひ。下着に普段の靴のやうな感じであつた。

「……皆」

見渡せど見渡せど、唯だ深緑が拡がるばかりである。

「……ん？」

おかしい事である。周りの木木が、全く違う。本土に在つたや樹木ばかりである。

「……隊を探さねば」

左様なことはだうでも良ひ。兎に角、隊を探さねば。

……だが、隊はおろか、地形すらも違う様であつた。

「……何処だ」

歩き始めた。彼等の下に帰らねば。待つてゐるんだ。

私が指揮を伝達し、ガリに行かねばならなひ。否、良子や家族の居る本土へ帰らねばならなひのだ！

山間らしき土地を歩き、歩き、歩き果てては座り込み、復た歩き、そして、小屋に辿り着ひた。

信じられなかつた。日本語の紙資料が幾方と置いて在るではなひか。

「……何故だ」

更に信じられなかつたのは、「多摩」と書かれた其の内容であつた。……何時の間にか、本土へ？何故？だうやつて？

幻を見てゐる。落ちた衝撃でとんでもない夢を見てゐる。歩けばいずれは部隊に戻る事が出来やう。

再び歩く。気候はと云へば、暑さが大分落ち着いてはいるものの、其れ相応に暑い。湿気は幾分か良ひのだが、

歩き続けると、汗が止まなひ。

幾時間、否幾日経つた頃、開けた土地に出た。まるで未来の都市であつた。とてつもない大きさの建物と、大量の乗用車、それも形がまるで近未来どころか遙か未来のやふな車がとてつもない速度で走り、見たことも無い商店が立ち並ぶ、そんな「都市」。

私は、別の世界に來た。  
さう、思う他、術がなかつた。

「……そこからは、私が保護されるまでの記録にあった通りです。山中から出て、街をさまよい歩き、水分も栄養も極限まですり減らして、なんとか都心までたどり着いたわけです」

「……やま、いや一之瀬さん」

「なんででしょう」

「その、自分がいた部隊のことは、もうお調べになりましたか」

「いいえ。でも、正直知るべきかどうかかわらないんです」

紅羽がとっさにスマホを取り出し、調べ始めた。

「……あんな極限状態で、果たしてガリにたどり着けたのか。私がない状態で、結局指揮はどうなったのか。でも、その間にもおそろくひとり、またひとりといなくなつていったんだと思っています」

「あ、あの」

「なにか」

「その、一応一之瀬さんがおっしゃっていたニューギニア戦の話なんですけど。その、どこからお話しして行けばいいのか、というか、一之瀬さんは、日本は戦争に負けたという点を「存知ですか」

「……はい。少し前に」

「……では、ニューギニアがその後どうなったかまでは知らないということですね」

「ええ。私がいたのはガリ転進の最中が最後ですから」

「……正直に言って、聞くに堪えない部分も相当あるかと思えます」

「……つまり、それほどの惨状だったということですか」

「……ええ」

「それでも、私は聞くべきだと思います。行軍を共にし

た部下達や上官の顔も浮かびます」

「……まず、ガリ転進はなんとか成功して、マダンに到着はできました」

「そうでしたか」

「けど、もうその時点で連合軍の勢いには拍車がかかっていて、アドミラルティ諸島やエミラウ島も上陸されました」

紅羽がスマホをチラチラと見ながら、だがその目を一ノ瀬勝に可能な限り離さないように、話を続けた。

「マダンにいた日本軍はラバウルも奪われて、一之瀬さんも言っていたウエワクにまで撤収しています。これが十九年の上半期までの流れです」

「……なし崩し、ということですか。まあ、食料も弾薬も乏しかったのは事実ですし、少し動くだけでもどれだけの物資を用いなければいけないかを考えれば、致し方ないとも言えますね」

「十九年の下半期も、やはり連合軍が島単位を着実に奪還していきます。その中で、七月から八月に第十八軍の最後の攻勢として、アイタペの戦いが起こっています」

「安達中将も意地を張った、ということですか」

「物資弾薬が枯渇した中でも奮闘したようです。ですが結局作戦は失敗し、撤退を余儀なくされたそうです」

「やはり一矢報いなければ、ということでしょうね」

「その後、玉砕がほとんどないまま、投降や捕虜となるものが続きます。自活も限界が来ていて、食べられるものを何でも食べ、そのせいで死んだ人も大勢いたらしいです。ひどいものだど、友軍内での共食いもあったそうです」

よくよくみると、一之瀬は膝頭をぐつと握りしめ、下を向いたまま、何度も何度も鼻をすすっていた。

「……続けてください」

「そして昭和二十年の終戦となります。約一万人が武装解除時にいたそうです。ウエワク沖合のムッシュ島で本土帰還を待ち、一部を除いて帰還できたとのことです。これがニューギニア戦の道のり、って感じですよ」

「……わたしの部下達は、どうだったんでしょうね」

「そこまでの詳細になると、もう少し正式な文書や研究論文などにあたらないといけませんけど」

赤江良平が答える。

「もしお時間をいただけるようでしたら、調べてみますが」

「いいんです。彼らの行く末を知ったとしても、ただ空しいだけです」

「ですけど、もしご存命の方がいたら、会うべきなのではないかと思えます」

「赤江さん、ご心配ありがとうございます。けど常識というものを考えてみてください。約七十数年も前にいた私が容形、年齢も変わらないまま二〇二〇年にたどり着いた。こんなことがあり得ると思いますか。たしかに私は現にここにいます。けれども、一般常識を考えれば、このような事態は普通じゃない！そんな話を信じてくれる人々が大勢いると思えますか！？」

「それは……」

「すみません、言い過ぎてしまいました。これで私の思い出したことはすべてです。どうか、時間をかけていただいても構いません。けれど、私のこの記憶を、どうか信じてほしいのです」

「……はい」

「……今日はありがとうございました。また今度、なにかありましたら連絡ください」

「……わかりました。それでは。失礼ですか用を足して  
きます」

「ええ、どうぞ」

赤江良平が部屋をいったん出る。

「……なんで」

「え？」

「なんで私を介したんですか」

「というとう？」

「いや、こういうすべてを話すという件だったら、正直  
にお父さんに喋ってくれても良かったんじゃないかと思  
つて」

「……似てるから」

「はい？」

「良子に、ものすごく紅羽さんが似ているから」

「そ、そうなんですか……？」

「ええ。特に横顔。目鼻立ちもそのまま書き写しみたい  
で。だからかな」

「……あ、あの」

「なにか？」

「せめて、良子さんのことだけでも調べてみませんか。

わたし、可能な限りやってみたいんです」

「……りよ、紅羽さんに言われては、そうした方が良い  
のかもしれないね」

「あの、良子さんが最後に住んでいた住所とかってわか  
りますか」

「うん。手紙のやり取りがあったから、少なくとも町名  
まではわかるよ」

「あの、ここにメモしておいてくれませんか」

勢いよくメモ用紙とペンを渡す。一之瀬は、そそくさ  
と覚えている住所をサラサラと書き留めた。

「これ」

「ありがとうございます！あの、絶対に調べ尽しますか  
らー！」

「……そういうところかな」

「え？」

「そそっかしいところ、人のためならなんでもしたがる  
ところ。時々良子が重なるよ」

「そ、そうなんですね……」

なんともこそばゆいような、そんな感じを見せる紅羽。

「紅羽さん」

「はい！」

「……ありがとうございます」

細面の一之瀬の相貌が、一瞬だけ崩れる。青年の、美  
しい時代の顔。コバルトブルーの透き通った青さ。紅羽  
は、こくりと頷いた。

ドアが開く。

「お待たせしました。紅羽、行くぞ」

「ほんとうに、今日は聞いて下さりありがとうございます  
でした」

「とんでもない。私も、連載の責任者として、書き上げ  
ます。たとえ何言われても、一之瀬さんも、その記憶も、  
僕は間違いないかと思つて、信じてますから」

「……ありがとうございます」

「それじゃあ、失礼します。行くぞ」

「うん」

部屋を出て、玄関へと向かう親子。途中、紅羽が立ち  
止まり、ほんの少し手を振る。

一ノ瀬は、目元に迫る感覚をこらえながら、わずかに  
手を振り返した。和服に身を包んだ、いつの日か見た妻  
の姿を重ねながら。

※※

「だから、出せるわけじゃないでしょ」

「でも彼が語っていたことはこの通りで、嘘をついてい  
るとは到底思えません」

「仮にそうだとすると、タイムリープなんていうのを真面  
目に記事に書いてみ？馬鹿言うんじゃない、つて苦情殺  
到よ？」

「そりゃあ、そうかもしれないけど……」

編集室の押し引き問答は、かれこれ一時間弱続いてい  
た。記憶を取り戻した男の正体は、七十と数年前、地獄  
の南方戦線を指揮した男のひとり、なにかのはずみで  
現代に来てしまったのだった。こんなファンタジーのご  
とき内容を、それなりに注目が集まってきた連載の締め  
くくりに出すというものだから、致し方ないのもうなず  
ける。

「じゃあ彼が克明にニューギニア戦の記憶を持っている  
ことはどう説明をつけるって言うんですか」

「そういう研究をしていた人が、過去の自分の記憶と混  
同している可能性つてもあるんじゃない？」

「じゃあ、記録に残っていないような前線の兵士たちの  
名前まで話していることは？」

「自分の記憶にある、同僚とか部下の名前をあてはめて  
いるのかも」

「じゃあ編集長は、山田、いや一之瀬勝は研究と記憶を  
ごっちゃにした哀れな戦史研究家だとしても？」

「そりゃそうでしょ！？タイムリープ、タイムトラベル  
なんてありえるわけじゃないでしょ！？」

押し黙るしかなかった。冷静になれば、至極当然の反

応である。

「……お忙しいところ、申し訳ありません……」  
後輩だった。

「例のジョン・カーターに関する記事なんですけど、急転直下の事態でして、ちよっとお話ししようかと」

「どういうこと？」

「まあ編集長、これ見てほしいんですけど……」

火を点けないで、啞えタバコをする編集長。勢いよく記事のリソースを読む。しばらくして、考え込みはじめる。

「……赤江」

「はい」

「これ、どう思う？」

後輩の持ってきた資料に目を通す。これは……まさか。

「……編集長」

「一之瀬さんの話、バカにできないかも」

「……これなら合点がいくかもしれません」

「……よし、今回のメイン、赤江とお前の記事だ」

「わかりました！」

「おまえはすぐにでも記事を練り上げて、草案が出来たらすぐ持って来い」

「はい！」

「赤江、もう少し話を続けようか。場所を移して」

「……はい」

そそくさと、俺の草案を持ちながら、編集長は喫煙室へと向かった。その後を後れを取るまいとついていく。

マールボロとメビウスに、それぞれ火が灯る。

「……神様の偶然かね」

「……なんか、常識が覆る瞬間に出くわした気がします」  
「うーん……。優秀な部下が、偶然私の手に二人も転

がり込んできたわね」

「……単なる偶然ですって、俺はどこまで行っても平々凡々の三流記者ですから」

「……あたしも、この界限はそれなりにまわってきたけど、こんなトンデモ記事、それも信頼性のある程度置けるトンデモ記事、出くわしたの初だわ」

「二つでひとつ、って感じですね」

「うーん……。ま、神の思召し、ってとこかな。……んじや、明日明後日までにちやっちゃと作り上げて、わたしのところまで」

「はい」

「……常識なんて、あっちゅう間に崩れるものね」

※※※

名古屋。その地名は何度も目にしたことがあるけれど、ここまで重いものを背負っていると感じたのは初めてだった。

あのメモにあった地名。そう、一之瀬勝にとって、妻がまだ生きている土地。

「……と、とりあえず市役所に行ってみましょうか」

「ええ」

声を掛けてみるものだな、と思っていた。夏休みの合間をぬって、一か八か一緒に行きませんかと連絡した。答えはすぐ返ってきた。

「あの、一応実印とペンはい」  
「もちろん。ここに」

胸元に一式揃っていた。

「……ほんとうに、大丈夫なんですか」  
「何がですか？ちゃんと園長にも伝えてありますし、お父

さんにも正直に、今回は話したんでしよう？」

「いやそういうわけじゃなくて。その、なんていうか、その……」

「ええ？」

「一之瀬さんの奥さんに会える保証もないし、もう何十年も経ってますから、記録資料すら怪しいところがあると思ってる」

「別にいいんです。けど、ケリはつけないと」

「そう、ですか……」

白いシャツに黒のパンツ。汗がわずかにしたたる、浅黒い肌。一ノ瀬勝は、たしかにここにいる。

「じゃ、じゃあ、市役所に行ってみましょう」

「ええ」

下調べしておいた道のりで、市役所へと向かう。道中も、そわそわするわけでもなく、かといって無表情というわけでもない、えも言われぬ表情のままである。あなたの方が、いやに緊張している気がした。

市役所は、平日とはいえかなり込み合っていた。受付に、戸籍に関する調査をしたいと伝えると、行くべき窓口を教えてくれた。印刷機から垂れ下がる番号札をとり、呼ばれるのを待っていた。

「な、なんか変に緊張しません？こういうところって」

「そうですね。多少、緊張する感じがあります」

そう口では言っているものの、一之瀬さんはバスの中と同じような表情を崩さないでいた。彼なりの覚悟のある感じなのだろう。

自分たちの番号が呼ばれ、窓口へと向かう。

「用件は？」

三十代くらいの、やや若めの女性が応対してくれた。さすがに七十数年前に生きていた人がタイムスリップし

てきた、なんて言えなかったから、親戚を辿っていると  
言つて事情を話した。

「戦前の記録となりますと、少々お時間をいただきます  
が……」

「構いません。とにかく、この住所にいた一之瀬良子さ  
んという方の消息を知りたいんです」

「わかりました。とりあえず、あらためてお呼びします  
ので、戻つてお持ちください。あの、一応お名前を」

「一ノ瀬勝 です」

彼は、あたしが一言も発する間もなくその名を口にし  
た。

数十分どころか、数時間待った気がする。飲み物も数  
本目になり、座つていた座椅子も、そろそろその固さに  
腰が痛くなってきていた。

「一之瀬様、いらつしやいますか」

さつき受け付けてくれた女性が呼んでいた。さつきそく  
そちらへと向かう。

「あ、あの、少し調べてみましたので、別室でお話し  
しましょうか」

階を上がり、やや大きい会議室のような部屋に入る。女  
性の手元には、数枚の紙資料があった。

「……つかぬ事を伺いますが、ほんとうに一之瀬良子さ  
んの親戚さま、でしょうか」

「と、いいいますと……?」

「いえ、一之瀬良子さん、一度結婚されてはいるので  
すが、旦那様は戦争中にお亡くなりになっていて、以降  
結婚しておらず、こう言つてはあれなのですが、血縁関  
係はさほどなかったようなので……」

「……信じて、もらえないかもしれないのですが」

「はい?」

「私は、その一ノ瀬勝 戦争で亡くなった良子の夫、な  
んです」

「……え?」

「あの!信じてあげてください!うそ発見器にかけても  
らつても構いません!でも本当なんです!この人は奥さ  
んの良子さんの消息が知りたくて、今日ここに来たんで  
す!」

つい込み上げてくるものが抑えきれず、まくしたてる  
ように言つてしまった。

「……というと、生まれ変わり、というか、タイムスリ  
ップというか、そういうことですか?」

「具体的にはわからないんです。けど、彼が一ノ瀬勝だ  
つていうのは紛れもない事実なんです」

「……なるほど……わかりました。では、此方の資料に  
ある情報、ちゃんとお教えますね」

「いいんですか?」

「本当だったら嚴重注意とかになつちやうのかもしれま  
せんけど、ここまで熱意のある方々は、嘘をついている  
とは思えませんから」

「ありがとうございます!」

「じゃあ、こちらが私達が現状調べられる限り集めた情  
報になります」

そこには、一之瀬良子が戦後どうしていたかを事細か  
に書き留めた記録があった。

一之瀬良子は、終戦後すぐに夫が「死んだ」と通告を  
受けた。しかし転居などをするのではなく、もとの家に、  
一之瀬勝と数年の愛を育んだ家に居続けた。しかし、都  
市開発などにより場所を追われ、名古屋市のややはずれ  
にあった小さな家に引越した。再婚をすることなく、た  
だ穏やかに過ごしていたという。長らく事務仕事などを

して働いており、老後まで自立した生活を送っていた。  
そして、一九八三年の十月三十一日に老衰で亡くなった。  
市内の老人施設での最期であった。

「お墓の位置つて、わかりますか」

「ええ。帳簿にも残っていると思います。たしか……あ、  
これです」

そこは、名古屋市内の共同墓地であった。

「ほんとうに、ありがとうございます」

「いえとんでもない。良子さんの所 行つてあげてくだ  
さいね」

「ありがとうございます!」

女性は部屋を後にした。

……一之瀬さんは、堰を切つたようにポロポロと涙を  
流した。言葉をかけるのは蛇足に思えて、しばらくその  
まま、彼の思うままに、そのままにしていた。

……

墓地は、中心部からやや離れた郊外の寺の中にあつた。  
「しっかりとものだったから、生きているうちにちゃんと  
用意していたんだな」

整然と並ぶ墓石を眺めながら、右端から四つ目で目が  
留まった。

「これですか」

「うん、間違いない」

南無阿弥陀仏の文言が彫られた、小さいものだった。  
右側には一之瀬良子の名と、戒名があつた。

「あの」

「なにか?」

「わたし、しばらく歩いていきますから、お二人でゆつく  
り話をしてください」

「いいんですよ。私と良子が再び逢えたことの証人とし



て、ここにいてもらいたいんです」

「そうですね。なら、一緒にいましょうか」

「お願いします」

行きがけに買ったライターと線香を取り出す。あたしは墓石を少しでもきれいにしようと、水を入れた桶と柄杓を探した。入口に掛けてあったそれらを手に、再び良子さんの墓前に向かった。

ただ静かに、墓石を見つめて離れない一之瀬さんがそこにいて、喧騒もどこかに消えたようだった。

「墓石、きれいにしましょうか」

「そうですね」

十分ほどかけてコケや糞を拭き取り、洗い流す。わずかに笑みを浮かべながら作業をする彼の頭の中には、数年だけだった結婚生活を浮かべているのだろうか。

一ノ瀬さんが一束の線香に火を点ける。やや端々が崩れてしまった線香台に、二人で線香を並べた。

手を合わせ、見たことの無い彼女と、隣にいる彼の在りし日を思い、わたしは瞳を閉じた。

「帰ったよ」

「御帰りなぞ」

「まう、軀もぼろになつてしまつたよ」

「あんな場所へ、さいご迄、此の國の為にとつたのでせう」

「うう、御疲れ様でした」

「うん。君はだうしていた」

「変わりなく」

「それなら良かったよ。……少し休みたい」

「そうですね。御煙草は？」

「貰うよ。我慢してゐた」

「彼方には物が届きづらかつたでせうから」

「何か飲み物も欲しい」

「冷えた水を出しますね」

「あとほ」

「欲しい物があればなんなり」

「――」

「……もう少し、時間を御待ちなつて下さい。でも、まじ直ぐです」

※※

「編集長」

なんとか発刊二日前に間に合った。

「できた？」

「ええ。これとあいつの記事を組み合わせて、十日号で発射できます」

「とりあえず目を通してみるから、しばらく待つてな」

「了解です。よろしくお願いします」

編集長のデスクを後にする。後輩もラストスパートと

いった様子だ。さつき買っておいた冷えたコーヒーを渡

す。

「おつかれ」

「お疲れ様です。最終稿、出しました？」

「今しがた。編集長に最終チェックもらつてる」

「僕もあと少しで……。よし、これで締め、と」

「よし行つてこい。俺とお前、今回は一蓮托生だからな」

「わかつてますって。人気連載の最終回と、巷で話題の

トンデモ学者の世紀の大発明。これで今週号は大盛り上

がり、ですよ」

「ああ。世間つてのは狭いもんだな」

「ま、今回はそれが功を奏したつてことですよ」

「その通り。んじゃ、いつてら」

「はいっす」

後輩がデスクを勢いよく出て、編集長の方へと向かう。

俺は、今さつき自分が出してきた記事のデータを、あ

らためて見返すことにした。

これは、これまでの記者人生を懸けた、いや、ひとりの

人間としての、自分なりの集大成でもあった。

失ったもの、新たなもの―記憶喪失者の生活について―  
(最終回・赤江 良平)

はじめに

読者諸氏は、前回の突発的な休載に驚かれたであろう。しかしながら、これは取材を行ってきた山田浩平氏の希望であり、決して他意はないことをここでお断りしておきたい。

さて、簡潔に申し上げると、山田浩平氏は記憶を取り戻したのである。我々の取材を通じ、記憶の断片を着実に思い出していき、すべてを打ち明けていただけることになったのは、先月二十九日のことであった。我々の方みで行うという条件の下、ついに取材を敢行した次第である。

なお、山田浩平氏の正体については、プライバシー保護の観点から、本名や一定の個人情報伏せさせていた

山田浩平は無論本名ではない。戸籍登録などに際して、法的根拠はあるものの、あくまで仮名であった。彼の本名はI・M氏であり、中部地方の出身であった。

そしてここで、読者諸氏には信じがたい事実を話さなければいけない。

I・M氏は現代に生まれた人物ではないのである。

にわかには信じがたい話であるが、彼はタイムスリップを経て現代に来ることとなってしまったのである。

では彼は、どの時代から来たのか、そしてどのようにしてこの現代へと来たのかを説明していきたい。

## I・M氏の経歴

読者諸氏は、太平洋戦争におけるニューギニア戦線をご存知であろうか。南太平洋はオーストラリアの僅かに北方にある島国、ニューギニア。この地は太平洋戦争時に日本が一時占領していた領域であった。その後、太平洋戦争全体を通じて、日本軍とアメリカおよびオーストラリア軍を中心とした連合軍とが激烈な戦いを行った戦場でもある。

I・M氏は、この地で戦った日本兵の一人なのである。彼の記憶は、当時の生々しく痛ましい戦争の記憶を克明に伝えてきた。本章では、その概略と、既存の戦史研究に基づく解説を行っていききたい。

I・M氏は、ニューギニア戦の日本軍における中心部隊であった第十八軍とよばれる軍団のうち、第二十師団に所属する下士官であった。開戦当初こそ、飛行場の要所として両軍がしのぎを削ることとなるラバウルやアドミラルティ諸島、さらに南方のガダルカナル島などにまで侵攻し、見事に上陸と占領に成功していた。しかしながら、1942年のミッドウェー海戦での大敗から、日本軍の勢力は徐々に、かつ確実に削られていくこととなった。

彼の所属した第十八軍第二十師団は、それ以前に日本軍が主要拠点としていた、ニューギニア島東部のラエとサラモアと呼ばれる地域が、連合軍に奪取され、その後そこからやや北部にある日本軍が船舶の拠点としていたフィンシュハーヘンへと侵攻されたことを受け、大多数がそこへと派遣される。これはフィンシュハーヘンの敵い(1943年9月から12月)と呼ばれる

しかしながら、継続的な戦闘も空しく、効果的な打撃を与えられず、それどころか、連合軍が攻勢を増し、第

二十師団はまずニューギニア島北岸のキアリとよばれる地域までの撤退を余儀なくされた。

しかし連合軍の攻勢は止まなかった。大本営(司令部)のことで考えていた(きたい)が置かれていたのは、キアリからさらに北海岸を西進した場所にある、マダンと呼ばれる場所であった。第二十師団はここを目指した撤退を続けていたが、マダンとキアリの中間にあるグンビ岬と呼ばれる地点が、1944年1月2日に連合軍により上陸されてしまう。これにより安定した海岸線を通るルートでの撤退が不可能となり、海岸線から南に並行する山脈を介した撤退を余儀なくされたのである。

そこで第二十師団には、山脈の中腹を介した撤退を行うこととなる。これはガリ転進と呼ばれる。

さて、話をI・M氏に戻そう。彼が鮮明に語ってくれたのは、このガリ転進の最中である。

ガリ転進はあまりに過酷であり、物資枯渇による栄養失調や過労による死者も後を絶たなかった。以下に、彼の話を書き記す。

……

こうして、いまだ続く海岸線で辛うじて見つけた、サゴヤシの実を採取しようとしたところで、彼に事件が起こる。窪地に足を滑らせ、落下してしまったのである。彼を案ずる部下の声のなか、落下の衝撃により、意識を失ってしまう。

そして彼が目覚めると、そこは奥多摩の森林の中であった。にわかには信じがたい状況であるが、彼が偶然見つけた山小屋らしき建物で、「多摩」の文字が入ったパンフレットをよんでいることから、これは事実である

と考えられる。

そして彼はどこに行くべきかもわからず、あてもなくさまよい続けた。そしてかねてからの栄養失調と脱水症状により、都心目前で力尽きてしまったということである。

……

おわりに

ここまでを語った後、私に向けて必ずこの記録と記憶を記事にしてほしいと強く願っていた。

編集後記のような話になってしまいが、当初この記憶と記録を掲載できるか否か非常に難しいところであった。最初に申し上げた通り、過去からタイムスリップしてきた人物の記憶という、曲がりなりにも何十年と続いてきた雑誌上に掲載するには似つかわしくない内容によるものである。しかしながら、この後に掲載している記事を是非読んでいただきたい。この記事を読むことで、私や編集室が本連載の最終回として、ここまで記載してきた内容を公開するに至ったと言っても過言ではない。

もし、あなたが記憶を失くした時、もしくははなにかしらの作用により时空の狭間を漂うこととなったとき。たとえそのような事態に巻き込まれることがなかったとしても、彼が、I・M氏という存在がいるということを忘れないでほしい。彼は、現に今を生きている。過去と現在を今、生きているのである。

(2020・8・8)

そして、後輩の記事も手元にやってきた。

世にも奇妙な時間層位理論を発表

(井上陽介)

先日から動向が謎に包まれてきたジョン・カーター氏であったが、ついに全世界に向けて自らの発見を発表した。一部ではリークがなされたものの、残念ながら日本の放送局では放映時間が深夜であったことや、先日の全世界に向けた会見の異常性により、生中継などはほとんどなされなかった。しかしこれは見逃すべきではない内容であることを、読者諸氏においては知っておいてほしい。

ジョン・カーター氏は、当日助手数人と共に会見場に現れた。そして開始早々、以下のような発言を行った。

「我々人類の長らくの夢のひとつ。そこに、時間を行ったり来たりする時間旅行の夢はなかるうか」

彼は物々しい資料の数と共に、彼の提唱する時間相違理論を解説していった。

カーター氏いわく、時間は一方向的に流れていくものではあるものの、それが実体として存在し、地層の様に累重していくものとした。この実体は決してどこでも見られるものではなく、宇宙全体のいずか瞬間ごと形成されているものではないかとしている。

そして実体としての時間がごくまれに地球上で形成され、地中や世界のどこかしらに在る時期とある時期を蹴つ接する「リンク」と呼ばれる現象の存在が確認できるとした。

地中や物質内に形成された「リンク」に接触する可能性は人類誰にでもありえるものであり、何かしらの事故や偶然生じた瞬間に接触することで時間の行き来を行うことがあり得るとした。

本記事では、さらにわかりやすく、この理論についてを

概説していきたいと思う。専門知識や理系科目が苦手だったあなたにも、ぜひ読んでいただきたい。

……

おわりに

この発表中にも、既にあまりに浮世離れたこの理論の発表に呆れかえっている記者陣や有識者らも多かった。しかし、私達はこの理論をながしるにはならぬいではなかるうか。そう、赤江記者の連載記事である。この最終回では、I・M氏がニューギニア戦の目前から現代日本へとやってきた人物であると示した。そう、この現象こそ、時間層位理論に巻き込まれたがために、このような事態になっているのではないだろうか。

読者諸氏においては、ぜひこのジョン・カーター氏の発言を馬鹿にせず、いつかの世界で輝く理論となるであろうと思いつながら、この話を覚えていてほしい。

かつて、宗教戦争で失われた科学や、地動説・天動説論争などがあったように、この一蹴されてもおかしくなかった理論が、世界を動かす日は、やってくるのではないだろうか。

そして。

結局この八月十日号の売り上げは微増したものの、爆発的に読まれるほどにまではならなかった。けれど、別にいい気がする。俺も、山田浩平、つまり一ノ瀬勝も、ひとつのケリをつけることができたのだ。彼は戦争の惨禍から現代に飛ばされた、悲しくもたくましい旅人だった。彼は、いま、どうしているのだろうか。

彼は、八月十五日に姿を消した。

皮肉にも、この日に施設から姿を消した。身分証などをすべて置いたまま、最後に

「少し、出かけてきます」

とだけ言って、どこかへ行ってしまった。行方不明者として搜索された。近隣のコンビニや各種商業施設の防犯カメラに、その姿はいくつか映っていた。だが、失踪からわずか五時間後の、施設から四キロほどのコンビニの前を通ったのを最後に、足取りが不明になった。

戻ってくると願い、園長先生や赤江良平、娘の紅羽は彼の部屋で幾日も待ち続けた。だが、戻ってくるどころか、連絡の一本も無かった。

数日して、施設に宛てて一通の手紙が届いた。白い便せんに、繊細な字で書かれたその手紙で、たしかに彼がこの手紙を書いたことがわかった。だが、待ち望んだ言葉は、どこにもなかった。だが、彼の心には、確実にひとつの意思が浮かんでいるのだった。

赤江親子・園長先生へ

突然消えてしまったことをお詫びします。

けれど、私にとつて此の現代日本を生きるには現実があまりにも非情であり、どうしても逃避の旅を始めなければならぬと思ひました次第です。

今日は八月十五日。さう、終戦の日です。ですが矢張り、私が此の事実を受け入れるのは難しいと感じてしまひました。あの戦線にいた第二十師団の皆の顔が、眠る度に浮かぶやうになつたのは、かなり早い段階でした。最初は此の事実が余りにも突拍子が無いものであり、御話しできなひと思つていました。

ですが、赤江親子が夫に私の為に献身的であつた御蔭で、話す覚悟を決められた次第です。

赤江良平記者。本当に最後まで私の話を真摯に聞いて下さり、本当に有難う御座りました。私が此の事実を記録する可きであると思つた、其の意思を大切にして頂ける貴方が居てくれて、本当に嬉しかったです。連載の最終回、拝読しました。私の言葉を、可能な限り其の俚書いて下さり、私の記憶を確りと文字にして頂いた事、本当に有難いと思ひました。数か月に渡り、本当に有難う御座りました。

赤江紅羽さん。私の真意を一番見抜いてくれた貴方。確かに独断行動は危ない処もあつたでせう。けれど、覚悟の上で連絡や追加調査までしてくれましたね。本当に有難う。貴方には伝えましたが、愛した妻の生き写しと共に居るやうで、不思議な感覚に襲われてみました。でも、其れが本当に良子との生活を思ひ返してゐました。

園長先生。日日の生活を支えて戴き、感謝してもし切れません。此の数か月間のうち、貴方が居なければ真面目な生活を送っていたかどうか分かりません。

最後に。まう、探しても私は何処にも居ないと考えてください。但だ、自殺するとかさういう訳ではなく、第二十師団のことや、良子の事を思い乍ら、何処を目指すといふ訳でもなく、唯だ歩いて行きたいと思つたのです。先ずは、嘗て私が見た日本と、今の日本がどう違つていいのか、其れを克明に記憶の中に刻んでいきたいのです。私が思ふに、私が様々な事象を記憶していくと云ふ事は、間接的に日本へ帰れなかつた人たちを含めた第二十師団の皆や、私との再会が出来なかつた良子に、新しい日本を伝える事になるのではなひのか、と思ふのです。其れが私の新しい勤め、新しいイチノセマサルとしての為す可き行動だと思ふのです。

嘗ての私をおぼえてくれた皆様のご多幸をお祈りして

私は。

俺は。

あたしは。

嘗ての——を、更新し続ける。

注一…昭和十九年十月、マッカーサー率いるアメリカ（以下、米）およびオーストラリア（以下、豪軍は、ついに日本本土攻撃にあたる南方路の主要拠点となることになるフィリピンへの侵攻を開始した。しかしそれ以前に、より南東にあたるニューギニアを含むいくつかの諸島への侵攻と獲得をせねばならなかった（いわゆるマッカーサー・ルート）。近隣のアドミラルティ諸島（図版参照のこと）への到達と侵攻は昭和十九年二月のことであったが、太平洋戦争開始時から展開していたこのニューギニア戦線の確定的な勝利を得たのは同年の八月であり、約四年にわたる激戦が繰り広げられた。このため、俗には「日本が最も最前線を継続した戦線」などとも呼称され、その泥濘にはまつた戦闘を回想させる。

注二（ラバウル）…現在のニューブリテン島北部のこと。いわゆる「南方戦線」（なお既存研究では陸軍の言うものと、海軍の言うものには地域範囲の差異があり、後者ではニューギニアまでも含まれている）における重要拠点の一つであった。その理由として、この地域が海軍側には南太平洋地域の防衛における非常に重要なエリアであること、さらに対英の宣戦布告により、当時英国連邦のもとにあつた豪の侵攻の可能性が大いにあつたからである。

注三（ラバウル侵攻）…昭和十七年一月八日、前月に占領したグアム島の司令部から当地にある東・西飛行場攻略の命令が出たことに端を発する戦闘。同年同月二十三日までに、防衛にあつてはいた豪軍を撃破し、西飛行場の占拠に成功する。

注四…ラバウル獲得後、海軍は半ば強引に豪軍の勢力を封じ込めるためとし、いわゆる「連続攻勢主義」を取り、ニューギニア島南部や豪領の島々へと攻撃を仕掛けた。その中で、ニューギニア本島への意識が向くこととなり、先述のニューギニア戦線構築のきっかけとなったとされる。

注五…ニューギニア島南部にあたるポートモレスビー侵攻ⅡMO作戦のことか。日本軍は本地に対して海上から侵攻するため、ニューギニア西部のソロモン諸島南岸、いわゆる珊瑚海に空母二隻（翔鶴・瑞鶴）を中核とした機動部隊を展開。そこで米機動部隊（おもに空母レキシントンとヨークタウン）と接敵し、珊瑚海海戦が始まる（昭和十七年五月七日）。結果として、被害は日本側が主に翔鶴の大破のみで済んだために優勢勝ちとみられたが、肝心の上陸部隊は護衛にあつた軽空母「祥鳳」が撃沈されたことで撤退。結果としては作戦失敗であつたと評価されている。

注六…一九三四年（昭和九年・皇紀二五九四年）に大日本帝国陸軍が採用した自動拳銃。開発以前は将校准士官用の拳銃において先行して開発された十四年式拳銃が大型であることや、輸入品などが多かつたため、整備にコストや手間が大きく掛かつていた。そのため、この対策として国産拳銃への統一化を図るうえで開発されたのが本銃であつた。形状や内部機構が完全に日本独自の技術で形成されており、内部構造に仕込まれるべき機構が露出している。とくにシアー（逆鉤）と呼ばれるトリガーとフアイアリングピンを接続・連動させる部品のそれが特徴的であり、安全性に欠ける部分も見られた。使用する弾丸

は、八ミリ南部弾とよばれる当時日本国内でポピュラーだった弾薬。当初は将校や上級士官などの護身用に向けられたものであつたが、携行火器を欲していた航空技師や機工兵などにも提供された。下士官であつた一之瀬が持つことは本来珍しい事態であつたが、戦争末期である事などから急遽支給などにおいて一部変更が生じていた可能性がある。

注七…ウエワク。ニューギニア島中央北部にある沿岸の地域。昭和十七年末から日本軍側の輸送船団の発着を担う主要港になった。昭和十七年末は単船による突入が開始されたあと、翌年三月に本格的な輸送船団がはじめて到着。昭和十九年三月十八日の第二十二次まで継続。とくに十八年末からは、本来主要港であつた場所（ハンサ、ウエワクよりやや東方に位置する）の使用が困難になつたため、とくに活用が行われるようになった。

注八…第二七野戦貨物廠のこと。昭和十八年三月に編成同年五月にウエワクに先遣隊が到着。ウエワクからの物資を統括し、逐次諸部隊への補給を行った。

注九（安達中將）…安達二十三（あだち・はたぞう）。陸軍中將。ニューギニア戦線における日本側の主力部隊であつた第十八軍の司令官。

注十（第十八軍）…昭和十七年十一月に編成された日本陸軍の軍隊のひとつ。ニューギニア戦線の作戦の主要部隊として、ニューギニア北東部から北西部での展開を続けた。通称「猛」集団。

注十一(マダンまで逃がす)…ガリ転進のこと。昭和十九

年一月時点で、第十八軍のうちの第二十師団(通称「朝

兵団、昭和十九年一月時点での師団長は片桐茂中将ら

と第五一師団(通称「基」兵団、師団長は中野英光中将)

らは、前者が東部のフィンシユハーヘンから連合軍との

接敵を経て(フィンシユハーヘンの戦い)北東部のシオと

よばれる地点へ向かっており、後者は「サラワケット越

え」(昭和十七年三月の作戦により上陸を果たし、長

らく日本軍の主要拠点になっていたニューギニア東部に

ある都市・ラエが、昭和十八年九月十六日に連合軍側に

より奪取されたために行われた、ニューギニア北部のキ

アリへとサラワケット山脈を越えての約百二十キロメー

トルにわたる後退を経て、北部のキアリで回復を図っ

ていた。安達中将は後述のグンビ岬侵攻を受け、海岸線

を西に進んで第十八軍の司令部があったマダンまでの後

退を命令した。それに基づき、まずは中間地点ともいえ

る目標としてガリを設定し、大規模な「転進」を行うこ

ととなった。

注十二…昭和十九年一月二日、米軍はニューギニア北部

の海であるビスマルク海やその制空権を確保するため、

グンビ岬(ただし米・豪はサイドルと呼称)への侵攻を行

い、容易く成功している(容易になった原因として、日

本軍側が連合国軍の次なる侵攻はラバウルとの交通を繋

ぐ港であり、第十八軍司令部のあったマダンよりさらに

西方に位置するハンサ湾であると踏み、そこに主力を割

いたためであった)。グンビ岬はマダンと各師団が經由

したキアリのちょうど中間地点に位置する。これにより、

マダンへの後退が困難となってしまう、結局は注十一で

示した「転進」は一旦グンビ岬手前のガリまでの後退が

目標となった。

注十三…ガリ転進を受けた第二十師団は、まず經由地点

としてシオを目指していた。さらに、その接収を図るた

めに第十八軍所属の第四一師団(通称「河」兵団、昭和

十九年一月時点での師団長は真野五郎中将)傘下の歩兵

第二三八連隊がシオ目前に收容陣地を構築している。こ

の間、豪軍が三度にわたり攻撃を受けたが、一進一退の

攻防を繰り返して陣地を維持し続けた。

注十四…1952年に発布された徴兵令をすべて改正する

ため、1957年4月1日発布、同年12月1日に施工され

た法律。原則日本国民の男子はすべて兵役に服するとし、

諸兵役を課されるとしている。ただし志願兵や一定の前

科を有する場合は兵役に服することが出来ないとしていた。

ちなみに徴兵検査については、甲・乙・丙(「身体上極

めて欠陥の多い者」)・丁(「目・口が不自由な者、精神

に障害を持つ者」)・戊(「病中または病後」で兵役の適

否の判断が出来ない者の判定区分が有された。基本的

に甲種に選ばれることが日本男子の誇りとされることも

あり、乙種以下になったことを悔いる文化もあったとさ

れる。

注十五…安達二十三中将は戦局などを鑑みることに長け

ており、部下たちの信頼も厚かった。実際に示されたと

される安達の方針としては、昭和十九年八月以降におけ

る戦線維持のため(これ以前から補給線がほとんど絶た

れており、栄養失調や餓死が頻発していた)の持久体制

指令がある。しかし指令以前にも、開拓などといった自

給自足のためのハウツーや病人運搬法などの方式を示し

ており、この傾向は顕著に見えていたとされる。

注十六…軽戦車。米で開発された軽戦車であるが、

第二次世界大戦中に連合国軍にひろくもたらされた。昭

和十九年時点で、バリエーションハ主に2つある。ひと

つは初期型にあたるM3であり、前面の断面が寝かせ

た多くの字状になることが特徴的である。もうひとつは

M3aであり、前面が8度の傾斜装甲になっていること

で判別が可能。いずれも、主砲はM6 37mm戦車砲。こ

の時点での戦車砲としては非常に貧弱であったが、ソフ

トターゲット(装甲車や陣地など)に対しては十分な威力

を有していた。ちなみに、太平洋戦線の各所では戦争初

期から一定数の鹵獲が行われ、前線での活躍も見られた。

※注十六の補遺※

軽戦車の主砲では、基本的に当時存在した戦車の撃

破は非常に難しい。しかしながら、日本軍がおもに使用

した戦車(九七式中戦車・チハなど)は旧時代的な歩兵随

伴をコンセプトに設計されている。このため、装甲が薄

く主砲が貧弱であって対戦車戦では圧倒的に弱く、この

ような軽戦車に対しても撃破される可能性があった。

さらに、この際に豪軍が導入した戦車としては、M3の

後継車両であるM3軽戦車ではないかと考えられる。M3

軽戦車はガソリンエンジンの活用や箱型車体などが外見

的な差異である。装備はM3と大差ないが、車体の変更

などから砲弾搭載数が増加しており、継戦能力が高まっ

ている。ここで一之瀬がM3の名を出しているのは、日

本軍側にも馴染みがあったからであるとされる。

注十七…豪軍は、英国連邦軍として北アフリカ戦線にも

展開していた。この際、イタリア軍が使用していた中戦車であるM1139を鹵獲しており、一部利用している。ただし太平洋戦線に運搬されて使用されたことは無く、何かの聞き間違いか勘違いであると考えられる。

注十八…かつて販売されていた煙草「ゴールデンバット」の、昭和十五年から昭和二十四年までの別称。この名称に変わった原因は、戦間期日本における敵性語として挙げられたためである。ちなみに当時の価格は戦争期でも5銭と、一般販売されている煙草の中で最も安かった。このため低所得者層を中心に人気の煙草であり、著名人のなかでは芥川龍之介や太宰治らが吸っていたことでも知られる。

注十九…三八式歩兵銃。日本軍の主力小銃。以前より使用されていた三十年式歩兵銃が、砂塵や複雑な機構により故障が頻発していたことから、故障しづらい機構を搭載することを目的として開発された。名称は明治二十八年の仮正式制定に由来する。昭和十三年には後継である九九式小銃が登場し配備が進行していたが、当時すでに資材の枯渇などから完全には配備されず、結果として第二次世界大戦の終結まで使用された。

注二十…八九式重擲弾筒。大正十一年から開発が開始され、昭和四年(皇紀二千五百八十九年)に仮正式採用、昭和二十年まで生産された小隊用軽迫撃砲。射撃方法としては、まず底部の駐板を地面に当てて立てる。その後およそ射角四五度にしたあと、擲弾を入れた前方の太い筒(筒身)の後部にある整度器を回すことで射距離を調整する(これは撃発機構の上下を調整し、擲弾の筒身内部の

保持距離を調整することで射距離を調整する機構である)。その後、筒身の支柱である柄楨にある引鉄を用いて発射する。太平洋戦争時は有効射程距離が約六百八十から八百メートル(後者は有翼弾を用いた場合)、着弾時の有効半径約十メートル、かつ小型で安易に携帯可能な日本軍の兵器としてとりわけ米軍に注目され恐れられたとされる。

注二十一…九二式重機関銃。先行する三年式機関銃は射程および威力が乏しく、おもに海外で一般的だった口径七ミリから八ミリの機関銃の開発が急がれた。その折陸軍航空部隊は独自でこれを開発・導入に成功しており、これに触発された日本陸軍は三年式機関銃をベースとして先述の理想的な口径をもつ機関銃として本銃を開発した。名称は正式採用された昭和八年、つまり皇紀二千五百九十二年に由来する。本銃は、給弾方式が保弾板とよばれる保持具に弾薬(七・七ミリ九二式普通実砲)三十発を並べて設置し、本体左側面に差し込む独自の方式を採用している。内部機構などは先行した三年式機関銃がほぼそのまま口径を大きくしたようなものであり、頑丈さや命中精度の高さが特徴的である。なお、先述の給弾方式は弾薬が少なくなるほど発射速度が速くなる(平均は毎分5発、これは諸外国の同時期の機関銃の発射速度としてかなり遅い。しかしこれにより安定した命中精度を保った)こととその発射音から、米軍はウッドペッカーキツツキのあだ名をつけていた。

注二十二…九九式軽機関銃のことか。昭和十四年(皇紀二千五百九十六年)に設計された大日本帝国陸軍の軽機関銃。ベースは先行する九六式軽機関銃であるが、使用

弾薬を大口徑化(注二十一で示した九二式重機関銃と同じ七・七ミリ九二式普通実砲)している。ベース自体が優秀な軽機関銃であったこと、さらに使用弾薬である九二式普通実砲の火薬量が比較的少量(これは省資源を考へねばならなかった日本ならではの特質であるともいえる)であったため、命中精度や総合的な信頼性も高く、前線での評価も高かった。

注二十三…二十師団の收容陣地を構築していた場所。位置としてはシオから僅かに東方にあたる。

本注釈について、Wikipediaのほか、以下の参考文献を使用したしました。

田中宏巳 2009 『マッカーサーと戦った日本軍―ニューギニア戦の記録』ゆまに書房

〈おわりに〉

如何だったでしょうか。

私の存在をほとんど知らない方も結構いらっしゃるようですので、自己紹介がてら私自身の自己紹介をば。

中根辰榮(なかね・たつえい)と申します。しがな旧字体を使う作者です。

本作品は、二年次の夏号より連載を開始しました。当初は、先日長期連載を終えられました南風こまち先生とほぼ同時に連載を開始し、私の或る種の最終制作へと繋がる作品に為ると思っておりました。

そして、四年間で最後の投稿に、確りと連載の最終話を出せた事、非常に嬉しく思います。

当初は、「記憶喪失」と、こうしたいという淡いプロットだけを片手に握り締めて始めた連載でしたが、なんと挿絵まで入ったのとなりました。

挿絵に関しては、作者であります夏樹先生(現・三年の石橋さん)にご依頼して製作して頂きました。この場をお借りしまして、謝辞を述べさせていただきます。本当に有難う御座いました。

では、作品について簡単に述べていきたいと思います。まず謝らなければならないのは、途中で日付のロジックが狂っていたことに気づき、訂正版ということで今回全作品を掲載し直した事です。単純に私が数字に弱すぎる事に起因しています。大変申し訳ございません。

作品のストーリーですが、基本的に二年次時点での構想と殆ど変わらずに完成できました。数年前の私を褒めたい数少ない点であります。

何故「記憶喪失」だったのか、という話ですが、これは克明に覚えていません。第一話で赤江良平が、たまたま

テレビ番組で記憶喪失を取り扱った番組を観たから、連載の草案として記憶喪失を出してみた、という内容があったと思います。これが実はそのまま私が取り扱った理由になっていて、私が数年前に同じような番組を観たから、ということですね。たしかその時は生活に不可欠な記憶すらも消えて、食事や排せつなどといった生理的活動すらもままならなくなった方の話だったと思います。

ほとんど変更がなかったプロットも、片時も頭から離れず、文字に起こしたりしていたわけではありません。ただ、伏線や時系列については逐一メモをしていました(それなのに何で日付を間違ったんだとかいうツツコミは受け付けません)。

さて、これで私の執筆人生にひとつのピリオドが打たれました。本当に楽しい四年間でした。いろいろな先輩や同輩、後輩に出会い、お互いに刺激し合い、「宮上」や合宿をした記憶が今も離れません。昨年度以降は残念なことも多かったですが、それもまた人生です。

川の流れるように いくつも時代は過ぎて  
川の流れるように ゆるやかに空が黄昏に染まるだけ

四年間にもいよいよ終わりが近づいてきました。ここで申し上げなければならないことがあります。本作品を持ちまして、中根辰榮のペンネームを、完全に使用しなくすることとしました。理由については、遥先生にだけ申し上げておりますが、然るべき時に皆様にちゃんとお伝えしようと思えます。

それでは、またいつかの作品の場で会える日を心待ちにしております。ご愛顧、本当に有難う御座いました。

二〇二二・二・十三

四百四

完

中根辰榮 此処に眠る

中根辰榮



